

法政と社会学

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林

(巻 / Volume)

64

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

216

(終了ページ / End Page)

50

(発行年 / Year)

2017-07

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021241>

法政と社会学

宮 永 孝

はじめに

- 一 日本における社会学ことはじめ
- 一 武家屋敷町の破屋（はあく）（あばらや）
- 一 「東京法学社」の誕生
- 一 「和仏法律学校」の教頭ボアソナードの講演
——「日本における労働問題」
- 一 本学における社会学教育の先駆者
——高山兼吉、大場実治、高田保馬、松本潤一郎
- 一 明治末年から昭和四十年代までの本学の社会学
- 一 法政大学における社会学のあゆみ——略年表
あとがき

はじめに

アジアの東隅に位置する小さな国——日本に生まれたわが国の民衆は、大むかしから権利とか自由の何たるかも知らず、専制体制のもとで、ちぢこまって生きてきた。

封建の世がおわり、維新をむかえ、やっと一種の解放感を味わったと思ったら、こんどは強力な中央集権国家のわくの中に押しこめられた。明治維新によって、政治や社会が新しくなり、民衆のくらしもよくなるはずであったが、その期待はずれた。じっさい社会の変革にさいして変わったのは、統治者の顔だけであった。

ここでいう権利とは、ひとがこの社会で生きてゆくために必要な道徳上の請求をいい、自由とは好きかってなことをすることではなく、他から



内田栄造教授

の圧力、強制、束縛をうけず、じぶんの意志で、じぶんの責任において、生活上の健全な目的やつとめを果す行為である。

法政の創立者らは、人権思想や法の意識のおう盛な法律家であると同時に、公正な社会の番人でもあった。かれらは社会集団のなかで、人の権利や自由や利害を守るために必要な法曹を養成するために、さ、やかな私塾をつくった。かれらの志しと抱負——ひとの権利と自由を尊ぶ精神——万人にたいする共感と批判精神などは、いまま脈々と生きており、その精神をつちかったものは、広義の社会学教育であったとおもわれる。

「法政大学憲章」——自由を生き抜く実践知——のおおもとは、社会学なのである。

日本の旧憲法は、民衆によって作られたものでなく、天皇とその官僚によってつくられ、国民に押しつけたものである。立憲政治の美名のもとに、日本国民の自由は、合法的にうばわれたが、わが国の帝国主義的な独裁制の発展において、天皇制の果たした役割はじつに大きかったといえる。

あと数年もすれば、法政大学は創立百四十年にならんとする。この長い伝統をもつ大学の人気学部のひとつに社会学部があり、毎年、国内外から多くの受験生をあつめ、入学の難易度も近年いちじるしく高まっている。⁽¹⁾法政大学の法政とは、法律と政治の意である。が、だれがいったこの名称を考えつき、それを採用したものが明らかでない。

戦前、予科のドイツ語の名物教師に内田百閒^{ひゃっけん}（一八八九—一九七一、本名・栄造、小説家・随筆家）という、人をよく笑わせていた人物がいた。あるときかれは法政大学という名称（名前）は不相当であるとおもい、それを変えねばならぬと思った。そこでかれは法政の音をとって、「鳳生^{ほうせい}」と書いたり、予科（本科に入るための予備の課程、むかしの教養課程）を「扶桑^{ふそう}（東方の国、日本の別名の意）高等学校」としたり、大学名を「国民大学」としたらよからうといったり、半紙をもってきて、いろいろ案を書いた。

それを仲間といっしょに当時の松室^{まつむろ} 致^{いたす}（一八五二—一九三一、司法省法学校出身、のち枢密院顧問官⁽²⁾）学長の部屋にもって行って壁にはりつけた。学長はそれを見てはじめ笑っていたようだが、あとで

（いたずらも、いいかげんにせい！）

と、心の中では烈火のごとく怒ったらしい。⁽³⁾



法政大学学長：松室 致

一 日本における社会学ことはじめ

筆者がこの稿において描こうとするものは、この伝統ある法政大学における「社会学」のあゆみ——その創始からこんにちまでの教育と研究の歴史を振りかえることである。いわばだれがいつ社会学系の科目を担当し、それを講義してきたかということである。法政大学の創立は、明治十三年（一八八〇）四月のこととされている。

この学校では、早くから経済学の講座がもうけられていたが、純正社会学の設置は、他の似たような系統の学校とくらべてみたとき、そのスタートがおそいのである。もともと法政の母体は法律の学校であるから、純正社会学にたいする関心はうすかったものか。

いずれにせよ、社会学は明治初年に外国からわが国に輸入された新渡の学問であるが、まずその伝来の沿革を略述しておこう。

日本人ではじめて社会学——オーギュスト・コントの三段階説とその実証哲学にふれたのは西 周（一八二九〜九七、明治期の官僚学者）であり、その私塾（「育英社」）においてであった。ときに明治三年（一八七〇）十一月ごろと考えられる。西はジョージ・ヘンリー・ルイス（一八一七〜七八、イギリスの哲学者、批評家）の『列伝哲学史』（*Biographical History of Philosophy*）中の「オーギュスト・コント」(第二章 六四三〜六五六頁)を要約して、塾生にかたった。ついで慶応義塾の福沢諭吉が、明治八年（一八七五）五月中旬から翌九年（一八七六）三月中旬にかけて、——ほぼ一ヶ年ほどかかって——ハーバート・スペンサーの『社会学研究』（*Herbert Spencer: The Study of Sociology*. D. Appleton & Co.,

New York, 1874, 423pp.）を讀し、のちにそれについて講義した。

中村正直（一八三二〜九一、明治前期の啓蒙学者、号は敬字）がひらいた家塾

「同人社」（小石川江戸川町一七番地）の英学本科二等というクラスでは、——

スペンサーの『社会学研究』（*The Study of Sociology*）

“ 『社会学原理』（*Principle of Sociology*, 2vols.）の一部

などを教材として教えた。その時期は、明治九年（一八七六）以降のことと考え

られる。

慶応義塾では、明治十一年（一八七八）前後、門野幾之進がスペンサーの『社会学研究』の訳読を塾生におしえた。

このようにわが国においてはじめて社会学に注目し、それを講じたのは、官学（大学）においてでなく、私学（私塾）であったことは忘れてはならぬ点である。つぎに草創期——社会学をおしえた私立の諸学校にふれておく。

慶応義塾（のちの慶応義塾大学）……………安政五年（一八五八）の冬、創立。明治十年代、社会学は独立した教科でなく、訳読の一科目にすぎなかった。

正科の科目となったのは、明治二十三年（一八九〇）一月以降。

専修学校（のちの専修大学）……………明治十三年（一八八〇）九月、創立。明治十六年（一八八三）七月——法律学科の第三年後期において、世

態学”（社会学）が講じられている。担当者は文学士・辰巳小次郎か。

東京専門学校（のちの早稲田大学）……………明治十五年（一八八二）十月、創立。同年の政治学科二年生に、スペンサーの社会学を講述した。担当者は高

田早苗（一八六〇～一九三八、政治家、早大総長）。のち坪内逍遙も明治十八年（一八八五）ごろ、社会学を

おしえた。

哲学館（のちの東洋大学）……………明治二十年（一八八七）九月、創立。創立当時、専修学校の辰巳小二郎が、普通科の正科の科目として社会学

をおしえた。

関西学院（のちの関西学院大学）……………明治二十二年（一八八九）九月、創立。明治四十四年（一九一一）二月、本科生の随意科目として、社会学を

おしえた。

日本法律学校（のちの日本大学）……………明治二十二年（一八八九）、創立。大正九年（一九二〇）四月、大学に昇格したのち、大学部に“法文学部社

会科（のちの社会学科）”をもうけた。



飯田橋からみた法政大学の
ボアソナード・タワー

明治期——わが国の高等教育機関の“大学”（東京大学）において、正式に社会学を講じたのは、つぎの四名である。

- アーネスト・F・フェノロサ（一八五三）……………明治十一年（一八七八）八月〜同十九年（一八八六）にいたる八カ年。スペンサーの『社会学原
一九〇八、アメリカの教育家、日本美術 論』(Principle of Sociology, 第一卷「一八七六」)、『社会静学』(Social Statics, 1850)、モーガンの
『古代社会論』(Ancient Society, 1850)などを講じた。
研究者)
- 外山正一（一八四八〜一九〇〇）、元幕臣、……………明治十九年（一八八六）〜同三十年（一八九七）七月まで、スペンサーの社会学を講義した。
明治期の教育家、のち東京帝大総長)
- 高木正義（一八六三〜一九三二）……………明治三十年（一八九七）〜同三十三年（一九〇〇）まで、「社会学特殊講義」を担当。
建部遯吾（一八七一〜一九四五）……………明治三十一年（一八九八）東大社会学講座の初代担当教授となった。⁴⁾

その他の官立の諸学校のうち、東京高等商業学校（のちの一ツ橋大学）の専門部では、大正四年（一九一五）に社会学の講座が置かれた。担当者
者は建部遯吾。京都帝国大学は明治三十年（一八九七）の創立であり、同四十年（一九〇七）五月に社会学の講座がもうけられた。担当者は米田

庄太郎（一八七三〜一九四五）であった。九州帝国大学の創立は、明治四十三年（一九一〇）のことだが、大正十三年（一九二四）九月、社会学の講座が設置された。

江戸城の外堀に面したところに、天にむかってぬっとつき出たように建っている高層ビルがあるが、これこそ名実ともに大手私大の有力校のひとつ——法政大学のこんにちの姿である。百数十年まえに私塾から出発した本学が、いまの偉容をだれが想像したであろうか。

一 武家屋敷町の破屋（あばらや）

幕末に芝の愛宕山（あたご）から江戸の街を撮った写真がのこされているが、それを見ると、当時の江戸の町なみは、おもに大名や旗本（禄高一万石以下で御目見^{おめみえ}以上の家格で、知行地の上納米でくらす者）や御家人（將軍直属の下級武士、幕府から支給される蔵米でくらす者）の家敷から成っていたことがわかる。しかもふしぎなのは、いまの東京の街とおなじように、家がほとんどすきまもなく立ち並んでいることである。江戸はサムライの町であった。武家が占めていた土地は、寺社地とあわせると八十四パーセント、町人地はわずかに十六パーセントであった。徳川の家臣は三万人あまり。その半数は、維新後静岡に移住したため、武家地のようすがすっかり変わった。⁽⁵⁾ 室町後期の武将・太田道灌（一四三二〜八六）が、長禄元年（一四五七）江戸城をきざしたころ、江戸はまだ武蔵野の荒涼の地にすぎなかったが、徳川氏が当地に幕府をひらくにおよび、漸次開拓がすすみ、元禄年間江戸は人口百万の都市に発展した。ちなみに、“江戸”は、入江のある所の意である（『国語大辞典』小学館）。

しかし、約二六〇年つづいた徳川幕府が瓦解すると、江戸の武家屋敷から、炊事のけむりが絶え、敷地は雑草がおい茂り、つる草がまといからまる所となった。大名は家族、家臣らをとめない邸宅を引き払うと、その本国へ帰った。かれらの中屋敷、下屋敷の樹木は切りたおされ、庭石を取りはずし、菜園（野菜畑）や茶園（茶畑）とする例はけっして少なくなかった。⁽⁶⁾ また大名屋敷の跡地は、官庁とか兵営になった。徳川家は駿府七〇万石をあたえられたが、在来の臣をみなやしなうことはできない。そこで旧臣は、無禄で静岡に移住するか、農夫や商人になるか、明治政府に仕えるか選択をせまられた。⁽⁷⁾

多かったのは無禄移住である。ついで三十俵から二、三百俵取りの微禄の者は、商人になった。これはかなり多かったという。千石以上の旗本のお歴々のばあいは、帰農したり商人になる者はすくなく、旧采地（旧領地）に引っ込むのが多かった。武士階級は百姓に寄生して生きてきたが、禄をはなれたからには、貯えをうしなわぬように、何とか生計を立てねばならなかった。

下町と山の手方面の旧幕臣のなかには、それぞれ商売屋に転身するものもいた。

下町——この語は、低地にある町の意である。商工業にしたがう町家が密集している地域をいう。江戸においては、芝・日本橋かいわいから京橋・神田（小川町、伊賀裏、神保小路）・下谷（現・台東区西部）・浅草・本所（緑町、林町、御竹蔵、石原）・深川あたりを指した。下町に住む幕臣は、御家人（御徒士——旗本よりも身分がひくく、小禄の者）が多かったが、かれらは、つぎのような種々雑多な商売をはじめた。

だんご屋	しるこ屋	すし屋	きそば屋	酔屋 <small>すや</small>	天ぷら屋
茶つけ屋	いも屋	湯屋（ふる屋）			
髪結床（床屋）	寄席（大衆芸能を上演するところ）	骨董屋 <small>こっとうや</small>			
古本屋	炭問屋 <small>すみ</small>				

骨董屋と古本屋をのぞくと、じぶんでやるのではなく、人を雇ってやった。いちばん多かったのは骨董屋であり、じぶんの家にある古道具を売るのであるから、資本はいらなかった。骨董品を売るために、屋敷窓のそばを切りひらいて、店のやうにしたものや、屋敷の玄関の式台（板じき）のうえに品物を並べたりした。

書物（漢籍）は、ひところ安かったが、値上がりした。

- 春秋左氏伝（中国の十三経）「儒教の十三種の教典の総称」のひとつ。著者は左丘明）の校本……十両
- 資治通鑑（中国の編年書。二九四卷。宋の司馬光撰）……六十両
- 四書五経（儒教の基本的な教えをしるしたもの）……四、五両

山の手——この語は、やや高台にある町の意である。江戸においては、麹町・四ッ谷・牛込・赤坂・小石川・本郷あたりを指し、町家はまれであった。これらの地域に住む者のほとんどは、大名や旗本であった。

これらの地区では、店をかまえた者もいたが、多くは露店商であり、古道具類や書画骨董をあきなつた。多くはもっている物を売って生活を立てたが、いつまでももつものでない。露店の多かったのは麴町三丁目から五丁目のあいだ、四ッ谷御門外であった。また御家人のなかには、小石川同心町で

寄席 湯屋 (二十四文) 髪結床 (男女の髪が七十二文)

などをやった者もいた。また金貸しをはじめたのはよいが、周施屋にダマされる場合もあった。ほかに

奥方の御料理 (五目ずしのようなもの)

などの商いもあった。中でも異色だったのは、市ヶ谷柳町通りの五千五百石どりの旗本・久貝因幡守 (一八〇六〜六五、大番頭、講武所奉行) の屋敷では、豆腐屋をはじめたが、土地では「久貝豆腐」として知られた。

昨日まで町人を下にみていたサムライは、食うためには、誇りも見栄もすてて、目下のものを「客」に立てねばならなかった。⁽⁸⁾しかし、なれぬ商売をはじめても、「武士の商法」であるためつまづき、無産者となるのがおちであった。

静岡に無禄移住をきめたのはよいが、家敷を売るのはたいへんであり、簡単に買い手はつかなかった。やむなく知人に売却をたのんで立ち去るものが多かった。家も地所も二束三文で売るしかなく、近所の湯屋のおやじが薪材としてしぶしぶ買い入れるしまつであった。⁽⁹⁾たとえば、

長さ四畳の玄関

八畳の使者之間

十二畳の座敷 (表と裏)

茶之間 (家族が食事をする部屋。台所のとなり)

女中部屋

湯殿（ふろば）

表門（正門）

長屋（下級武士や中間などが住む）

といった構えの旗本屋敷のばあいでも、わずか十二両二分にしかならなかった。

法政大学の前身——東京法学社が学舎として使用したのは、没落した旗本屋敷であった。

わが国では、民衆が政治に参与する権利を主張することを、自由民権運動といっている。が、その叫びがもっとも盛んであったのは、西南の役（明治10・2〜9、鹿児島土族の反乱）前後から、明治十四、五年（一八八一〜八二）ころまでであったらしい（内田魯庵「自由民権の憶出」『新旧時代』所収、大正15・8）。

鹿児島土族による挙兵がつけえたことによって、以後土族の武力反抗はなくなったが、反政府運動の中心は、自由民権運動へと姿をかえていったのである。

しかし、自由民権論者にしても、『自由民権』ということばの内容をよく理解していなかったらしい。またそんなことはどうでもよかったのである。ただ権威（権勢と威力）に反抗していきどおったり、元気のよいことやえらそうなことをいって、反政府的な気分をおおることによるこびを感じていた。フランスに多くを負っていた自由民権も、大日本帝国憲法が發布され（明治22年）、第一回帝国議会が開催されるころ（明治23年）には、旺盛な時代がおわり、代わってドイツ思想が芽をだしてきたのである（笹川臨風「仏蘭西思想」）。

しかし、「東京法学社」がうぶごえをあげた明治十三年（一八八〇）当時は、民権運動はまだ元気があり、代言人や書生が演説会に参集し、高揚をみせた（『法政大学1880〜2000 そのあゆみと展望』、二二頁）。

この年、インフレの結果、米価があがり、政府は財政難にあえいだ。民権派による演説会が喝采を博し、また新聞雑誌などがぞくぞくと刊行され、国会論、憲法論が世論の焦点となった。⁽¹⁰⁾

地方では米騒動が勃発し、信州の松本では奨匡社が「民権学校」をつくった（『团团珍聞』明治13・5・8付）。岡山では集会条例をもつとも

せず、路傍演説がさかんに行なわれ、弁士はときに抜刀して演説したので氣勢があがった（『東京曙』、5・11付）。仙台には、本立社・進取社・鶴鳴社・断金社などの結社があつたが、国会請求のために一つにまとまった（『東京日々』、9・2付）。

隠岐島（島根県北東部、古くは流刑地）のような絶海の孤島でも、自由の風はやくも吹き、国会願望者の数は、三二七〇余となった（『東京日々』、9・2付）。

民衆の権利意識が高まり、代言人規則が改正され、さらに刑法・治罪法（刑事訴訟法）などが公布され、近代的な法制度が整備されるようになったが、代言人や法務官が不足しており、その急需に応じることができなかった。明治五年（一八七二）七月——司法省内に「明法寮学校」（法律を専門とする学校）というものが設けられ、法学生の養成にあつたが、年々、入学者をふやしても、法律事務に従事する者を速成できなかつた。

やがて法律の思想が徐々に普及するにつれて、民間にも法律の教育機関が生まれた。明治十三年（一八八〇）には、つぎの三校が創設された。

東京法学社（明治13・4）

専修学校（明治13・9）

明治法律学校（明治13・12）

これらの学校を出た法学生は、代言人または司法官の登用試験をうけ、それに及第した者はしだいに法曹界に入っていた。

注

(1) 平成28年（二〇一六）度の社会学部の受験者数は、一〇、二八九人。合格・手続者は、六〇八名である。

(2) 松室 致は、昭和六年（一九三一）二月、八十歳で亡くなるまで、十八年間法政の最高責任者（学長）であった。当時、法政は貧乏な学校であったから、学長用の自動車はなく、まいにち目白駅まで歩き、そこから山の手線にのって学校に通った。安藤良雄「松室 致学長のことなど」『法政』第4巻第2号所収、昭和52・2、3月号。

(3) 「第一回 座談会速記録」「法政大学八十年史資料」(非売品、昭和33・4)。

(4) 建部先生は、十有七年間あきもせずペンサーの社会学を講じた外山正一の愛護をうけ、下宿の二階よりいちやく社会学講座の担当者になった。東
京帝大には、時代おくれの旧人(新しみのない人)が多かったが、帝大の先生になったことで気がおごり、誇りはたかく、大家になったように錯覚し
てしまった。教授会や評議会でも、べらべらと駄弁を弄することが多かった。つぎの学長はおれ、そのつぎは総長だ、とばかり鼻をうごかしていたよ
うだが、そうは問屋がおろさないので世のつね。

この先生は、学者というより、新聞記者が政治家になっておればよかったような人物であった。京都帝大の第一の古参は谷本 富とみであり、口も八丁、
手も八丁(しゃべることも、することも達者の意)であり、教育学のラップ手とすれば、建部は社会学の“鐘つき男”であった。これはその著作を手
にとり、よんでみたらすぐ了解されるという。廊下にぶらさがっているつり鐘をたたくと、「野心」「野心」と鳴る底(そこ)のおもむきがあったから
である(対照 東西文化大学の人物 (上) 『無名通信』明治43・3・14)。

建部は帝大の文科大学に入るまえ、東京物理学校(現・東京理科大学)を出ていたから、教理的にもすぐれた頭脳をもっていた。かんしゃくもちの
上、大言壮語する悪癖があり、素行にも問題があつて、大学教授に適した人物ではなかった。長いあいだ東大の社会学科に君臨し、後進学徒に暴威を
ふるった(藤原喜代蔵著『明治・大正・昭和 教育思想学説人物史』東亜政経社、昭和18・11、八四五頁)。

(5) 『日本民衆の歴史 6 国権と民権の相剋』(三省堂、昭和49・9)、一六頁。

(6) 斎藤扇松「土族の商法」『日本及日本人臨時増刊 大正 半百年記念号』所収、政教社、大正6・9。

(7) 斎藤隆三著『近世日本世相史』博文館、大正14・11。

(8) 注(6)におなじ。

(9) 山下重民「瓦解後の屋敷町」、注(6)の記念号所収。

(10) 『日本百年のあゆみ』(朝日新聞社、昭和39・2)、二五頁。



法政大学の発祥の地をしめす石碑

であった。

江戸時代——甲賀町は方形（四角形）をなし、駿河台の中央に位置した⁽¹¹⁾。東西に二筋あり、南のほうを表甲賀町、北のほうを裏甲賀町と呼んでいたようだ。寛永のころ、甲賀組（近江国「滋賀県」の甲賀地方の郷土で、幕府の鉄砲隊の同心をつとめた）の屋敷があった（「駿河台沿革井図考」）。

また甲賀町の中央に「池田坂」（ニコライ堂の西側）というのがあり、むかし池田市之丞（旗本？）の屋敷があったところからそう名づけた。この家では唐犬を飼っていたので「唐犬坂」ともいった（『神田区史』）。

駿河台一带には、維新後、空家になった武家屋敷が多くみられたが、そういうあきいへの新しい主人となったのは、新政府の役人や公卿や華族であった。「東京法学社」が設置された駿河台北甲賀町十九番地の家は、旗本屋敷であったと考えられ、維新後、そこに入居したのは公家・大原重徳（一八〇一〜七九、従三位右近権中納言。岩倉と連携して王政復古に尽力し、維新後、刑法官知事）であった。

この公卿は、東京法学社が設立されるちょうど前年——明治十二年（一八七九）四月——に亡くなっている。主なき大原家では、屋敷の一部を借家にしたと考えられ、そこを借りて「東京法学社」を開校したものであろう。『明治十三年代言人登録名簿』によると、大原邸の住所と伊藤修のそれは同じものという（「法政大学史跡『法政大学発祥の地』記念碑」『Hosei Museum Vol.』所収、二〇一二年）。金丸と法律の学舎を興こす

一 「東京法学社」の誕生

豊後国杵築藩士族である

金丸 鉄（一八五二〜一九〇九、はじめ出版社「時習社」をおこし、『法律雑誌』「法律の専門誌」を刊行。のち、代言人⇨弁護士となる）

伊藤 修（一八五五〜一九二〇、代言人）

の両人は、明治十三年（一八八〇）四月——東京駿河台北甲賀町十九番地 池田坂上（ニコライ堂——日本ハリストス正教会——明治二十四年「一八九二」建立——のちかく——いまの神田駿河台一丁目八番地——駿河台日本大病院があるあたり）に、「東京法学社」を創設した。これは法律をおしえる小規模の学舎と弁護士事務所をかねたような所



お茶の水の風景

馬場孤蝶著『明治の東京』（中央公論社、昭和17・5）より。

まえ、伊藤 修は、「法律学舎」（豊後杵築藩士・元田 直が、法律学をおしえる目的で、明治八年「一八七五」五月、浅草前通森田町九番地に開業した学校、明治十年「一八七七」七月、神田区錦町二丁目二十八番地に移転）で、代言のしごと（弁護士業務）に従事していた（奥平昌洪著『日本弁護士史』有斐閣書房、大正3・11、一九八頁）。

伊藤はやがて独立し、起業したものと思われる。近代的な大小の建物が軒をつらねている、いまの神田駿河台一丁目あたりが、武家屋敷群の跡地であると想像することはむずかしい。明治十年代——あたりにはまだ「破屋」がみられたと思われるが、すこし足をのばし、御茶の水の神田川の土手までゆけば、風情ある景色をたのしめたはずである。

駿河台は享保の末にひらかれた所らしく、江戸城の北東の方角（鬼門）にあたり、東西六町、南北三丁の丘陵であった。また駿河台は「神田山」ともいって、もともと高い山であったが、慶長八年（一六〇三）家康の命により、山をけずり、その土で埋たててできたのが浜町・葎町・八丁堀・銀座・日比谷などである（矢田挿雲著『江戸から東京へ』。「御茶の水橋」は、駿河台西紅梅町より本郷区湯島三丁目に架かる橋である。

神田川の兩岸は樹木がうっそうと茂り、江戸の景勝地のひとつであった。春になると落花（散り落ちた花）は水に点じ、夏になると、夕涼み客が橋のうえから、ほたるの飛びかうのを見てたのしんだり、秋になると青白い月をながめ、冬になると、崖腹の雪、小舟の炊煙などの雪景をみた。

明治十三年（一八八〇）四月——金丸と伊藤は『東京日々新聞』（明治13・4・10付）に、「東京法学社」なるものを開業する、といった広告をだした。それはつぎのような文章である。

吾儕（われわれ）今般東京法学社ヲ設立シ 左ノ二業ヲ創メ 此段広告候也 但其各規則ハ乞フ本社ニ來觀アレ

東京 法学社 講法局 代言局

教師ヲ聘シ 専ラ我国ノ新法ヲ講シ また仏国法律ヲ講義ス 上告、控訴、初審、□詞、訟

(訴訟) 代言ヲ務メ 又代言生 (弁護士志願者) ヲ陶冶ス (育成する)
東京駿河台北甲賀町十九番地 池田坂上

東京法学社 金丸 鉄
伊藤 修

明治十三年四月

つづいて――

拙者 (わたくしめ) 従来 法律学舎ニ在テ 代言事務取扱 来候 処 今般更ニ東京法学社ヲ設立シ 向後 (いまからのち) 該社ニ於テ 専ラ代言ノ委嘱ニ応セントス 仍テ此段致 廣告候也

明治十三年四月 代言士 伊藤 修

とある。

先の広告文を意識すると、つぎのようになる。

われわれはこのたび東京法学社を設立いたしました。左記のような事業を二つはじめることになりましたことをお知らせいたします。しかし、会社のそれぞれのきまりについては、社のほうに来てご覧下さい。

東京法学社は、法律を講ずる部局と弁護士業のそれから成ります。

前者においては教師を招き、わが国の新しい法律やフランス法を講義いたします。後者においては、訴訟に関する行為や法律事務を代行し、また弁護士

の養成につとめます。
東京駿河台北甲賀町十九番地 池田坂上

東京法学社 (代表)

金丸 鉄
伊藤 修

明治十三年四月

これらの広告文は、東京法学社の二つの事業部門——法律塾と代弁業——について、世間に知らせたものである。が、さらに四ヵ月ほどすると、こんどは『法学舎』（法律学校）の開講を強調するかのような広告を『郵便報知新聞』（明治13・8・30付）に出した。

東京法学社開校広告

今般法学教師四名を聘シ（しょう） 来ル九月十二日開校 十三日ヨリ毎日 午後三時（じゆうご） 自（みづか） 午後三時 至（いた） 同五時 左ノ科目ノ通り教授ス 依テ（ゆえに） 予テ御申込ミノ諸君 並有（ならびに）

志諸君ニ報告ス

日本新刑法 ○同治罪法 ○仏国民法 ○英国憲法 ○同証擧法

八月 東京駿河台北甲 賀町十九番地 東京法学社

この広告文から読みとれるのは、四月に起業したけれど、生徒のあつまりが思わしくなく、かつ授業の開始がおくれたものか。授業は秋九月中旬からはじまったようである。授業は月曜から土曜まで、午後三時から二時間、五時までおこなわれたものようだ。

教科は五科目——日本の新しい刑法、フランスの治罪法（刑事訴訟法——犯罪の処分についての手続などを定めた法律）、フランス民法、イギリス憲法、同証擧法などであった。

講法局（法律の教育部門）の講師に迎えられたのは、つぎの人々である。

〔担当科目〕

日本刑法、治罪法輪読〔輪番で講釈〕

フランスの民法、財産編

〔講師名〕

薩埵正邦（一八五六〜一九七）………司法省雇、民法編纂局勤務、のち第三高等中学校教授。

岩野新平（一八五五〜一九二九）………徳島のひと。大審院検事をへて弁護士。漢詩人でもあった（『阿波人

物志』原田印刷出版）。

日本治罪法

堀田正忠（一八五九〜一九三八）……司法省に入り、大審院判事となる。ポアソナードの書生兼通訳。のち

大阪毎日新聞記者。晩年は不遇であった。

フランス訴訟法

橋本胖三郎（一八五五〜一九三二）……司法省検事と治罪法の翻訳にしたがう。のち内務省警保局長。フラン

スより帰国後、日本郵船釜山支店長となる。

イギリスの民事法、刑法、契約法

大原鎌三郎（生没年不詳）……東大法学部を出たのち司法省に入る。東京控訴裁判所判事となる。明

治末年ごろ、秋田で弁護士を開業。

注・それぞれの略歴については、『法政大学一八八〇—二〇〇〇——そのあゆみと展望』を参照。

講法局を設置した主旨は、同胞に権利や義務とはどう、いうものか、その道理を理解させ、かつ日本の法典（おきて）を熟知させることにあった
〔東京法学会開校の趣旨〕『法律雑誌』第一三三三号所収、明治13・9・12付。

明治期につくられた私立の法学校に、つぎのようなものがあるが、生徒数はすくなく、永続したものはわずかであった。

明治八年（一八七五）

法律学舎

元田 直

浅草前通森田町九番地にもうけ、のち東京神田区錦町二丁目二十八番地に移転。

明治十年（一八七七）

講法学舎

大井憲太郎
北島道龍
大井憲太郎

東京神田区錦町二丁目三番地。
東京湯島天神町三丁目三番地。

明治十二年（一八七九）

明憲学舎
九皋（奥深い沢の意）社

沼間守一

東京神田区今井小路二丁目十五番地。

明治十三年（一八八〇）

東京法学会（のちの法政大学）

金丸 鉄、伊藤 修

東京駿河台北甲賀町。

〃

専修学校（のちの専修大学）

東京神田区中猿楽町。

明治十四年（一八八一）

明治法律学校（のちの明治大学）

岸本辰雄

東京麹町区有楽町、のち神田駿河台に移転。

〃

茂松法学校

磯辺四郎

東京神田区今井小路一丁目一番地。

注・この学校については、『法律雑誌』（第二二二号、明治14・12）に広告が出ている。

明治十五年（一八八二） 東京専門学校（のちの早稲田大学） 大隈重信、小野 梓

〃 東京法学校（のちの法政大学） 東京神田区錦町。

〃 泰東法律夜学校 東京京橋区南紺屋町。

〃 弘文館 東京麹町区富士見町。

明治十七年（一八八四） 独逸学協会（ドイツ法をおしえた。のちの独協大学）

明治十八年（一八八五） 英吉利法律学校（のちの中央大学） 東京神田区。

注・この一覧表をつくるに当って『都史紀要十 東京の大学』（東京都、昭和38・3）と奥平昌洪著『日本弁護士史』（有斐閣書房、大正3・11）を参照した。

このように法律や政治系の学校があいついで設立されたには理由がある。ひとつは自由民権運動が高まりをみせ、権利意識が高揚したからである。従来、日本国民は従順と屈服を強いられ、一国の政治に関して批判などできなかった。ところが維新前後から、明治十年代までに、欧米（英、米、仏、独）から新しい政治思想が入ってくると、その鼓吹^{こぶき}をうける者がふえてきた。明治七年（一八七四）四月、高知に民権自由の説を植えつけるために建てられたのは「立志社」であるが、この結社はヨーロッパの法学を研究し、⁽¹⁴⁾とくにフランス流の天賦「人權説」を奨励することに努めた。

そのため国民のなかに、法律の知識や、言論を武器とする気運^{きうん}がかもしだされた。

明治新政府が、国内の治安を維持するために必要としたものは、刑法と民法の編さんであり、この二つは急がれるために、フランスからジョルジュ・ブスケやボアソナードを招いて業務にあたらせた。

明治初年から同二十年ごろまでの、わが国の法制度の変遷をしると、つぎのようになる。

明治五年（一八七二）……………アンリ・ド・リベロールに法律学を教授させた。法律をはじめて学科としておしえた。

明治七年（一八七四）……………司法省は、エミール・ギュスターブ・ボアソナード、ド・フォンタフピー、ブスケなどを雇用し、法律の専門教師とした。

明治八年（一八七五）……………大審院（明治憲法下で最上級審の裁判所）をもうけ、裁判所の構成、司法権を拡張した。

明治九年（一八七六）……… 代理人の規則をもうけ、その任用をきびしくした。司法省法律学校が設けられた。しかし、司法官、代理人の急需に応じることができず、四月に生徒四十一名、九月に百名あまりえらび、ピエール・ジョセフ・ムリエに教授させた。

明治十年（一八七七）……… 生徒九十名を募集し、ボアソナードやジョージ・ウォラス・ビル（米人）を教師とした。

明治十三年（一八八〇）……… 代理人規則および手続を改正し、試験は、年二回おこなわれた。

明治十八年（一八八五）……… 判事登用試験の規則が定められ、司法官も代理人もおなじ試験をうけ登用されることになった。

以降、法律をおしえる民間の諸学校、法科大学における法学生の需要が高まるや、法律の思想も普及におもむいた。

（宮川大寿「第六編 司法」『太陽』第四卷第九号臨時増刊、所収、明治36・4）。

「東京法学社」の重要な事業のひとつは、司法官や代理人の養成であったといえる。江戸時代、民事裁判の代理の業をするものを「公事師」と称していた。

この種の者は、口がたっしやな遊興、無頼の徒が多かった。が、維新後、江藤新平が司法卿のとき、はじめて代理人の職制をさだめ、その品位を高めるために、一定の学識あるものを任用するようになった。⁽¹⁵⁾

もともとわが国には、法廷において代言（弁護）をゆるす制度はなかった。が、明治五年（一八七二）八月にいたり、司法職務定制（太政官布告）により、代言人（弁護士）の職制をみとめ、試験をへて司法卿の免許をえたものだけが、民事についてのみ代言できるようになった。

東京法学社の授業が軌道にのってくと、甲賀町十九番地の建物は手ぜまになってきたので、開業の年の十二月——神田区錦町二丁目三番地に移転した。こんどの学舎も古い旗本屋敷であった。月のさし込むあばら屋であつたらしい。いまこの地区に残っている旗本の末えいは、小笠原家だけである。その家のおばあちゃんは、

——むかし先祖はもつと江戸城のちかい所に住んでいたが、あとから今の地に移った。親戚はみな大名です。と、筆者に語った。

つぎに東京法学社が財団法人法政大学となるまでの略史をしるすと、つぎのようになる。

明治十四年（一八八一）五月……… 東京法学社の講法局が独立し、「東京法学校」となる。

明治十六年（一八八三）九月……元バリ大学教授ボアソナードが同校の教頭に就任。

明治二十二年（一八八九）……東京法学校と東京仏学校がいっしょになり、「和仏法律学校」と改称。

明治三十六年（一九〇三）……財団法人・和仏法律学校は法政大学と改称。予科、大学部、専門部、高等研究科をおく。

明治三十七年（一九〇四）……大学令により、財団法人・法政大学となる。

大正九年（一九二〇）……法学部と経済学部を設置。

大正十年（一九二二）……麹町区富士見町四丁目に移転。俗にここを「市ヶ谷キャンパス」という。

ひとが日々のくらしの中でいろいろ苦慮するのは、生活上の問題である。それは避けて通れない人生の問題である。人生やわれわれが生活の場として起る社会で生起る問題を、学理的にあつかうのが社会学といえよう。この中には——政治、経済、法律、歴史、哲学、宗教学などもふくまれる。これらはすべて社会学の分科なのである。

法政大学の草創期の資料は、失しなわれたものが多く、こんにち限られたものしか現存しない。いったい、だれがいつごろ本学においてはじめて社会学について、あるいは社会的なものを話題にし、人にかたまったのか。法政の関係者であえてその人物をあげるとすれば、だれであろうか。「東京法学校」が、明治二十年以前に経済学をおしえたことを『法学協会雑誌』（一九号、明治18・9・19）や『法律雑誌』（五五四号、明治19・9・28）などにみられても、社会学の科目は姿をみせないのである。

一 「和仏法律学校」の教頭ボアソナードの講演——「日本における労働問題」

労働者と資本家（労働者を使い、利潤をうる者）とのあいだに起る社会問題を「労働問題」といい、これは社会学上の大きなテーマの一つである。賃金や労働条件（酷使）などが、非難攻撃の対象とされる。

明治二十五年（一八九二）十月十五日——ボアソナードは、「仏学会協会」の所在地——和仏法律学校（のちの法政大学）において、*La question ouvrière au Japon*（「日本における労働問題」）と題して、通訳付で演説をおこなった。通訳は安達^{みなづか}峯^{みね}彦^{ひこ}か。このときの演説内容は、——



ボアソナードの肖像。
『太陽』(第1巻第1号, 明治
27・12)より。

『仏文雑誌』[原文] (*ルヴュフランセーズデュジャポ*)の第十号所収、明治25・10・5)
「日本ニ於ケル労働問題」[訳文]、『法学協会雑誌』第十卷第十一号所収、明治25・11・1)
特別奇書「訳文」『日本ニ於ケル労働問題』(『国民之友』第一七一号所収、明治25・11・3)

などに三たび発表された。

演説のへき頭、ボアソナードは、つぎのようにいった。

——みなさん、労働問題はまだ日本において起らない、と思うのは、分別のない、危険な楽観論です。すでに労働問題は起っており、先見の明のある人は、この問題にまじめに取り組んでいます(『仏文雑誌』p.300の拙訳、訳文とはだいぶ異なる)。

ボアソナードの講演のおもな典拠となったものは、*Japan Mail* 紙(一八九二・8・16付)の記事であったものか。資料をあつめ、それらを分析し、論を組み立てたものではないようだ。かれの講演の要旨は、つぎのようなものであった。

ボアソナードによると、「アメリカン・ボード・ミッション」の年報は、絹・綿・ハンカチの刺しゅうなどの製糸工場やマッチ工場などで働く婦女子の多くは、わずかな賃金で日に十二時間から十七時間はたらかされているという。ついでかれは国家の務めとは何か。労働者の個人的自由や資本の独立などと両立する、国家の権利と義務とは何かについて疑問を呈した。

かれは成年男子や婦女子の労働時間、労働環境(作業場の衛生——採光や換気)に関して、ときに政治的介入の必要をみとめ、ストライキは社会の害悪をなおす最良の手段でないにしても、それによって給金があがったり、労働時間がへったりするから、その必要性を否定しなかった。

しかし、かれが危ぐの念をいだいたのは、資本家がスト参加者を弾圧するために、法律や軍隊の力を借りることであった。

ボアソナードは、日本の労働者が直面している「正当なる不満」(*Justes griefs*)をおだやかに指摘した。労資関係の問題解決に有効な手段は、「労働者をして資本家の利益に与(あず)からせる」ことだとのべている。

しかし、ボアソナードのこの演説にかみついたのは、金井 延(一八六五—一九三三、明治から大正期にかけての社会政策学者。東大教授)であった。かれはボアソナードが近ごろ法律論をなさず、経済論を公にしていることに言及した。しかも、その説は十八世紀の古くさいものだ、といい、同年十二月から翌年にかけて、「ボアソナード氏の経済論を評す」と題して、反駁を『法学協会雑誌』に発表した(明治25・12、同26・1

2)。

金井はわが国の職工が安い賃金で酷使されていることを大すじにおいてみとめたが、ボアソナードが説く同盟罷業論ストライキは、あたかも政治や社会の改良に、革命が必要であると説くのとおなじりくつだ、として論難した。

いずれにせよ、法政大学の長い歴史において、社会学的な視点からわが国の労働問題について発言したのは、ギュスターヴ・エミール・ボアソナードが最初であったといえる。

一 本学における社会学教育の先駆者

——高山兼吉、大場実治、高田保馬、松本潤一郎

つぎの疑問点は、法政の学舎において、いつごろから社会学が講じられたかということである。東京法学社、和仏法律学校時代（明治十年から同二十年代）は、まだ社会学は教えられていなかったようだし、大学令によって法政大学となった明治三十年代半ば、まだ社会学は随意科目としてすら設置されていなかった。依拠すべきたしかな資料がないので、はっきり言いえることはできないが、本学において、はじめて社会学が教授されたのは明治末年——明治四十年代でなかろうか。

近代工業が発展にむかった明治二十年代から三十年代にかけて、工場労働者が激増すると、それと相まって労働争議や農民騒擾そうじょうが多発し、労働者はたびたびストライキをおこし、やがて労働組合結成へとあゆみだした。こうした労働運動をつきうごかしたのは、社会主義思想やマルクス主義であった。明治四十年代は、また社会学の学説移入や紹介、社会学に関連した文献がさかんに公刊された時期でもあった。

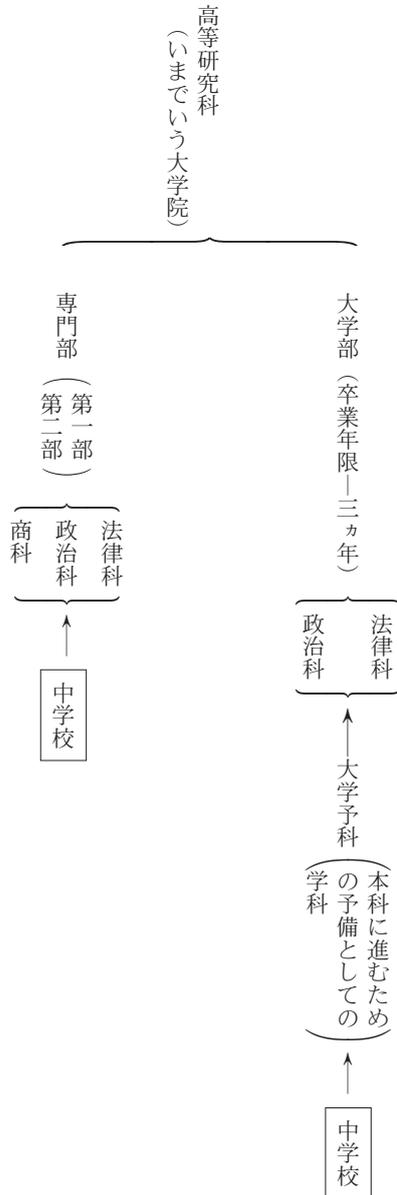
資本主義経済が進展すると、社会問題、社会政策、社会事業などに関する社会学研究が助長された。

法政大学ではじめて、新進科学である社会学の講座が設けられたのは、明治四十年代とすると、その設置は社会のうごきや時代の傾向と連動していたように思える。

『法政大学三十年史』（非売品、私立法政大学、明治42・4）の「第二章 大学部 第一節 学科——第十二条 大学部政治科二於テ教授スル学科目 左ノ如シ（明治四十一年五月改正）」に、政治学や経済学など十六科目とならんで“社会学”の名がみられる。社会学は、大学部政治科の一年生が選択することになっていた（同学科の課程表を参照、八頁）。しかし、担当者名は不明である。

また、明治四十四年（一九一〇）から大正八年（一九一九）までの大学史の資料が欠けているため、この間八年ほど、「社会学」についての情報は皆無である。

ちなみに明治末期の法政大学の学制を略記すると、つぎのようになる。



注・予科は外国語や普通学をさすける。

また別科として――

外国語専修科（英・独・仏より一科をえらばせ、これを教える）

法政速成科（清国留学生のためのもの）

などがあった。



高木友三郎教授

高木友三郎⁽¹⁷⁾——外国ではあんがいもてるんだよ。僕ももてた。

きれいな女がおるのですよ。大場君の女が。大場君に惚れちゃって、大場君は日本におってもいい女にもてなかったかもしれないけど、フランスではばかにもてた。

話は、本当かどうか疑ってかかるべきであるが、事実であるのかもしれない。いったいに風采のあがらぬ日本男性が、外国でもてたという話は、あまり聞かない。大場先生のもてた

第一次世界大戦直後、ヨーロッパはインフレーション時代であり、外国為替のおかげで、日本人はけっこうぜいたくな生活ができ、金持とおもわれた。これがまた現地の女性にもてた理由の一つであつたろう。大正九年（一九二〇）から同十五年（一九二六）までベルリンで商社勤務をした秦^{はた}豊吉（一八九二〜一九五六、実業家・随筆家。ペンネームは丸木砂土^{まるきさど}）によると、日本の十円紙幣がドイツで百三十マルクほどで交換できたという（丸木砂土『好色ベルリン女』という書房、昭和24・4）。

ベルリン在住の文部省留学生（大学の教員が多い）は、大いに勉強せねばならぬのに、毎日マルク相場が気になり、落ちつけない。午前中、銀行にいった紙幣をマルクに換える。午後は街をぶらつき、夜はさかんにブドウ酒をのみ、女遊びをした。三木清（一八九七〜一九四五、大正・昭和期の哲学者、のち法大教授、獄死）は、大正十一年（一九二二）夏にベルリンに着いているが、日本人留学生の淫蕩な生活とこの都市の動揺せる空気があわず、リンデ（しなのき）の若葉のうつくしいハイデルベルヒに移った（浜本野花「三木清君の印象」『改造』所収、大正11・10）。下宿にしても、外国紙幣をもっている外国人がもて、為替の余沢にあずかった。

フランスもお国事情は、おなじであつたであろう。風俗は退廃し、物価は騰貴し、みなインフレに苦しんでいた。日本円という金のおかげでインフレーション極楽を体験できたのは、商社マンや留学生であつた。

大場が法政に來たのは大正九年（一九二〇）ごろであろう。かれは法政に來たとき、所属がはっきりしていなかった。安倍能成^{よししげ}（一八八三〜一九六六、大正・昭和期の教育者・哲学者、のち一高校長、文相）や和辻哲郎（一八八九〜一九六〇、大正・昭和期の倫理学者。文化史家、のち東大教授）らは、社会学を学問としてみていなかった。だから大場を文学部の教員として置けないといった。が、やはり社会学を文学部に設置せねばならぬ氣運が生じ、また野上豊一郎（一八八三〜一九五〇、明治から昭和期の英文学者・能楽研究家）の取なしで、講座が置かれることに



京都帝大教授時代の高田保馬（昭和8年〔1933〕）。



大正10年（1921）28歳ごろの松本潤一郎（外遊中）。

なった。しかし、大場は文学部でない予科の教授におさまった。この先生は、あまり著述をのこさなかったが、東大の卒業論文に若干の増補をくわえて公刊した『人口問題と食糧問題』（弘道館、大正9・3）や通教生のために執筆した『フランス語——発音・文法篇』（昭和25・29）などがある。

とくに文学部で社会学の講座を担当する教員は、相応な人でなければならぬ、ということである——

高田保馬⁽¹⁸⁾（一八八三〜一九七二、昭和期の社会学者。のち九大、京大、阪大教授）

を非常勤として招へいし、大正十四年（一九二五）同人が九州帝国大学に赴任するまで、一年ほど講義を担当してもらった。その時期は、大正二、三年（一九二三〜二四）ごろのことか。

高田のあとを引きついだのは、

松本潤一郎⁽¹⁹⁾（二八九三〜一九四七、大正・昭和期の社会学者。大阪毎日新聞記者をへて法政大、東京高師教授）

である。かれは大正十三年（一九二四）講師として法政に迎えられ、同年九月教授に就任した（「年譜」）。

以降、法政の社会学は、松本教授を中心に始動するのである。

大正六年（一九一七）当時、『社会学』は法律科、政治科、哲学科、経済学科において教えられ、社会学科においては、選択科目の社会政策・社会問題といっしょに学ばせた。

この年の東京の学校案内に、法政大学はつぎのように紹介されている。

○私立法政大学（東京市麴町区富士見町。創立明治二十二年）

大学	予科	一年六月	専門部			
部	法律科	正科 三年	政治科	正科 三年	法律科	正科 三年
	特科	三年	別科	三年	別科	三年
高等	研究科	一年以上	別科	三年		
		三年以内				

教員数	五三
生徒数	二九 × 七九
大学部	二〇五 × 二七九
専門部	二 × 一二
学長	法学博士 古賀康造

注・『教育年鑑』大正6年版より。

注

- (11) 「駿河台甲賀町位置」『風俗画報』一九五号所収、明治32・8・25。
- (12) 「御茶の水稿」『東京名所図会 神田区之部 上巻』所収、東陽堂、明治32・7・25。
- (13) 『近世日本世相史』日本図書センター、昭和22・？、一〇七三頁。
- (14) 時野谷常三郎著『日本文化史 第13卷 明治時代』（大鐘閣蔵版、大正11・11、九八頁）。

- (15) 宮川大寿「第六編 司法」『太陽』明治三十年史「第4巻第9号臨時増刊号所収、明治31・4。
- (16) 薬師寺志光（二八八九〜？）は、愛媛のひと。宇和島中学から一高をへて、東京帝国大学法科大学独法科を卒業。判事、弁護士をへて法政の教授となり、のち国学院大学に移った。多くの著作がある（安達三季生「薬師寺志光先生の人と業績」『法政』昭和59・10）。
- (17) 高木友三郎（二八八七〜？）は、富山のひと。東京帝国大学法科大学政治科にまなび、大正三年（一九一四）七月卒業した。銀行、新聞社につとめたのち、大学院に入り、経済学および社会政策を研究した。信託および証券関係の著作がある（『法政大学史資料集 第十四集』平成3・3）。



桑田芳蔵助教授 (東大)



戸田貞三助教授 (東大)

大正時代（一九二二～二六）——大正元年（一九二二）から同八年（一九一九）までの大
学史の資料、さらにおなじく同十年（一九二二）から十三年（一九二四）までの分が欠けて
いる。が、つぎに社会学関係の担当者をしるすと、つぎのようになる。

大正九年（一九二〇）

日本は国際連盟に正式に加入した。最初のメーデーが上野公園で開催された。アメリカが
中国における日本の特殊権益をみとめた。東大助教授・森戸辰男の論文「クロボトキンの社
会思想の研究」が、危険思想とみられ、同人は起訴された。

この年、予科において。

社会学 文学士 大場実治

大正十三年（一九二四）
法文学部、経済学部において。

- 社会心理学
- 社会問題
- 社会学概論
- 社会学史演習（用書 W. Sombart: Soziologie, 用書 C. Bouglé: Qu'est-ce que la sociologie?）
- 社会調査法
- 新聞研究
- 社会研究

くわたよしぞう (19)
桑田芳蔵

高山兼吉

松本潤一郎 (20)

とだていさ (21)
戸田貞三

太田正孝

こばやし (22)
小林輝次

† ヴェルナー・ゾンバルト（一八六三〜一九四二、ドイツの経済学者・社会学者。ベルリン大学教授）。

†† セレストアン・ブーグレ（一八七〇〜一九四〇、フランスの社会学者。ソルボンヌの教授）。

注・「学界消息」『社会学雑誌』第4号所収、大正13・8より。

大正十四年（一九二五）

中国の上海において、日本の紡績工場の争議弾圧にたいする抗議として、反帝国主義運動（五二三〇事件）がおこり、排日デモをおこなった。田中義一が政友会総裁となった。労働、社会運動を取りしめるために治安維持法が成立した「朕帝国議会ノ協賛ヲ経タル治安維持法ヲ裁可シニ公布セシム 御名御璽（天皇のサインと押印）」。東京放送局が、ラジオ放送を開始した。

法律学科、政治学科において。

社会心理学*	文学博士	桑田芳蔵
社会問題**	文学士	高山兼吉
社会学	文学士	松本潤一郎

文学科、哲学科において。

社会心理学	文学博士	桑田芳蔵
社会政策***	法学士	小林輝次
社会問題	文学士	高山兼吉
社会学特殊研究（国家論、用書 F. H. Giddings: Responsible State）†	法学士 文学士 文学士 }	藤田喜作 ⁽²³⁾



東京帝大で研究発表をおこなう松本潤一郎教授（大正14年 [1925]・11・8）。

社会学特殊研究（社会学史）

社会学

社会学演習

社会学特殊研究（社会発生論、用書 E. S. Hartland: Primitive Society）^{††}

文学士

松本潤一郎

吉田九郎⁽²⁴⁾

経済学部——経済学科、商業学科において。

社会心理学

文学博士

桑田芳蔵

社会政策

法学士

小林輝次

社会学

文学士

松本潤一郎

* 社会に関係した心理学。個人や集団の意識現象や行動——集団心理、流行、宣伝、マス・メディアの心理的影響などを研究する。

** 社会に関するあらゆる問題。社会の矛盾・欠陥などから生じる諸問題。農村問題、労働問題、住宅問題、公害問題などという。

*** 資本主義社会において、とくに労働者階級の生活向上のために、国家がおこなう改良的な政策をいう。

† フランクリン・ヘンリー・ギディングス（一八五五〜一九三二、アメリカの社会学者。コロンビア大学教授）。

†† エドウィン・シドニー・ハートランド（一八四八〜一九二七、イギリスの人類学者）。

同年、六月二十七日——本学の社会学関係の教授・講師・学生のあいだにおいて、久しい希望であり、かつ懸案であった「法政大学社会学会」が、ついにこの日研究室において発会された。当日の出席者は、つぎの面々であった。

松本潤一郎	平貞三	吉田九郎	喜多野精一
菊地竹司	佐藤義明	山田丈夫	大広一夫
城義臣	横山健郎	巨橋頼三	

「法政大学社会学会」設立の趣意(目的)は、社会学上の理論とじっさいの研究をおこなうことであった。毎月一回小会を、また春と秋には大会をひらくことであった。またてきとうな機会に、「日本社会学会」や諸大学の社会学会と連合集会を催すにあった。

なお、「社会学会」がはじめて会をひらく一週間ほどまえに、松本潤一郎は、大学の講堂において講演をおこなった。

固定階級について 松本潤一郎教授

注・「学会彙報」『社会学雑誌』第16号所収、大正14・8・1より。

またこの年、法政大学において出題された社会学関係の試験問題をつぎにしめそう(大正14・3施行)。
社会学 松本潤一郎教授の出題

- (一) 社会心(社会意識)について述べよ。
- (二) 左の事項を説明せよ。
 - (イ) デュルケーム(E. Durkheim)

(ロ) 協同体 (Gemeinschaft)[†]

(ハ) 小家族

(ニ) 社会有機体説*

(ホ) 開放的階級

〔追試験の問題〕

(一) 社会学の沿革について述べよ。

(二) 左の事項につき説け。

(イ) 意識融合説

(ロ) 結社

社会思想 藤田喜作講師(非常勤)の出題

(一) 近世資本主義経済組織の本質と社会階級、社会思想、および社会運動との関係。

社会心理学 桑田芳蔵講師の出題

(一) 個人心と社会心との関係。

(二) 群衆心理を略説せよ。*

(三) 結婚の諸形式とその原因を略述せよ。

† Gemeinschaft (共同体、共同社会) とは、相互の親和(したしみ、やわらぐこと)を基礎として成立した社会のことをいう。

* 社会を一つの有機体(生物)とみなし、社会の構成・起源・発展を有機体の概念で説明しようとする社会理論。

** 群衆において発現される特殊な心理状態。

法政大学社会学会第一回例会（10・3、同校講堂）において、つぎのテーマで発表がおこなわれた。

- 一 社会起源に関する疑（うたがい） 今井時郎^{（25）}
- 一 社会学研究における歴史主義 喜多野精一^{（26）}
- 一 売操（春）制度について 菊池竹司

この年の法政大学文学部講演会（11・14、同校講堂）において、本学教授二名が左記のテーマで講演した。

- 一 文化意識と社会制度 法大教授 城戸幡太郎
- 一 人間生活と文学者の使命 ” 小山龍之輔

同年十二月——法政大学の政治学、経済学、社会学、商業学関係の少壮教授、講師らのあいだで、社会科学関係の純学術的研究発表の機関誌をつくりたい意向があったが、そのくわだてが具体化し、大村書店から『法政大学論集』の名のもとに創刊号が生まれた（『社会学雑誌』第二十号を参照）。

同号に松本は、「固定的階級について」を発表した。

大正十五年（一九二六）

大正天皇の死去。第一次若槻礼次郎内閣が成立。

労働争議、調停法の公布。

法文学部——法律学科、政治学科において。

社会心理学

文学博士

桑田芳蔵

社会学（概論？）

文学士

松本潤一郎

社会問題（本年休講）

文学士

高山兼吉

文学科、哲学科において。

社会心理学

文学博士

桑田芳蔵

社会政策

法学士

小林輝次

社会学特殊研究（社会学的国家観か）

法学士

藤田喜作

社会学特殊研究（社会階級研究か）

文学士

松本潤一郎

社会学

文学士

松本潤一郎

社会学演習 (E. Durkheim: 用書 De la division du travail social)

文学士

松本潤一郎

社会学特殊研究

文学士

吉田九郎

社会問題（本年休講）

文学士

高山兼吉

経済学部——経済学科、商業学科において。

社会心理学

文学博士

桑田芳蔵

専門部第一部において。

社会政策
社会学

法学士
文学士
小林輝次
松本潤一郎

† エミール・デュルケム（一八五八〜一九一七、フランスの社会学者。ボルドー、パリ大学の教授を歴任）。
注・専門部の夜間に新設された「社会学」の講義は、高山兼吉が担当することになったとある（『社会学雑誌』第26号）。

またこの年の法政大学社会学会（6・12、6・17）において、つぎのテーマで発表がおこなわれた。

- 一 我国中世に於ける土地問題に就て 巨橋頼三
- 一 いわゆる国民道德と社会道德 城義臣（27）

注・『社会学雑誌』第29号より。

東京市役所編纂『東都学校案内』（三省堂、大正15・12）に、法政大学はつぎのように紹介されている。

法政大学

麹町区 富士見町四丁目十二番地 電話四谷 二五一三
四七〇一
七〇二六

学 校 長 松 室 致

創 立 年 月 日 明 治 十 二 年 二 月

入 学 資 格 予 科 第 一 部 中 学 四 年 修 了 者 及 之 レ ト 同 等 以 上 ノ 学 力 ア ル 者
および

同 第 二 部 中 学 校 卒 業 者 及 之 レ ト 同 等 以 上 ノ 学 力 ア ル 者

教 科 大 学 部 法 文 学 部 法 律 学 科 政 治 学 科 文 学 科 哲 学 科

経 済 学 部 経 济 科 商 業 学 科 大 学 予 科 第 一 部 第 二 部



当時の学生食堂のようすを描いた図。

修業年限	大学部	予科	第一部	三ケ年	第二部	二ケ年
学生数	大学部 七五〇	予科 一五五三				
学費	大学部 年額二二〇円	予科 年額一〇〇円				
職員数	一三四名					

予科	大正十二年度		大正十三年度		大正十四年度	
	入学志願者	入学者	入学志願者	入学者	入学志願者	入学者
科学部名						
法文学部	一部 五〇七	一九四	一部 七二〇	四一八	八六三	六五七
	二部 四三九	一七五				
経済学部	一部 二九六	五七	二部 六一四	三七六	六八四	五五八
	二部 一九五	八三				

このころの学生食堂のメニューおよび料金は、左記のとおりである。

- パン 菓子
- ランチ……………五〇銭。
- ハヤシライス……………三〇銭。
- ちらし……………二〇銭。
- コーヒー
- カツ……………三五銭。
- 日本弁当……………二〇〜三〇銭。
- にぎりずし……………三〇銭。

ソーダ水（注・料金は不明）
カレーライス……………二五銭。

注・『法政大学報』大正15・11より。

注

(18) 高田保馬は、佐賀のひと。明治三十五年（一九〇二）佐賀中学を卒業後、五高に進み、明治四十年（一九〇七）七月卒業すると、京都帝国大学文科
大学哲学科に入学し、米田庄太郎博士に師事し、社会学を専攻した。同四十三年（一九一〇）、卒論に「分業論」をかいて卒業すると、大学院に進学。

大正三年（一九一四）京大法学部の講師となり、フランス経済書を講読。大正七年（一九一八）同志社大学で社会学を講じる。翌年、大著『社会学原理』を公刊。大正十年（一九二一）東京商科大学（現・一ツ橋大学）教授となり、社会学と経済学史を担当。日本大学と東京女子高等師範学校（現・御茶の水女子大学）へも出講。

大正十二、三年（一九二三、二四）ごろ、法政大学に出講したのか。大正十三年（一九二四）胃病（慢性胃潰瘍）が悪化し、東京商科大学を辞任し、故郷で静養。大正十四年（一九二五）九州帝国大学教授となり法文学部に勤務し、社会学を講義する。昭和五年（一九三〇）京都帝国大学教授（九大教授を兼任）。この先生の業績は、社会学と経済学の二つの領域にわたり、その量たるや常人の業績を圧倒し、著書は百余冊、論文は五百余、欧文の論文は二十八に達した（京大名誉教授・臼井二尚「高田保馬博士の生涯と社会学」）。

(19) 桑田芳蔵（一八八二～一九六七、心理学者）は、鳥取のひと。明治三十八年（一九〇五）東京帝国大学文科哲学科（心理学専修）の第一回生として卒業。同大の助手をへてドイツに留学し、W・ブントに師事。のち東大教授。昭和十八年（一九四三）退官後、大阪大学教授。社会心理学の開拓者のひとり。著書としては『ブントの民族心理学』（改造社、大正13・3）がある。

(20) 松本潤一郎は、千葉のひと。かなり裕福な旧家（地主）の子に生まれた。明治三十九年（一九〇六）銚子中学校に入学するが、肋膜炎により、のち佐原中学校に転校。明治四十五年（大正元年、一九二一）一高に無試験入学。大正四年（一九一五）同校卒業後、東京帝国大学文科哲学科に入学し、社会学を専攻。同七年（一九一八）卒論に「貴族の研究」をかき、大学院に進学したが、翌八年退学。それより大阪毎日新聞社に入社し、外国通信部に勤務した。しごとは、英文和訳、海外事情調査、英米独の新聞解説などであった。大正九年（一九二〇）同新聞社退社。大正十年（一九二一）四月外遊の途にあがり、翌十一年二月に帰国すると、日本大学講師となり、以降教壇生活に入った。同十三年（一九二四）法政大学教授、東京女子大学講師。

昭和四年（一九二九）東京帝国大学講師、同十三年（一九三八）東京高等師範学校（現・筑波大学）教授に就任。戦災により蔵書一万冊を消失。以後、諦観のひととなった。昭和二十二年（一九四七）六月、糖尿病のため郷里の銚子で死去。この先生は、理論社会学を専門とした。社会学原論や集団・文化社会学原理などの本を二十余冊かいた外に、多くの論文がある。

社会学をえらんだのは、一高を卒業するころ、興味は哲学や文学から、現実の社会問題に移っており、これが有力な一因となっているようだ。東大では建部遜吾教授に師事した。その下に小林講師がおり、また助手には、のちに法政大学に移る大場実治がいた。



藤田喜作講師

(21) 戸田貞三(一八八七～一九五五)は、兵庫のひと。東京帝国大学文学部社会科学科を卒業後、富山薬専教諭、大原社会問題研究所をへて欧米に留学。大正十一年(一九二二)帰国のち、東大助教授。昭和四年(一九二九)教授となる。家族の研究でもって知られている。

(22) 小林輝次(一八九六～一九八九、社会運動家、経済学者)は、栃木のひと。京都帝国大学経済学部になまび、大正十年(一九二二)に卒業。翌大正十一年から十三年にかけて兵役に服す。法政大学講師、同教授となり、日本フェビアン協会、産業労働調査研究所などの創立にukわる。昭和二年(一九二七)ごろ、左翼教授として法政大学を追われたようである。その後、叢文社に入社し、『インタナショナル』の創刊、また『マルクス主義』などの編集に従事した。

戦後、共産党に入党したが、のちに除名された。

(23) 藤田喜作(一八八七～一九七三、社会学者)は、東大社会科学科の専任講師をへて私立中学の経営者となる。短軀なるこの教師(身長は一五〇センチほど)は、瀬戸内海の中の島の出身である。そこは映画「二十四の瞳」に出てくるような島であった。旧姓は「西原」といい、のち新潟の豪農・藤田家の入りむこととなった(恩師建部教授が仲人をした)。小学校の成績はよく、とび級し、早く卒業した。せまい島のなかで一生おわりたくなかったので、十三歳のとき、親や兄弟とわかれ、上京した。とはいっても、ふところが淋しいから、ひとの合力にすがるしかない。そこでかれは街道すじの親分をたずね、「お控えなすって」と仁義(博徒、てきや、土方などが、初対面のときにするくべつないさつ)を切ったのち、一夜の宿と食事をあたらえられながら東京まで旅をつづけた。

東京は考えていたほど甘い街ではなかった。ようやく商店の小僧の口をみつけたが、「キンドン、キンドン」と呼ばれ、こき使われた。それがたまたまなくいやになり、やがてそこをやめ、東京とは逆の道をたどって、——作家・火野葦平の『花と竜』の世界——北九州にたどりついた。九州までは宿場ごとに親分の家で、一宿一飯のめんどうをみてもらった。やがてかれは土木渡世人の世界で生きるようになり、頭の回転のよさとたくみな弁舌により、いい顔になり、ヤクザ同士の談判において大いに活躍した。『花の竜』に出てくる女親分のことをよく覚えていた。

やがて兄貴分の同輩が、組同士のいさかいで殺されてから、ヤクザがきらいになり、わらじをはき長崎におもむいた。長崎ではちょっとした料理屋の手伝い兼相談役となった。たまたま『福翁自伝』をよんだことがきっかけとなり、進学したくなった。ミッシェン系の鎮西学院中学の校長にたのみ、

入学を許可された。ついで岡山の旧制第六高等学校に入学した。もちろん学費がなければ学業をつづけることができない。そこで考えたのは、地元の実業家・大原孫三郎（一八八〇～一九四三）を訪ね、経済的援助を請うことであった。

大原は大学に進学できない、岡山出身の貧しい学生をえらんで給費生とする制度をつくっていた。この篤志家は、高校で一番を通すのであれば、という条件で学費援助を約束してくれた。しかし、大原はものにこだわる人間でなかったから、二年目からは一番でなくてもよかった。やがて高校をおえた西原青年は、東京帝国大学文学部社会科学科に進学し、建部教授の指導をうけ、大正四年（一九一五）七月、「労働問題の研究」（卒論）をかいて卒業し、ひきつづき法学部経済科に進んだ。

大学を出てから、しばらく満州の銀行につとめたが、恩師・建部のすすめにより講師として母校にもどった。東大では社会問題大意・社会学演習（外書を用いる）などを担当し、講義の対象にマルクスの『資本論』を取りあげたこともあった。

のち新妻をともなつて文部省の給費生として、ドイツ・イギリスに留学したが、渡欧の船がたまたまドイツに留学する三木 清といっしょであった。三木は東大講師の藤田にいんぎんな態度をとった。

藤田講師はそのまゝ、東大に勤めておれば、すえは教授になっていたであろうが、のちに教師をやめ、区会議員となり、また衆議院議員に立候補し、落選した。投票前、こんなことをいって自信をのぞかせていた。

——ぼくは舌戦だけは、どんな古強者だって負けないよ。都下のたいいていの大学に出ているんだからね（明治、法政、東京女子大学で非常勤講師をやっている意）。小川平吉氏がどんなにがんばっても、女子大生を演説に送ることができるかっていうんだよ（高笑）。

筆者は、このタヌキをあるていど知っているつもりだが、なぜ教職をすて政治家になったのか、よくわからない。いまも謎として残っている。この先生は、生前に一冊も著書をのこさず、また論文らしい論文もかかず、新聞の小記事が、二、三篇あるにすぎない。筆者が接した業績としては、

「労農露西亜の社会保険に就て」（『哲学』第91号所収、岩波書店、昭和4・12）。筆者註に「この稿はロシア保健人民委員セマシユコ教授の報告に負う所が多かった。一言お断りして置く」とある。

「ロンドン労働大学の事ども」（『法政大学新聞』昭和5・6・13付）

「郊外社会学」（『法政大学新聞』昭和7・10・22付）

当時の官僚的な東大教授のなかには、出島の医官として日本にやって来たシーボルトのように、弟子に課題をあたえて書かせた論文を、じぶんの著作として発表する者もいたらしい。それを重ねると、じぶんの背丈よりも高くなると得意になっている学者もいた。

日本のアカデミズムのそのような現状をみるにつけ、無言のタヌキが肩をゆすって哄笑しているように思われてくるという（笠井 忠「藤田喜作校長——わが青年期への回想」『季報 唯物論研究』23巻第67号所収、平成11・2）。

ドイツから帰った藤田は「新人会」にも属し、三木 清らと長野の農民のなかにも足をふみいれ啓蒙活動にも従事したらしい。また戦時中、左翼の活動家がそと訪ねてくると、たびたびそれとなく面倒をみることもあったらしい。が、戦後、そうした志のあつさが失われたものか。じぶんが経営する学校では、組合をつくらせなかったし、赤化が広まるのをひじょうに警戒した。そのため特異な思想傾向をもつ教師は、いつの間にか一人ずつ姿をけしていった。筆者からみれば策士^{マキベリ}であり、タヌキとあだなされたゆえんである。

(24) 吉田九郎の経歴については不詳。国文学関係の著書が多い。社会学関係の論文に「文学の社会学的機能」（『観想』2月号所収、昭和4年）がある。

(25) 今井時郎（一八八九～一九七二）は、宮城のひと。大正二年（一九一三）東京帝国大学文科大学社会学科を卒業。東京帝大、東京学芸大学、大正大学の教授を歴任。

(26) 喜多野清一（一九〇〇～一九八二、昭和期の社会学者）は、和歌山のひと。大正十四年（一九二五）東京帝国大学文学部社会学科を卒業。農村社会学の実証的な研究で知られる。法政大学教授をへて、戦後は九大や阪大、早大、駒沢大の教授を歴任した。

(27) 城 義臣（一九〇四～一九七六、のち参院議員「自由党」）は、熊本のひと。昭和四年（一九二九）早稲田大学政経学部政治学科を卒業。

昭和二年（一九二七）

田中義一内閣の成立。山東出兵の開始。金融恐慌（台湾銀行の気ままな貸つけによる経営不良が明らかになり、各銀行が破産した）がおこった。大正期は終わり、昭和時代に入った。昭和二年（一九二七）社会問題の専門家・高山兼吉は、教務部長となり、また社会学の新たな講師（非常勤）として蔵内数太ほかを招かれ講義を担当した。

法文学部——法律学科、政治学科において。

社会学概論

社会学特殊研究

社会学演習（用書 M. Durkheim: Règles de la methode sociologique）

人口学（とくに人口統計論）

社会学説の変遷

社会事業学^{*}

社会調査^{**}

講読（用書 Tarde: Les lois sociales. Die sozialen Gesetze）

松本潤一郎

財部静治⁽²⁸⁾

小林照郎⁽²⁹⁾

海野幸徳⁽³⁰⁾

小林照郎

† ガブリエル・タルド（一八四三〜一九〇四、フランスの社会学者・犯罪学者）

* 社会福祉事業のこと。ある特定の人間にたいして社会的、個人的原因によって生じた障害を取りのぞき、救済しようとする活動。

** 特定の社会現象の事実的研究——実地調査、統計学的調査、個別的調査などの意。

法政大学社会学会の春の例会（2・11）において、つぎのような発表がおこなわれた。

一 社会連帯主義^{*}

大広数雄

一 社会調査について

駒沢大教授

古坂明詮⁽³¹⁾

注・『社会学雑誌』第37号より。

つづいて秋の同社会学会の例会（10・15）で、つぎのテーマで発表がおこなわれた。

一 社会学的认识論

吳 治範

一 フランス十八世紀に於ける二個の社会哲学チユルギーとルソーに就いて

田辺寿利たなすけとし（32）

さらに十一月の例会（11・19）において、つぎのような発表がおこなわれた。

一 徳川時代農民階級の研究

永 忠雄

一 協同組合きどうくわがはの社会学的考察

平野常治つねはら（33）

注・“例会”とは、定期的におこなう会の意。

* 社会の一員としての人間の相互依存、相互扶助の関係。フランスのコントやデュルケームは、これを社会生活の原理と考えた。

** アンヌ・ロベール・ジャック・チュルギー（一七二七〜八一、フランスの経済学者。フランス革命直前に蔵相となり財政改革をくわだてたが、反対派によって辞職）。

*** 農民、中小工商业者、消費者などが、相互扶助や経済的便益をうるための組織体をいう。

つづいて法政大学社会学講演会が、同年十一月二十七日に開催され、つぎのような題目で講話がおこなわれた。

一 社会の精神流とその個人相

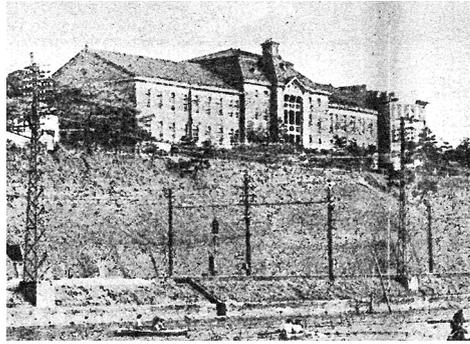
高師教授 綿貫哲雄わたぬき（34）

一 新聞紙と現代文化

帝大講師 小野秀雄おの（35）

社会学会の十二月例会（12・9）では、つぎのような発表がおこなわれた。

法文学部において。



戦前の法政大学の校舎。

『大学シリーズ 法政大学』（毎日新聞社、昭和46・4）より。

一 徳川時代の穢多階級の階級の実相
一 独逸社会学者の研究の現状

佐藤義明
松本潤一郎

* 江戸時代——非人（刑場の雑役などに従事した身分のひくい人）とともに、士農工商の下におかれた階級。

昭和三年（一九二八）

共産党の弾圧事件（三〇一五事件）がおこる。第一回の普通選挙が実施されたとき、共産党は公然と活動をはじめたので、佐野 学・福本和夫・鍋山貞親ら一六〇〇名が逮捕され、うち四〇〇名は起訴された。第二次山東出兵。政府は、特高を整備拡張し、国民思想の取りしまりを強化した。

昭和三年のこんにち、東京帝大の教授のなかにすら、社会学を否定する者がいるという（布川静淵「明治三十年前後の社会学会 社会運動に関する追懐談」『社会学雑誌』第53号所収、昭和3・9）。

社会学概論
社会学史

社会学演習（用書 Durkheim: Règles de la methode sociologique,
Bouglé: Evolution des valeurs）
特別講義（ボガルダスの新社会調査について）

文学士

松本潤一郎

社会と文化

社会学演習 (用書 Oppenheimer-Salomon: †)

Soziologische Lesestücke, II)

社会学演習 (用書 MacIver: Community) ††

国家論 (夜間部)

社会学 (専門部)

社会問題

藏内数太 (36)

藤田喜作

薬師寺志光

文学士

高山兼吉

注・『学界彙報』『社会学雑誌』第50号所収、昭和3・6より。

* エモリ・ステイヴン・ボガードス Emory Stephen Bogardus (一八八二〜一九七三、アメリカの社会学者)。

† フランツ・オッペンハイマー (一八六四〜?)、ドイツのユダヤ系社会学者。のちアメリカに移住。

†† ロバート・モリソン・マキーヴァー (一八八二〜?)、アメリカの社会学者。アバーディン大学、トロント大学、コロンビア大学の教授を歴任。

またこの年の法政大学社会学会の講演会が、十月二十七日大学の講堂において開催された。題目と講演者はつぎのとおりである。

一 社会の二元性 拓大教授 小林 郁 (37)

一 文化社会学* 法大講師 藏内数太

一 争闘の社会学 法大教授 松本潤一郎

社会学会の例会 (2・4) においては、つぎのような発表がおこなわれた。

一 社会構造の因子的研究 城 義臣

一 寺院の社会的関連 大広数雄

一 現代社会学のもつ意義 松本潤一郎

さらに年暮れに開かれた例会（12・8）においては、左記の発表がおこなわれた。

一 Ch. W. Mangold: Sex freedom and social control [紹介] 高月 昭

一 明治年間に於ける社会学的研究

しゅんはな(38)
下出隼吉

* Kultursociologie の訳語。第一次大戦後、ドイツで提唱された社会学の一部門。文化諸要素間の関係、文化全体の性格を社会とのかかわりにおいて研究する立場。

昭和四年（一九二九）

国内では慢性的不況がつづいた。ニューヨーク——ウォール街でおこった恐慌は、やがて全世界に波及し、日本もその影響を受けた。共産党の大検挙がおこり、党の幹部のすべてが逮捕された（四一―一六事件）。東京市電のストライキがおこった。

文学科、哲学科において。

社会学特殊研究（「社会学の諸問題とくに教育社会学的問題」）

蔵内教太

〃 (A. Vierkandt: 用書 Staat und Gesellschaft in der Gegenwart)

藤田喜作

† アルフレート・フィーアカント（一八六七?）、ドイツの社会学者。ベルリン大学教授。

経済学部——経済学科、商業学科において。

社会心理学

文学博士

桑田芳蔵

この年の法政大学社会学科の学生の卒論名は、つぎのようなものであった（昭和4・3）。

栗田 仁 徳川時代の浪人について

長谷川 進 権力について

呉 治範 知の社会学について

永 忠雄 近世封建社会における農民の研究

注・『社会学雑誌』第62号より。

これら四人の若い学徒の論文は、『法政大学論集』（第二号）に掲載された。栗田論文は、浪人の発生を政治的発生と、社会的発生の一原因にもとめ（第一章）、その消極的生活と、積極的行動を論じ（第二章）、さいごに徳川幕府の浪人政策を威迫的、救済的の二法面からのべたものである。長谷川論文は、デュルケームの集合表象の威圧力を、ついで社会的勢力（威力、富力、権力）についてかたり、権力の本質におよんだものである。この論文は主として権力の現実的すがたを把握しようとしたものという。

呉論文は、知的活動と社会との関係について論じたものである。知的発生にはどのような社会的条件が必要か——それに答えるのが知の社会学という。永論文は、徳川の封建治下の農民について論じたものである。徳川時代の社会をどうとらえるか。この点に関して学者のあいだでも意見が二派にわかれ、一つは専制的警察国家として捉え、もう一つは中央集権的封建制度の社会とする見方である。論者は後者の見解にたって論をすすめている（佐藤義明の批評『社会学雑誌』第六六号所収）。

慣例の法政大学社会学講演会が、大学の講堂において開かれた。テーマと講演者は、左記のとおりである。

受胎制限にたいする社会政策的立場よりの批判

法大教授 高山兼吉

農民文化と言語現象

東京朝日新聞顧問 柳田国男

社会学の改造

法大教授 三木清

昭和五年（一九三〇）

金輸出解禁により、為替相場が急とう、それにともなう物価や株式が暴落し、中小企業は大きな打撃をうけた。企業による人員整理、賃金切下げ、労働強化が進行した。とくに農村の不況は深刻化し、冷害と不況により、東北地方を中心として、娘の身売りがよくおこなわれた。多くは芸者や娼妓になった（『明治・大正・昭和 世相史』社会思想社、昭和42・6）。

このころの勤め人^{（女性）}の時間給・日給・月給などは――

モデル	着衣のばあい	三時間一円。
	裸体のばあい	三時間一元五〇銭。
女工	日給	五〇銭〜七〇銭。
事務員	月給	二〇〜五〇円。
吉原の娼婦	泊りのばあい	三元〜十円

法文学部において、つぎのような講義がおこなわれた。

- 社会学（概論？）
- 社会学演習（用書 Bouglé et Raiffaut: Notions de sociologie）
- 文化社会学の諸問題
- 社会学演習（用書 W. Sombart: Soziologie）

松本潤一郎

藏内数太

社会学演習 (用書 MacIver: Modern State)

社会学に於ける統計的研究方法

社会政策

(専門部)

社会学 (第一部)

社会学 (第二部)

社会問題

藤田喜作

林 恵海 (39)

岸本 誠二郎 (40)

薬師寺光

高山兼吉

法政大学社会学会例会が、二月一日(土)午後一時から同大学社会学研究室においてひらかれた。卒業生(社会学科第四回生)は七名であり、これらの卒論の内容についての講述、批評がおこなわれた。

片氏 鉄次 都市社会の研究

高月 昭 マッキンヴァの現代国家論

中西 定雄 人類化成論(厥初「そのはじめの意か」社会研究)

赤堀 作市 映画芸術の大衆性

伴 覚 共同社会と利益社会

春日 斐男 社会哲学序論

山下 定証 上代社会の発展過程

さらに社会学会例会(6・14)において、つぎのような発表がおこなわれた。

一 デュイの社会観、教育観

川井 常吉

一 テオドール・ガイガー^{*}の群集および革命論 堀 秀彦⁽⁴¹⁾

また同年十二月の例会において、つぎのような発表がおこなわれた。

- 一 ゲマインシャフトとゲゼルシャフトについて 伴 覚
- 一 社会哲学の基礎的立場 春日斐男⁽⁴²⁾
- 一 社会学上に於ける「方法的自然主義」 黒川純一⁽⁴²⁾

* Theodor Geiger (一八九一〜一九五二、ドイツの社会学者。現象学的社会学のたちばから、個人や集団の概念を機能的にとらえた)。

昭和六年(一九三二)

恐慌と汚職により、政党や政治にたいする国民の不信はつよまった。軍部および右翼団体は、ファシズム体制を確立し、対外進出をさげぶようになった。関東軍による満州事件(一九三一〜三三年の満州侵略戦争)が勃発した。以後、わが国は昭和二十年(一九四五)まで、十五年戦争に突入した。このころの物価――

白米一升売り	外米は七銭。三等米	一七銭〜二〇銭。	うどん・そば	一杯七銭。
牛めし	五銭。	飯屋の定食	八銭(朝食)	昼めし十銭
夕めし	十二銭。	大工・左官の日当	二元〜二元五〇銭。	大卒の初任給
				五〇円。

法文学部――法律学科、政治学科において。

社会学

松本潤一郎



岡本一平が描いた松本潤一郎のマンガ。

文学科、哲学科において。

社会学

松本潤一郎

社会学特殊研究

社会学演習 (用書 Ellwood: Cultural Evolution)[†]

藏内数太

社会問題

高山兼吉

[†] チャールズ・エイブラム・エルウッド (二八七三?、アメリカの社会学者。ミズリー大学教授)。

経済学部——経済学科、商業学科において。

社会学

松本潤一郎

専門部 (一部)

社会学

大場実治

社会政策
社会問題
社会政策

法大教授
岸本誠一郎
高山兼吉

専門部（二部）

社会政策
社会学

法大教授
大島 清
高山兼吉

また本学において社会学を主専攻とする者は、左記の非必修科目より、二科目以上を選択せねばならなかった。

〔非必修科目〕

社会学	社会心理学	古典語	欧州文芸史
美術史	社会学特殊研究	西洋古典文学	国文学史
文学概論	文学各論	文化史	仏教概要

さらに左記の学科から四科目以上、選択せねばならなかった。

〔選択科目〕

論理学	認識論	宗教学	言語学
政治史	民法	刑法総論	統計学
経済史	社会政策	法制史	新聞研究
社会問題	近世哲学	文化史	仏教概説
美学	行政学	国際公法	

この年の社会学会公開講演会（11・17、土曜日）は、つぎのテーマで発表がおこなわれた。

開会の辞	喜多川清一
一 戦争の社会学	黒川純一
一 有閑論	赤川良護
一 ファッシスト・イデオロギー	加田哲二
閉会の辞	松本潤一郎

昭和七年（一九三二）

第一次上海事変おこる（日中軍の衝突）。海軍の青年将校によるクーデターおこる（五・二五事件）。ここに政党政治はおわり、軍部が力をもつようになる。日満議定書により、満州国の承認。しかし、国際連盟はリットン報告書にもとづき、満州国の取りけしを可決。日本は翌年国際連盟を脱退した。

この年、経済学部において。

社会学

松本潤一郎

文学部において。

- 社会学
- 社会学特殊研究
- 社会学演習
- 社会学特殊研究
- 社会学演習
- 社会学演習

松本潤一郎

藏内数太

藤田喜作

専門部（第一部）および高等商業部において。

- 社会学
- 社会問題
- 社会政策

大場実治

高山兼吉

専門部（第二部）

- 社会政策
- 社会学
- 社会事業
- 交通（陸運・海運）

岸本清二郎

松本潤一郎

大島 清

昭和八年（一九三三）

ファシヨ的風潮がつよまり、滝川事件がおこる。以後、学問の自由はうしなわれる。プロレタリア作家・小林多喜二が虐殺される。
この年、社会学関係の担当者は――

法学部	社会学	松本潤一郎
	新聞研究	小野 秀雄
文学部	社会学概論	文学部長 松本潤一郎
	社会学特殊研究	
	社会学演習	
	社会学特殊研究（文化社会学）	藏内数太
	社会学演習	喜多野清一
	農村社会調査	林 恵海
経済学部	宗教学	松本潤一郎
	社会学	南 譲二
専門部（第一部）	社会政策	
	社会学	大場実治
〃（第二部）	社会学	松本潤一郎
	社会事業	大島 清
	交通（陸運、海運）	
高等商業部	社会学	松本潤一郎

なおこの年の学則変更申請によると、哲学科課程のうち、社会学を専攻する者の必須科目は、つぎのようになっている。

哲学概論 一	心理学概論 一	倫理学概論 一	教育学 一
教授論 一	集団社会学 一	応用社会学 一	社会学演習 三
西洋哲学史概説 二	社会学概論 一	倫理学(東西) 二	哲学特殊研究 一
哲学演習 二	文化社会学 一	社会学史および社会思想史 一	
社会調査 二			

注・数字は単位数をあらわす。

また選択科目としては、――

*東洋哲学(支那)宗教学 一	*西洋哲学史 一	*東洋哲学史概論(支那およびインド) 二
*経済政策 一	憲法 一	*行政法総論 一
*心理学特殊研究 一	*文化史 一	*語学(英・独・仏のうち一つ) 二
*東洋哲学(インド) 一	*美学 一	論理学 一
社会政策 一	民法(総則および親族相談) 二	行政法各論 一
統計学 一		*経済原論 一
		認識論 一

注・右の学科ちゅう、在学中に八単位選択する。*は新設科目をしめす。

これらの科目の担当者はつぎのようである。

応用社会学*

兼任

林 恵海

社会学史および
社会思想史^{**}

専任

松本潤一郎

社会学特殊研究

〃

藏内数太

社会調査

松本潤一郎

応用社会学

林 恵海

* 社会の原理を理論的に研究する純粹（正）社会学にたいして、その現实的、可能的な応用を採求する社会学。
** 社会についての思想。社会組織の改造を目的とする思想の歴史。

昭和七年度の法政大学の社会学関係の卒業論文名は左記のようなものである。

画家階級考

倉田恒雄

社会学的教育論

細江川潔夫

注・「学界彙報」『社会学徒』所収、昭和8・3より。

昭和九年（一九三四）

農村不況はあいかわらず深刻であった。溥儀が満州国皇帝となる。日本はワシントン海軍軍縮条約の廃棄を通告し、国際的に孤立化のみちを歩むようになる。この年、前年に起った「法政騒動」（予科教授の紛争問題）が、一段落した。

この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

法学部

社会学概論

松本潤一郎

社会政策

星野辰雄

社会学史および社会思想史

林 恵海

は西洋人の考え、西洋人の観念の体系を問題にする必要があるが、それは肥しのためである。西洋人のものを肥やしとすることでなく、じぶんがそれを糧としてどう育つかが問題だという（今井）。

田辺は在来の日本社会学にたいして不満があった。かれの観るところ、哲学と社会学がごっちゃになっているという。事実の研究をひとつもせず、理論を立ててゆくやり方、それは科学ではない。これまで『……原理』『……概論』と題する著作が日本に出ているけど、それは哲学であって、科学ではない。社会学の概論書には、事実研究を何もせず、いきなり書いたものが多い。

高田さんの原理は、西洋人のやった研究であり、いまではああいう行き方は許せないと思う。

三木は社会学の専門家でないとして断つてから、歴史的な事実、実証的な事実^{（1）}に立脚して体系をつけてゆく方法が、こんど日本の社会学者が学ばねばならぬ点だという。またいったいに日本の社会学者の本はよみにくい、といい、円谷が書いた本のように、よみやすく、だれにでもわかる、役に立つ本が出ることを望ましいといった。

杉森は満鉄の夏期大学に招かれ、昭和九年八月中旬から下旬にかけて七ヶ所（大連、奉天、新京、ハルピンなど）で講演旅行をしたが、そのときの感懐を披ろうした。かれの結論は、満州の発生（建国）および存在は、いわば大陸主義の第一歩たるべきものであり、日本にとって必要なものである。いいかえると、満州は軍事的、経済的にも『日本の生命線』だというのであろう。そんな風に思っただけで帰国したという。

また対満政策の根本方針は、技術移民にあるべきであり、それは物質技術ばかりでなく、社会技術（立法、行政組織、経営、管理、企業、教育など）の方面に、日本が努力を払う余地があると感じたという（『社会学徒』第8巻第11号、社会学徒社、昭和9・11）。

当時、満州では法と秩序の安定はなかった。同国への投資は、軍用鉄道、軍事産業が中心であり、住民の日常生活の向上はなく、品物は売れないし、ゲリラが活発化していた。^{（47）}

この年の社会学会公開講演会（10・27、午後一時から大教室において）は、つぎのテーマで発表がおこなわれた。

- 一 満州の忠霊塔を巡礼して
- 一 宗教の社会的機能
- 一 満州の忠霊塔を巡礼して
- 一 宗教の社会的機能
- 一 武力社会より余力社会への隆替（さかえること、おとろえること）

林 恵海

浜田本悠

巨橋頼三

一 ソヴェートの新聞とナチスの新聞——いわゆる闘争新聞について 小川栄三

昭和十年（一九三五）

満州国皇帝の来日。中国共産党は「救国抗日」を宣言。天皇機関説問題おこる（天皇は国家を代表する最高機関にすぎず、主権は国家にあるとする説——東大教授・美濃部達吉が唱えたもの）。著書『憲法撮要』は、発禁となる。

この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

法学部	社会学	松本潤一郎
	社会政策	
	政治論	星野辰雄 ⁽⁴⁸⁾
文学部	社会学特殊研究（文化社会学？）	林 恵海
	社会学概論	
	社会学特殊研究	松本潤一郎
	社会学演習〔論文指導〕	
	社会学調査	喜多野清一
	社会学演習	
経済学部	社会学演習（用書 Vierkandt: Staat und Gesellschaft）	黒川純一
	社会学	松本潤一郎
	社会政策	南 謹二 ⁽⁴⁹⁾
専門部第一部	社会学	松本潤一郎
〃 第二部	社会学	松本潤一郎
	社会事業（専門部）	大島 清 ⁽⁵⁰⁾
	社会政策（〃）	南 謹二

法政大学社会学会の例会が、いつものように午後一時から社会学研究室でひらかれ、一月例会ではつぎのような発表がおこなわれた。

- 一 デュルケームの社会実在論 (学生) 斎田 隆
 - 一 農村教育についての考察 (帝大農学部助手) 浜口徳治
- (農村教育二十年の経験により、近來の農村社会の情勢と農村教育の動向を批判解説したもの)

また六月例会(6・29)の発表は、つぎのテーマでおこなわれた。

- 一 妥協について 黒川純一
- 一 社会選良思想について 長谷川進(51)
- 一 一座(一つの目的で集まっている場所の意か)について 田村興一

昭和十一年(一九三六)

二二二六事件おこる(陸軍の皇道派青年将校らの反乱)。広田弘毅内閣の成立。日独伊防共協定が締結される。メーデー禁止令でる。この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

法学部	社会学	松本潤一郎
	社会政策	
	政治学	星野辰雄
文学部	社会学史	林 恵海

社会学概論

応用社会学（社会学の実践化問題）

社会学演習（社会意識*に関して）

社会学調査（農村社会調査）

社会学演習

社会学演習

社会学史および社会思想史

社会政策

社会学

社会政策

社会学

社会事業

社会政策

松本潤一郎

喜多野清一

黒川純一

林 恵海

南 謹二

松本潤一郎

星野辰雄

松本潤一郎

大橋武夫

南 謹二

*社会にたいする関心もしくは認識。社会を構成する者が共有する思考、感情、意志。

また例会（5・30、社会学研究室）において、つぎのような発表がおこなわれた。

一 徳川社会史の研究

巨橋頼三

一 英国における地方自治制度の発達

小田忠夫

昭和十二年（一九三七）

第一次近衛内閣が成立。盧溝橋事件をきっかけに日中戦争がおこり、やがてドロ沼の長期戦におちいる。

この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

法学部

社会学

松本潤一郎

社会政策

星野辰雄

政治学

文学部

社会学特殊研究 (文化社会学)

林 恵海

社会学概論

社会学特殊研究 (集团社会学)

松本潤一郎

社会学演習 (用書としてフランス語図書)

社会調査 (農村社会調査)

社会学演習 (用書 H. Freyer: [†]

喜多川清一

Einleitung in die Soziologie)

社会学演習

黒川純一

〃 (用書 C. H. Cooley: ^{††} Introductory Sociology)

森 東吾

経済学部

社会学

松本潤一郎

専門部第一部

社会政策

星野辰雄

社会学

松本潤一郎

専門部第二部

高等商業部 (夜間)

社会事業

林 敬三

社会学

松本潤一郎

社会政策

南 謹二

[†] ハンス・フライヤー (一八八七〜?)、ドイツの社会学者。ライプチヒ大学教授。

^{††} チャールズ・ホートン・クリーリー (一八六四〜一九二九、アメリカの社会学者。ミシガン大学社会学部教授)。

国家総動員法（戦争を遂行するため、人的・物的資源を統制・運用する権限を政府に委任）が発動される。東亜新秩序建設の声明がおこなわれる。

昭和六年（一九三二）以来、学部長をつとめた松本潤一郎は辞任し、東京高等師範学校に転出した。法政は兼任教授となった（『法政大学百年史』、四六〇頁）。

この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

法学部	社会学	松本潤一郎
文学部	社会学特殊研究	林 恵海
	社会学概論	松本潤一郎
	社会学特殊研究	
	社会学演習	
	社会学調査	喜多野清一
経済学部	社会学	下条康磨 ^{（52）}
	社会学政策	松本潤一郎
	社会学	秋保 ^{あきほ} 一郎 ^{（53）}
専門部第一部	社会学政策	松本潤一郎
	殖民政策	小野義一
	社会学	大橋武夫
専門部第二部	社会学政策	
	社会事業	

この年、哲学専攻を哲学科に、心理学や社会学専攻はそれぞれ心理学科—社会学科とすることが協議され、専攻という呼称が学科となった（『法政大学百年史』、四六〇頁）。

昭和十四年（一九三九）

満蒙国境でノモンハン事件おこる（日本とソ連の衝突）。大学において軍事教練が必修科目となる。齋藤隆夫の軍部批判演説。北部仏印進駐の開始。大政翼替会の成立。津田左右吉の記紀の研究書が発禁となる。

この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

法学部	社会政策 植民政策	秋保一郎
	社会学	松本潤一郎
文学部	社会調査	喜多野清一
	応用社会学	林 恵海
	社会学史	松本潤一郎
	社会学概論	松本潤一郎
	社会学演習	松本潤一郎
経済学部	社会学	下条康磨
	社会政策	錦織理一郎
学部名？	統計学	松本潤一郎
専門部第一部	社会学	小野義一
	社会政策	大橋武夫
	〃	大川周明 <small>（54）</small>
大陸部*	部長	松室孝良
	大陸社会事情 修身	陸軍少将
	社会学	松本潤一郎
	社会事業	大橋武夫

高等商業部（夜間） 社会学
 倫理学
 高等師範部 社会学

森 東吾 (55)
 森 東吾

* 新東亜建設、大陸経営にあたる人材を養成するために、大陸部が新設された（『法政大学百年史』、二四八頁）。

法政大学社会学会例会は、第二回目の例会をひらき（7・1）、つぎの講演がおこなわれた。

- 一 社会教育の体験 堀 秀彦
- 一 社会調査——原理と実際 駒沢大教授 古坂明詮

昭和十六年（一九四一）

東条内閣の成立。南部仏印進駐の開始。日本の命運をかけた大東亜（太平洋）戦争の開始。小学校は“国民学校”となり、小学生にも軍事教練をさせる学校もあらわれた。「皇軍は各地に転戦、連戦連勝、まことに、ご同慶の至りであります」（ラジオ放送での東条首相のきまり文句）。

この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

法学部	社会学	文学博士	松本潤一郎
文学部	社会学概論		松本潤一郎
	社会調査		喜多野清一
	実習		小野武夫 (56)
	日本社会史		秋保一郎
	植民政策		松本潤一郎
経済学部	社会学		



三木 清教授

専門部第一部

社会学

松本潤一郎

〃 第二部

社会学

論理学

森 東吾

社会事業

大島武夫

社会政策

喜多野清一

高等商業部(夜間)

社会政策

喜多野清一

社会学

森 東吾

高等師範部

社会学

森 東吾

昭和十七年(一九四二)

マニラおよびシンガポールを占領。東京、米機による初空襲をうける。

この年、法政のマルクス主義哲学者・三木 清(一八九七〜一九四五)は、太平洋戦争を肯定し、戦争への協力をよびかけた。「絶対に信頼しうる陸海軍を有することを誇りとする国民は、不敗必勝の信念をかため」「中略」皇軍のめざましい活躍に呼応しなければならぬ」「戦時認識の基調」(『中央公論』昭和17・1)。大東亜会議が開催された。

ミッドウェー海戦により、日本軍はじめて大敗北をする——空母 四、重巡洋艦 一、飛行機 三三二、兵員 三五〇〇名うしなう。以降、日本軍は劣勢にむかう。

昭和十八年（一九四三）

ガダルカナルより日本軍撤退。アッツ島の守備隊全滅。学生、生徒の徴兵猶予が停止され、東京帝大以下七十七校三万人の学生が出陣（学徒出陣）。それを送る学徒は九十六校五万人。秋の冷雨ふりしきる中、東大につづいて、慶応、早稲田、明治、法政、中央、日本、専修、立教、拓殖など、各大学の学徒が市中を行進した（10・21）。

昭和十九年（一九四四）

日本人は緒戦の戦果にまどわされたが、ミッドウェー海戦の敗北を機に形勢は逆転した。東条内閣が総辞職した。神風特別攻撃隊の出撃。米機による本土爆撃はじまる。銀座の雑炊食堂はどこも長蛇の列をなしていた。値段は三〇銭。ふつうは一杯二〇銭。集団疎開が秋ごろから始まり、各地方に移動。

この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

法文学部政経科	社会学	松本潤一郎
	植民政策*	
	社会政策	秋保一郎
法文学部 文学科	社会史（支那）	鈴木俊
	社会史（欧米）	林達夫
	社会史	？
法律科 一群	社会学	黒川純一
	社会政策	秋保一郎
〃 二群	社会学	黒川純一
大陸部 一群	大陸社会事情	菊池門也 <small>（57）</small>

* 植民地の経営に関する政策。



理事・竹内賀久治

植民政策

秋保一郎

〃 二群

大陸社会事情

菊池門也

植民政策

このころ法政を牛耳っていたのは、学務担当の理事・竹内賀久治（校友、弁護士、国本社「国家主義的思想団体」の幹部）であった。また軍事教練を担当する配属将校はいばっており、教授会に出席し、学生の及落到大きな発言力をもっていた。教員らはそれにはたいして抵抗をしめさず、小さくなっていた。大学としては国策に迎合するしかなかった。

昭和二十年（一九四五）

惨敗をひたかくし、国民をあざむき、ひたすら戦争に駆りたてていた日本政府は、独伊の降伏、ソ連の参戦、原爆の投下などにより、ついにポツダム宣言を受諾し降伏した。昭和二十年（一九四五）五月末～六月上旬にかけての空襲により、市ヶ谷の第二校舎、六角校舎、新館をのぞき、校舎の大半を焼失した。「焼けあとの校舎は、江東地区あたりの貸事務所のような感じ」であり、貧相な大学にみえたようだ（中村 哲「君らはなぜ法政に入ったか」『法政』第8巻・第4号所収、昭和34・4）。

終戦宣言から三日後——食料難の東京では八月十八日からヤミ市がはじまった。米軍の残飯をあつめ、ドラムかんの中に放り込んで煮つめたものが、ヤミ市で売られた。俗に「残飯シチュー」と呼ばれたもので一杯十円だった。大阪の天王寺動物園では、動物の盗難がおり、残っているのはサル、キツネ、ワニのたぐいであった（下川耿史『昭和性相史 戦後篇 上』伝統と現代社、昭和55・6）。

山口組の親分・田岡一雄は、灯火管制と夜間爆撃とで、夜は開張できないから、昼まえ賭場にいた。正午に天皇の重大放送があると聞いていたので、みんな正座してラジオの前にすわっていた。終戦の放送をきいたとたん、虚無状態におそわれ、三々五々賭場から姿をけしていった。

一般大衆を待ちかまえていたのは、敗戦による混乱と虚脱、食料難であった。国民学校から大学まで、どこも、ヤミ市場化した。九月中旬から授業をはじめたが、勉強よりも飢えをしのぐのが先決問題であった。

この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

法文学部法律学科	社会学概論	松本潤一郎
文学科	社会学概論	松本潤一郎
経済学部経済学科	社会学概論	松本潤一郎
(学部不明)	社会調査 実習	喜多川清一

昭和二十一年（一九四六）

天皇の人間宣言。極東軍事裁判がはじまった。日本国憲法の公布。GHQにより、軍国主義者の公職追放および超国家主義団体の解散を命じられた。

この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

法文学部	社会学理論	松本潤一郎
	社会学演習	松本潤一郎
	社会史	喜多野清一
	社会調査	喜多野清一

昭和二十二年（一九四七）

片山哲内閣の成立。六・三制の教育制実施。日本国憲法施行。

この年の物価——たえず上昇をつづけた。

内地米（一〇キロ）	九九円～一四九円。	清酒（一級）	四三円～一〇二円。
都電	五〇銭～二円。	銭湯	一円～四円

この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

法学部	社会学	喜多野清一
文学部 ^{リテラ}	社会学概論	松本潤一郎
〃	〃	喜多野清一

昭和二十三年（一九四八）

芦田内閣の成立。日本経済の復興すすまず。極東軍事裁判の判決くだる——東条以下七名は死刑、十六名は終身禁固。シベリアからの帰還兵の歌「異国の丘」、NHKのど自慢で歌われるようになる。

この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

法学部	社会思想史	田代正美
	東洋社会思想史	加藤惟孝 ^{（元亮）} （58）
	社会政策	上杉捨彦

文学部	社会学概論	大場実治
	社会学概論	黒川純一
	社会学	斉田 隆
	日本社会経済史	丸山忠綱
	日本社会思想史	井上光貞
経済学部経済学科	社会政策	上杉捨彦
商業学科	社会思想史	池島重信 <small>いけしましげのぶ</small> (59)

昭和二十四年（一九四九）

総選挙で共産党が大躍進をとげた（35人）。第三次吉田内閣の成立。為替レートを決定（二ドル＝三六〇円）。下山、三鷹、松川事件おきる。日本経済がようやく回復へとむかう。中華人民共和国の成立。

学校教育法にもとづく、新制大学への認可申請がおこなわれた。旧予科は教養部となり、法・文・経済学部が認可された。終戦後、日本列島には失業者が八〇〇万人いたとされる。都内の職業安定所（いまでいうハローワーク）には、自由労働者や戦争の犠牲者（よれよれの戦斗帽、ボロボロのゲートル、肩からさげている防空カバンといった服装）——要するにルンペン姿の失業者、インテリ失業者（大学教授もふくむ）、未亡人の失業者らが、月給二、三百円をうるために行列した（『社会評論』昭和24・8を参照）。この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりです。

教養部	社会学	教授	長谷川 進
	〃	〃	池島重信
	〃	〃	大場実治

法学部

社会思想演習特講

教授

日高定雄

社会思想史

講師 兼任

田代正夫⁽⁶⁰⁾

〃

〃

加藤惟孝

社会調査

〃

瓜生忠夫⁽⁶¹⁾

社会保障論*

〃

富岡剛二

労働問題概論(第一部)

教授 兼任

上杉捨彦⁽⁶²⁾

文学部

社会学

講師 兼任

黒川純一

経済学部

社会政策

助教授 専任

上杉捨彦

短期大学部 教員予定

社会学

教授 兼任

池島重信

通信教育部執筆担当教員

社会政策

上杉捨彦

協同組合論

山村 喬

* 国民の生存権を守るためのもの。社会保険制度により――病氣・傷害・失業・老齢・出産・死亡などによって生ずる、生活上のさまざまな問題を保障する。

昭和二十五年(一九五〇)

マッカーサー、共産党員の追放を指令。警察予備隊(自衛隊)が設置される。公職追放の解除。朝鮮戦争の開始により、デフレにあえいでいた日本経済に特需ブームがもたらされる。軍需生産の再開。

この年、法政の上杉、田代、菰淵の三教授は、レッドパージ事件からむ声明書問題で辞職した。

この年の各学部の学生数は、つぎのとおりである。

学部	学部長	学生数
法学部	中村 哲	七四〇名
文学部	谷川徹三	七六八名
経済学部	錦織理一郎	二、一〇六名
教養一部	大田悌蔵	一、七三五名
〃 二部	多田 基	七七五名
専門一部	薬師寺志光	二、一九九名
〃 二部	平野常治	一、六〇四名
通信教育部		九、七〇〇名
工学部		
機械工学部		五〇名
電気工学部		五〇名
建築工学部		五〇名
経営工学部		一〇〇名

計 二九、九〇四名。

注・『私学年鑑 昭和26年版』自由教育図書協会、昭和25・9より。

昭和二十六年（一九五二）

マッカーサー解任される。サンフランシスコ講和会議において、日本と四十八カ国とのあいだに平和条約が調印され、さらにアメリカとのあいだには、日米安全保障条約がむすばれた。日本は占領六カ年にして独立した。

この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

教養部
法学部

労働問題概論
世界労働事情

教授 池島重信
教授 飯田貫一

政治思想史演習

〃 日高定雄

世界労働運動史

〃 倉持文雄

社会思想史

労働組合論

助教授 船橋尚道⁽⁶³⁾

文学部

社会思想史

第一高等学校校長 池島重信

社会学

教育社会学^{*}

講師 齊田隆⁽⁶⁴⁾

経済学部

社会政策

演習

助教授 上杉捨彦

社会思想史

〃 田代正夫

* 教育と社会との関係——教育に及ぼす社会の影響、教育の社会的なはたらきなどを研究する学問。

注

(28) 財部静治(一八八一—一九四〇)は、鹿児島の一。統計学者。独・英・米に留学し、大正四年(一九一五)母校京都帝国大学の教授となり、統計学を担当した。

(29) 小林照郎(一九一九?)は、東京帝国大学文科大学哲学科において社会学を専攻した。大正十二年(一九二三)わが国初の公立女専——福岡県立女子専門学校の初代の校長となる。著書に卒論を本にした『日本の社会』(金港堂書籍株式会社、明治40・1)がある。

(30) 海野幸徳(一八七九—一九五五)は、社会政策学、人口論を専門とした。学歴については不詳。明治から大正にかけて雑誌『太陽』によく寄稿した。

- 遺伝問題の一環として人種の改造について論じた書に『興国策としての「人種改造」』（博文館、明治44・10）がある。
- (31) 古坂明詮（一八九四～一九八八）は、石川のひと。東京帝国大学文学部社会学科を卒業。後年、駒沢大学副学長、曹洞宗大本山総持寺の顧問となる。社会救済や社会事業に関する論文などがある。
- (32) 田辺寿利（一八九四～一九六二）は、北海道のひと。東京帝国大学文学部社会学科を中退。コントとデュルケームの研究と紹介につとめた。『田辺寿利著作集』未采社がある。東洋大学、東北大学、金沢大学の教授を歴任。
- (33) 平野常治（一九〇〇～八二）は、兵庫のひと。神戸高商をへて東京商科大学に入学し、大正十三年（一九二四）同大学を卒業。翌年、法政大学の専任講師となり、昭和五年（一九三〇）教授。停年で法政を退職後、駒沢大学教授となる。専門は経済政策とマーケティング。多くの著作がある。
- (34) 綿貫哲雄（一八八五～一九七二）は、高等師範学校の地理歴史科に学んだのち、大正三年（一九一四）東京帝国大学文学部社会学科を卒業。のち東京高等師範学校教授、東京文理科大学助教授をへて教授となる。が、昭和十七年（一九四二）退職した。心理学的社会学、社会意識を研究の中心テーマとした。多くの諸雑誌に論文を発表したほか、ライフワークとして『維新と革命』（全三巻、大明堂、昭和49・10）がある。
- (35) 小野秀雄（一八八五～一九七七）は、滋賀のひと。三高をへて明治四十三年（一九一〇）東京帝国大学文科ドイツ文学科を卒業。新聞記者となり、『万朝報』『東京日々新聞』などに勤務。大正十五年（一九二六）東京帝大文学部講師（非常勤）となり、新聞学を講じた。のち同大学新聞研究所所長。昭和二十六年（一九五二）東大退官後、上智大学文学部教授。日本における新聞学研究のパイオニア。
- (36) 蔵内数太（一八九六～一九八八）は、岡山のひと。三高をへて大正十年（一九二二）東京帝国大学文学部社会学科を卒業したのち、昭和九年（一九三四）九州帝大助教授、同十年教授となる。文化社会学を専門とした。戦後の昭和二十三年（一九四八）大阪大学教授。退官後の昭和三十五年（一九六〇）関西学院大学教授となり、のち追手門学院大学教授。『蔵内数太著作集』（関西学院大学生活協同組合出版社）がある。
- (37) 小林 郁（一八八一～一九三三）は、東京のひと。一高をへて明治三十二年（一八九九）東京帝国大学文科大学に入学し、同三十五年（一九〇二）同大学を卒業。大学院に入って建部教授に師事し、社会学を専攻。のち大学院を退学し、広島高師教授、拓殖大学教授となる。ほかに中央、日大、慶応、専修、青山学院などに出講したことがある。『社会心理学』（博文館、明治42）『コムト』（富山房、明治42）をはじめ、多くの論文がある（「故小林 郁教授 年譜並に著作年表」『社会学徒』第8巻第7号所収、昭和9・7を参照）。
- (38) 下出集吉（？～？）は、名古屋のひと。大正九年（一九二〇）三高をへて東京帝国大学文学部社会学科に進み、大正十二年（一九二三）卒業論文に「消費の社会的妥当性研究とその基調」をかいて卒業。ただちに同学部大学院に進学。研究テーマは「消費の社会学的研究」。大正十四年（一九二五）

大学院を満期退学後、昭和二年（一九二七）同大学経済学部に入學。同学部副手となる。昭和四年（一九二九）副手を退職。昭和五年（一九三〇）経済学部卒業後、明治学院講師となり、「経済政策」を担当。（『学界彙報——下出隼吉君の長逝を悼む』『社会学』第二輯（一九三二、所収）。日本の社会学史研究の先駆者。

(39) 林 恵海（一八九五〜？）は、山口のひと。五高をへて大正七年（一九一八）東京帝国大学文学部哲学科に入學し、社会学を専攻した。卒業後、同大学の助手となるが、それは前後十三年にもおよんだが、いちども不平をいわなかったという。のち講師（昭和12）、助教授（昭和14）をへて、昭和二十三年（一九四八）戸田教授退官のあとをおそって教授となる。学部では「社会学概論」「社会的分業論」「社会学史」などについて講義し、大学院では「社会学基礎理論特講」「人口社会学特講」などを講じた。（『東京大学文学部社会学科沿革七十五年史記要』『昭和28・12』を参照）。業績としては、諸雑誌に発表した多くの論文のほか、ジンメル、人口理論などについての著書がある。

(40) 岸本誠二郎（一九〇二〜八三）は、岡山のひと。昭和期の理論経済学者。東京帝国大学経済学部になび、昭和二十一年（一九四六）京都帝大教授。京大経済研究所の初代所長。のち国学院大学教授。

(41) 堀 秀彦（一九〇二〜八七）は、金沢のひと。昭和二年（一九二七）東京帝国大学文学部哲学科を卒業。戦前は司法省刑事局思想課において翻訳に従事。昭和二十七年（一九五二）東洋大学文学部教授。昭和四十五年（一九七〇）以後、理事・学長をつとめた。人生論、道徳論、教育に関する多くの著書がある。

(42) 黒川純一（一九〇一〜？）は、一高をへて昭和二年（一九二七）東京帝国大学文学部社会学科を卒業。巢鴨高等商業学校教授、法政大学講師。出征後、昭和十六年（一九四一）日本出版文化協会の図書課長となったが、翌年辞職した。昭和二十三年（一九四八）東大社会学科講師。同二十四年（一九四九）教授となり教養学部勤務し、社会学を担当した。社会学科では、「集団社会学」を、大学院においては「社会学基礎理論」を講じた。

(43) 円谷 弘（一八八八〜一九四九）は、日本大学法学部をへて大正八年（一九一九）京都帝国大学文学部哲学科を卒業。のち日本大学文学部教授となり、雑誌『社会学徒』（通巻十七巻）を発行。

(44) 松原 寛（一八九二〜一九五八）は、長崎のひと。昭和七年（一九三二）京都帝国大学文科大学哲学科を卒業。『大阪毎日新聞』の美術記者をへて、大正十年（一九二二）日本大学教授となる。

(45) 杉森孝次郎（一八八一〜一九六八）は、静岡のひと。明治三十九年（一九〇六）早稲田大学文学科を卒業後、評論家・倫理学者・社会学者・政治学者として活躍。英独に文部省留学生として留学したのち、早大教授（大正8）。戦後、駒沢大学教授。多くの著作がある。

(46) 古野清人（一八九九〜七九）は、静岡のひと。大正十五年（一九二六）東京帝国大学文学部宗教学宗教史学科を卒業。各種の調査・研究機関に勤務

- したのち、昭和二十三年（一九四八）九州大学教授となる。その後、北九州大学学長、東京都立大学、独協大学、武蔵大学、駒沢大学の各教授を歴任。専攻分野は宗教学、社会学、人類学。『古野清人著作集』（全八巻、三二書房）がある。
- (47) 『日本生活文化史 第10巻 軍国から民主化へ』（河出書房新社、昭和61・6）、13～14頁。
- (48) 星野辰雄（二八九三～？）は、東京帝国大学法学部に学び、フランス労働法について研究し、後年、立教大学教授となり、労働法を講じた。
- (49) 南 謹二（一九〇四～四三）は、昭和期の経済学者。法政大学教授。訳書に、メンデルスハウゼン著『戦争の経済学』（日本評論社、昭和17）がある。
- (50) 大島 清（一九一三～八四）は、新潟のひと。昭和十六年（一九四一）東北帝国大学法学部経済学科を卒業。終戦まで満鉄調査部につとめ、昭和二十四年（一九四九）法政大学経済学部助教。同二十七年（一九五二）教授となる。著書に労働運動史や農業問題に関するものがある。経済学博士。
- (51) 長谷川進（一九〇二～？）は、山梨のひと。法政大学文学部哲学科を卒業。
- (52) 下条康磨（二八八五～一九六六）は、東京のひと。明治四十二年（一九〇九）東京帝国大学法科大学政治学科を卒業。内務省に入り、内閣書記官、内閣恩給局長、統計局長を歴任。戦後、吉田内閣の文相。日大教授、郡山女子短期大学長をつとめた。経済学博士。著書に『日本社会政策的施設史』（博文館、昭和15）や『理想社会を求めて』（大日本雄弁会講談社、昭和25）などがある。
- (53) 秋保一郎（一九〇〇～一九八八）は、東京のひと。東京帝国大学法学部政治学科を卒業。国際法を専攻した。昭和二十五年（一九五〇）二月、金沢大学法学部法学科の教授として赴任し、同四十一年（一九六六）定年退官。
- (54) 大川周明（二八八六～一九五七）は、昭和期の国家主義者。昭和十四年（一九三九）東亜経済調査局の最高顧問、同時に法政大学に新設された大陸部の部長となる。敗戦後、A級戦犯となるが、精神障害のため免訴となり釈放。
- (55) 森 東吾（一九〇九～二〇〇二）は、東京のひと。昭和七年（一九三二）法政大学社会学科を卒業。専門は宗教社会学、理論社会学。文部省社会教育局をへて岡崎高師、大阪大学、追手門学院大学の教授を歴任。大阪大学、追手門学院大学の名誉教授。多くの著訳書がある。
- (56) 小野武夫（二八八三～一九四九）は、大分のひと。大分県立農学校を卒業後、農商務省につとめ、その間法政大学専門部政治科に通い、大正元年（一九一三）に卒業。その後、帝国農会、農商務省において永小作慣行（一定の土地で世襲的に農業をおこなう権利をみとめる制度）に関する調査に従事し、その研究成果を大正十三年（一九二四）『永小作論』として発表。またこの研究の副産物『郷土制度の研究』によって東京帝大から農学博士の学位をえた。大正十五年（一九二六）法政大学経済学部講師、昭和六年（一九三二）教授となる。生涯を農村研究——農業史、農村史にささげた。
- (57) 菊池門也（二八八三～一九六四）には、著書として『済南（山東省の省庁の所在地）事変外史刃のほこり』（織田書店、昭和5）や『支那人の見た皇軍の出勤』（精華書房、昭和7）、『没法子（方法がない、しかたがない意）物語』（高見沢木版社、昭和14）などがある。



田代正夫教授

(58) 加藤惟孝(一九一〇〜七二)は、千葉のひと。農学者。昭和十年(一九三五)京都帝国大学経済学部を卒業。同年夏、北京にいき中江丑吉(一八八九〜一九四二、大正・昭和期の中国学者。兆民の長男。東大を出たのち国際法学者・有賀長雄の秘書となり、のち北京に永住)に師事。昭和十三年(一九三八)北京同学会話学校(のち北京興亜学院)教授となる。終戦後、帰国し、昭和二十五年(一九五〇)東京教育大学農学部勤務。講師、助教授をへて、昭和三十五年(一九六〇)教授。

(59) 池島重信(一九〇四〜九二)は、水戸のひと。文芸評論家。昭和四年(一九二九)法政大学文学部哲学科を卒業。社会学、倫理学、社会思想史、ドイツ哲学などを担当した。助手、講師をつとめたが、昭和十年(一九三五)の法政騒動で野上豊一郎とともに辞職。戦後、法政にもどり教授となった。

(60) 田代正夫(一九一九〜?)は、東京のひと。昭和十六年(一九四一)東京帝国大学経済学部を卒業。のち南満州鉄道に入社。やがて応召し、幹部候補生試験をうけようとしたら拒否され、二等兵で召集され、炊事兵となった。この先生の部隊は、さいしゅうとう濟州島(朝鮮半島南西方の沖にある島)に移動になり、終戦と同時に復員することができた。

昭和二十一年(一九四六)東京大学経済学部助手となり、昭和二十三年(一九四八)ごろ法政の専任となって社会思想史をおしえたが、同二十五年(一九五〇)レッドパージ事件で辞職。翌二十六年経済学部助教授として復職。のち社会学部に移り、昭和三十四年(一九五九)教授となる。のち学部長・評議員となる。この先生の一生も波らんに満ちたものであった。法政では社会思想史、経済学、同学史、経済原論などを担当した。

(61) 瓜生忠夫(一九二五〜?)は、台湾に生まる。昭和十六年(一九四一)東京帝国大学文学部ドイツ文学科を卒業。同年、日本映画社に入社。戦後、映画・演劇の評論家となる。明治、法政、中央、専修大学の講師。

(62) 上杉捨彦(一九一八〜?)は、東京のひと。昭和十七年(一九四二)東京帝国大学経済学部を卒業。法政では労働問題や社会政策などを担当した。

(63) 船橋尚道(一九二五〜?)は、東京のひと。昭和二十二年(一九四七)東京帝国大学法学部政治学科を卒業。法政では労働組合論、賃金論を担当した。

(64) 齊田 隆(一九一〇〜?)は、東京のひと。昭和九年(一九三四)法政大学文学部哲学科を卒業。法政では社会学、教育社会学を担当した。

昭和二十七年（一九五二）

第四次吉田内閣の成立。GHQなどの占領機関が廃止され、日本は独立を達成。レッドパージの解除。二重橋メーデー事件おこる。同年四月——旧中央労働学園大学との合併により、本邦唯一の社会問題、労働問題専攻の学部として、——「社会学部」が誕生した。この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

第一教養部	社会学	助教授	本多弥太郎
第二教養部（夜間）	社会学 フランス語		大場実治
法学部	労働問題概論 社会経済史（第二部） 社会経済史（第一部） 社会思想史		飯田貫一 石母田 正 倉橋文雄
文学部	社会学		斎田 隆
短期大学部	社会学		池島重信 <small>しげのぶ</small>
社会学部（新設）	労働関係論 政治学 憲法		村山重忠 <small>（65）</small> 春宮千鉄 <small>（66）</small>

社会思想史
世界労働運動史

社会事業概論

労働科学

生活問題

労働法*

農村問題

農業経済*

社会学

社会史

社会科学概論

日本労働運動史

文化史（労働史？）

逸見重雄 (67)

三隅達郎 (68)

籠山京 (69)

中島正 (70)

栢野晴夫 (71)

桜井庄太郎 (72)

角田豊 (73)

長谷川博 (74)

近江谷駒 (75)

* 賃金労働者の生活の向上を目的とする法の総称。

** 応用経済学の一部野。農業について経済学的観点から考察する学問。

「社会学部」といった新学部の船出は、順風満帆というわけではなかった。この学部の内容が世間によく理解されていないこともあって、学生のおつまりがわるく、第一次募集をしても定員に満たない。第二次募集をしても定員に満たない。とうとう第三次募集をするような悪い状況であった。こんにち一万人以上の志願者があることを思うと、隔世の感がある。

また旧中央労働学園大学から移った教員も、政法大学という大きな世帯のなかになじむことがむずかしく、違和感があったようだ（栢野晴夫「逸見重雄教授最終講義における挨拶」『社会労働研究』第16巻第3・4号所収、昭和45・3）。

昭和二十八年（一九五三）

第五次吉田内閣の誕生。アメリカではアイゼンハワー政権の登場。スターリンの死去。NHKがテレビ放送を開始。

この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

第一教養部	社会学	兼任	本多弥太郎
	社会学	兼任	長谷川 進
第二教養部	社会学	教授	長谷川 進
	〃	兼任	齋田 隆 <small>さきた たかし</small>
法学部	労働問題概論		飯田貫一
	社会思想史		倉橋文雄
	社会経済史		
文学部	社会学		齋田 隆
	社会思想史		池島重信
経済学部	社会政策		藤田若雄
社会学部	協同組合論	教授	村山重忠
	労働組合論		
	世界経済論	教授	逸見重雄
	世界労働運動史 [I]		
	社会学原理	教授	服部之総 <small>はっとりしず(76)</small>
	日本産業構造論		
	労働法	教授	中島 正

農村問題
農業政策

助教授

栢野晴夫

社会政策論
計画経済論*

助教授

藤崎英義

社会思想史

助教授

湯川和夫⁽⁷⁷⁾

労務管理論**

教授(兼任)

森戸太郎

労働科学
生活問題

講師

籠山 京

社会労働運動史〔Ⅲ〕

講師

山本 敞

* 国家の計画にしたがって、生産・流通・消費・金融などが運営されることを研究対象とする。

** 経営者が労働者を企業の経営目的にもっとも適した状態におくための方策。労働条件の改善、教育訓練などについて研究する学問。

短期大学部(夜間)

社会学

池島重信

通信教育部執筆担当教員

社会政策

大河内一男

社会思想史

注・研究助手として

池島重信

増島 宏

芝田進午⁽⁷⁸⁾

同年十月二十四日——「法政大学社会学部創立記念講演会」が、渋谷公会堂において催された。演題および講演者は、左記のとおりである。

挨拶 逸見社会学部長

一 ボアソナードと法政大学

近江谷教授

二 科学者と民主主義

拓植教授

三 平和経済への道
四 政治と教育

大内総長
末川立命館大学総長

おわって聴衆は、チェロの独奏に聞き入った。

注・『法政大学百年史』、五八七頁。

昭和二十九年（一九五四）

第一次鳩山一郎内閣の成立。ピキニ水爆実験により、『死の灰』事件おこる。原水爆禁止をねがう国際世論が高まり、やがて平和運動へと発展してゆく。洞爺丸沈没事件おこる。

この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

第一教養部

社会学

助教授

本多弥太郎

第二教育部

社会学

教授

長谷川 進

社会学

フランス語

教授

大場実治

社会学

講師

斎田 隆

法学部

労働問題概論

世界政治事情

教授

飯田貫一

文学部

社会学

講師

斎田 隆

経済学部

教育社会学
フランス語

大場実治

社会政策

講師

藤田若雄

〃

助教授

上杉捨彦

社会思想史

教授

池島重信

社会学部

協同組合論
労働組合論

教授

村山重忠

世界経済論

学部長

逸見重雄

社会労働運動史 [I]

社会学原論
日本産業構造論

服部之総

労働法

中島 正

農村問題
農業政策

栢野晴夫

労働史
フランス語

近江谷 駒

社会政策論
計画経済論

藤崎英義

社会思想史

湯川和夫

労働科学
生活問題

講師

笹山 京

社会労働運動史 (III)

山本 巖

短期大学部 (夜間)

社会学

池島重信



昭和30年当時の法政大学市ヶ谷校舎のスケッチ。

通信教育部執筆担当教員

社会学

池島重信

同年、十一月一日から三日にかけて、『社会学部祭』が港区芝の麻布校舎において催された。

一日……報告会(写研・農研・朝文研)

紙芝居、幻燈会、人形劇、謡曲「紅葉狩」、弁論大会などがおこなわれた。

講演——「文学の方向」(戸石泰一)

映画——「みどりの園」「米」。

二日……体育祭(午前九時～三時)

三時から——

講演——演題は不明(平野義太郎)

映画——「女の園」「短篇映画」

三日……中夜祭(合唱祭)

一部——十一時

大合唱 委員長挨拶

講演——演題および講演者は不明

映画——「せむしの子馬」「ぶどうのみのる頃」

劇——「ドモヌの死」

二部

コーラス、民族舞踊、構成詩。

映画——「明日はみんなでダンスをしよう」

劇——「かしの木」

昭和三十年（一九五五）

保守、革新の二大政党対立といった新しい時代をむかえ、第三次鳩山内閣の成立。広島で第一回原水爆禁止世界大会がひらかれる。この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

第一教養部	社会学	助教授	本多弥太郎
第二教養部	社会学	教授	長谷川 進
法学部	社会経済史	教授	倉橋文雄
	労働問題概論		飯田貫一
	世界政治事情		
文学部	社会学		吉田 隆
	社会学	教授	池島重信
	社会思想史		
	社会学		
	教育社会学		大場実治
	フランス語		
経済学部	社会政策		上杉捨彦

社会学部

共同組合論

労働組合論

世界経済論

社会学原論

近代政治史

労働法

社会調査

農業政策

社会政策論

社会政策史

社会思想史

労働史

社会統計学

労働科学

社会保障

社会学

村山重忠

逸見重雄

服部之総

中島 正

柏野晴夫

藤沢英義

湯川和夫

近江谷 駒

正木千冬

久保田重孝

吉田秀夫

芥川集一

注・研究助手として

増島 宏

芝田進午

金山行孝

池島重信

池島重信

短期大学部（夜間）

社会学

通信教育部執筆担当教員

社会学



逸見重雄教授 (故人)

この年、『法政大学新聞』(昭和30・3・15付)は、受験生のために各学部の特徴——伝統——現状などについての紹介記事をか、げた。社会学部については、どのように描かれているのか。

法政の学風はのびやかさ、フランス法学によって育った自由と進歩をその学問の伝統としている。

——社会学部ほど学問的な水準をもった学問は、まだ日本にないと聞く。それは社会学部が、単に従来の社会学を学ぶ場合ではないからであろう。

逸見学部長は、こののべたのち、社会学は生きた現実問題から出発していると語った。たとえば、いままでだれも試みたことがない、“社会学問題”の部門は、社会学部の重要な学問として考えられているという。

法政の教授は、むかしから新聞や総合雑誌への寄稿、著作活動などによって——ひろくマスコミで活躍する者が多いのである。

——社会学部の教授陣を例にとっても、幅のひろい教授が多くいるのは壮観である。

たしかに逸見学部長のいうように、それぞれの分野の令名の高い人々をあつめている。逸見は輝かしい斗争の経験者であり、世界経済論と労働運動史の権威である。服部之総は、明治維新史の最高権威。筆者などは暇があるつど、多摩キャンパスの図書館の書庫に入り、そのコレクションをながめた。前学部長の村山重忠は、労働組合論の先覚者である。中島 正は、ドイツの社会保障に関しては第一人者である。

柏野晴夫は、漁業問題の共同調査で、毎日文化賞をうけた篤学のひとである。藤沢英義は、大河内理論批判の小壮学者。湯川和夫は、市民の世界観についての研究があり、毛沢東理論の研究者として知られている。かれは若いころ、よく『法政大学新聞』に寄稿した。いまも健在であろうか(「各学部教授紹介」『法政大学新聞』所収、昭和31・3・15付を参照)。

近江谷 駒(こま)(一八九四—一九六五、大正・昭和期の評論家。ペンネームは小牧近江(こまおとみ))は、社会学部教授と中央労働学院長をかねた。かれは雑誌『種時く人』『太陽』『解放』『我等』『婦人公論』『文芸戦線』『知識人』および諸新聞に寄稿し、文筆家として活躍した。秋田のひとである。その経歴はだいぶ変っている。暁星中学を中途退学したのち、国際会議に出席する父(衆議院議員)とともに渡仏。アンリ四世校に入学するが、放校(月謝滞納により)になる。のちパリ大学法学部を卒業「近江谷駒教授略年譜」『社会労働研究』(第11巻第4号所収、昭和40)。外務省の嘱託として、フランスや仏領インドシナに長く滞在した。講義ノートは、日本語でかくと棒よみする恐れがあるから、フランス語で書くほどのフランス語

のベテランであった。

外地から帰った当初は、日本文がまずく、幼な友だちに直してもらうこともあったらしい。フランス語にかけては、押しも押されもしないうでももっていたが、官僚主義の外務省ではそのらつわんを認める上司がおらず、いっこうに出世しなかった。骨のずいまで国際労働者同盟員、また大の反軍国主義者であった（平林初之輔「小牧近江君」）。

昭和三十一年（一九五六）

石橋湛山内閣の成立。日ソ国交回復。売春防止法の成立。世界的な好況に支えられて、日本経済は神武景気（高原景気）を現出した。この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

第一教養部

社会学

本多弥太郎

第二教養部

社会学

長谷川 進

法学部

社会経済史
社会思想史

教授

倉橋文雄

労働問題概論
世界政治事件

飯田貫一

文学部

社会思想史

池島重信

〃

兼任講師

山本 新

社会学

斎田 隆

経済学部

社会学部

社会政策
演習

上杉捨彦

協同組合論
労働組合論

村山重忠

社会労働運動史

逸見重雄

労働法

中島 正

社会調査
農業政策

教授

栢野晴夫

労働史

近江谷 駒

フランス語

藤崎英義

社会政策特講

助教授

田代正夫

経済学
経済学史

増島 宏

近代政治史
政治学

芝田進午

社会心理学

講師

正木千冬

社会統計学

久保田重孝

労働科学

吉田秀夫

社会保障

芥川集一

社会学

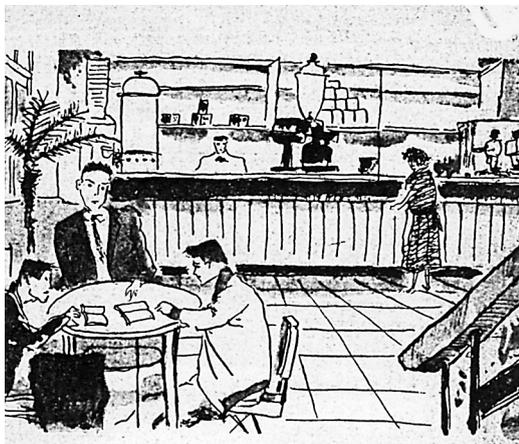
田沼 肇

社会学原論

注・研究助手として
金山行孝

社会政策史

はぶながは(81)
土生長穂



昭和31年当時の法政大学市ヶ谷校舎の「喫茶室」のスケッチ。

自由美術協会会員・小山田二郎 画。



外濠の土手のうえから描いた校舎。

小山田二郎 画。

短期大学部（夜間）

社会学

池島重信

注・雑法『法政』の編集部からスケッチを描くよういわれた画家・小山田二郎は、土手のうえから校舎の外形を描いたとき、ふと戦時中のことを想いだした。キャンパスに出入りする学生の姿をみたとき、日の丸の旗を背に学徒出陣した、いまわしい日の情景をおもいだされたからである（学園の昼さがり）『法政』第5巻第12号所収、昭和31・12。

この年、歴史学界の大立物——服部之総は亡くなった。

昭和三十二年（一九五七）

第一次岸内閣の成立。日ソ通商条約の調印。ソ連が人工衛星第一号を打ちあげる。宇宙時代の開幕。

この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

第一教養部

社会学

助教授

本多弥太郎

第二教養部

社会学

長谷川 進

法学部

社会経済史

倉橋文雄

労働問題概論

世界政治事情

社会主義国家研究

飯田貫一

社会思想史

講師

平田重明

〃

〃

土井正興

文学部

社会思想史

教授

池島重信

教育社会学

社会学

教育学科教授

大場実治

社会学

講師

斎田 隆

社会思想史

〃

山本 新

経済学部

社会政策

演習

教授

上杉捨彦

社会思想史

講師

坂田太郎

社会学部

	社会問題総論		学部長	村山重忠
	世界経済論			
	世界政治論			逸見重雄
	社会労働運動史			中島 正
	労働法			柏野晴夫
	社会調査			近江谷 駒
	農業政策			藤崎英義
	農村問題			田代正夫
	労働史		助教授	増島 宏
	フランス語			芝田進午
	社会政策史			秋田成就
	経済学			芥川集一
	経済学史			田沼 肇
	近代政治史			北川隆吉 ⁽⁸²⁾
	政治学			
	社会心理学			
	民法*			
	社会学	講師		
	社会政策史	”		
	社会学原論	”		
短期大学部(夜間)				
社会学				?
通信教育部執筆担当教員				
社会学				池島重信

* 公法にたいする私法一般をさす。個人の権利について規定した法律。

昭和三十三年（一九五八）

石炭業界の不況につづく。第二次岸内閣の成立。警職法（警察官職務執行法）の審議で国会が混乱。一万円札の発行。
この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

第一教養部

社会学

教授

本多弥太郎

第二教養部

社会学

〃

長谷川 進

法学部

社会経済史

教授

倉橋文雄

労働問題概論
世界政治事情
社会主义国家研究

〃

飯田貫一

社会思想史

講師

平田重明

〃

〃

土井正興

文学部

社会思想史

教授

池島重信

社会学

講師

齐田 隆

経済学部

社会政策

演習

教授

上杉捨彦

社会思想史

講師

坂田太郎

社会学部

社会政策史	社会学	民法 外書講読	哲学 外書講読	社会心理学 外書講読	政治学* 外書講読	近代政治史 外書講読	経済学史 外書講読	社会学 外書講読	フランス語 外書講読	労働史	農業政策 農村問題 外書講読	社会調査	世界政治論 社会労働運動史	世界経済論	社会問題総論	法学 学	労働法 応用経済学科
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	講師	〃	〃	〃	〃	〃	〃	助教授	〃	〃	〃	〃	〃	教授	〃	学部長	〃
田沼肇	芥川集一	秋田成就	芝田進午		増島宏	田代正夫	藤崎英義	近江谷 駒		柏野晴夫		逸見重雄	村山重忠	中島 正			

社会学原論	北川隆吉
社会学	〃
社会調査	〃
社会統計学**	正木千冬
労働科学	久保田重孝
社会保障	〃
社会政策史	吉田秀夫
社会問題特講	玉城 肇

* 政治現象について研究する学問。古代ギリシャにおいて始まった。

** 社会現象に関する統計を研究する。人口統計、経済統計、政治統計、文化統計などがある。

短期大学部（夜間）

社会学

池島重信

通信教育部執筆担当教員

社会学

池島重信

社会学部では卒論を必修としている。この時代の卒論のテーマのなかで、中小企業に関するものが多かったという。学生の出身も中小企業関係の者が多く、就職先も大企業よりむしろ中小企業が多かった。

たとえば、テーマとしては、――

金属洋食器工業の実態 対米輸出制限問題

郷土の産業 社会運動など。

二部の学生のなかには、つぎのようなものをテーマとする者もいた。

職場関係 組合史（じぶんが属する）

社会保障論 労働法規（公務員のばあい）

最近の一般的傾向は、理論問題にふれるものは少ないという（増島 宏助教授「巾広い卒論のテーマ」『法政』72号所収、昭和33・5）。また私学の宿命は、むかしから財政難ということである。が、このころ（昭和33年）の法政大学の教職員の待遇はどうであったのか興味あるところである。職員と教員とに分けてみると、つぎのようになる。

〔職員〕

一五、五〇〇円……二十五歳
 二〇、六〇〇円……三十歳
 三九、七〇〇円……五十歳

〔教員〕

一九、一〇〇円……二十五歳
 二四、一〇〇円……三十歳
 四三、二〇〇円……五十歳

（教職組合員しらべ）

経歴換算その他がくわえられるので、必ずしもこの数字どおりではないという。これらの数字は、国立の東大よりも低く、私立のなかでは慶応よりもよく、早稲田よりもわるく、まあふつうであるらしい（『法政大学新聞』昭和33・9・15付）。

昭和三十三年（一九五八）当時の公務員の給与、大学の授業料、物価などを参考までしるすと、つぎのようになる。

〔月給、日給〕

国家公務員〔一般職〕……………一九、二二二円
 民間会社〔大卒のばあい〕の初任給……………一三、〇〇〇円
 大工の日給……………九〇〇円
 土木の日給……………三三〇〜三八〇円？

〔授業料〕

私立（早大文科）……………三〇、〇〇〇円

国立大学……………九〇〇〇円
 私立高校……………一二〇〇円？
 都立〃……………八〇〇円

〔新聞〕

朝日、毎日、読売（月ぎめ）……………三三〇円

〃……………（一部）……………一〇円

注・『昭和世相史 一九四五～一九七〇』社会思想社、昭和46・2を参照。

公衆電話……………一〇円
 国電（山の手線）……………一〇円
 とこや……………一〇〇円～二〇〇円
 銭湯……………一〇円～一五円
 ピース（タバコ、十本入り）……………四〇円
 喫茶店（コーヒー）……………五〇円～一〇〇円
 かけそば……………二五円
 たぬきそば……………三〇円～三五円
 カレーライス……………一〇〇円
 ラーメン……………三〇円～四〇円
 コッペパンにバターかジャムをぬってもらうと……………一五円
 アンパン……………一〇円
 森永のキャラメル一箱……………一〇円

注・筆者の記憶による。誤りがあるかも知れない。

注

(65) 村山重忠（二八九八？）は、東京のひと。麻布中学、六高をへて東京帝国大学経済学部経済学科を卒業。東京金物商同業組合書記となり、かたわ

もとをはなれ三高に入り、そこから同年（一九二二）東京帝国大学経済学部に入學したが、河津某教授の経済原論の講義に満足できず、大正十二年（一九二三）——二学年のとき、——関東大震災で東京では勉学できなくなったと親をあざむき、河上肇（はじめ）（一八七九〜一九四六、明治から昭和期の経済学者。個人雑誌『社会問題研究』を発行して、マルクス主義の研究と紹介につとめた）を慕って京大経済学部に入學した。

が、大正十五年（一九二六）三学年のとき、京都学連事件（治安維持法による日本初の学生検挙事件）に連座し、被告三十八名の一人として獄中のひとになった。このとき大学を中退した。逸見は、よくよく卒業とは縁のない人であった。

昭和四年（一九二九）都帝産業労働調査所（東京）につとめ、同十五年（一九四〇）太平洋協会の嘱託としてインドシナへ派遣された。

この先生は、机のうえだけの仕事で満足せず、みずからどこへでも足を運び、じぶんの眼でみきわめた。かれは東南アジアの労働事情について実証的研究で知られた。戦時中思想事件で保釈ちゅう、学術研究のためインドシナにおもむいたが、保釈期限がされると、すぐ引きあげて服役するという信義にあつい人間であった。

インドシナに实地調査にいったとき、のち法政で同僚となる近江谷 駒（ペンネーム＝小牧近江）と ハノイ（現・ベトナム社会主義共和国の首都）で会っている。当時、近江谷は台湾拓殖株式会社の子会社の重役をしており、朝から晩までいそがしかった。

——夜半十二時かきり迎えに行くから。

と、逸見に電話した。その夜、近江谷は宴会が二つ三つあったのだが、その間際（かんげき）をぬって、ちょうど十二時にホテルの部屋をノックすると、逸見はちやんと待っていた。

かれは戦時中のどさくさにまぎれて、高飛びできたのに、司直との約束を忠実にまもり、旅行の期限がされると、さっさと帰ってふたたび獄に身を投じた。信義を守るタイプの人であったらしい。学生の就職の世話にしても、一片の依頼状だけで安心せず、日本国中どこへでも出かけて見とどけた。おなじ湘南に住んでいた近江谷、服部之総らは、金曜の夜の授業がおわると、ほっとひと息、一杯ひっかけるのがたのしみであった（小牧近江「逸見部長を語る 謹厳と信義の人」『法政』14号所収、昭和29・7）。

(68) 三隅達郎（みすみ）（一八九九〜一九九四）は、山口のひと。早稲田大学政経学部経済学科にまなんだのち、トロント大学大学院を修了。国際キリスト教大学、関東学院大学教授を歴任。専門は保健体育。

(69) 籠山 享（一九一〇〜九〇、医学博士）は、長崎のひと。昭和九年（一九三四）慶応義塾大学医学部を卒業後、同医学部講師、満鉄衛生研究所員となる。労働衛生、社会福祉、社会保障、生活問題の分野を専門とした。満州から引きあげたのち、中央労働学園大学、法政、北大、上智の各大学の教授をつとめた。著書に『国民生活と構造』『貧困と人間』その他がある。

(70) 中島 正(一九〇七〜二〇〇三、法学博士)は、東京帝国大学法学部法律学科を卒業。その前歴についてはよくわからぬが、大学をおえるとすぐ労働学校で教鞭をとったらしい。戦時中、東亜研究所(昭和十三年「一九三八」九月に設立された全アジア全域に関する総合的な調査機関。昭和十八年「一九四三」当時、研究員は千名をこえた)から、インドネシアのマカッサル Makassar(南スラウェン州の州都。マカッサル海峡にのぞむ港湾都市)に派遣され、土地制度の研究に従事した。この先生、住居は逗子にあり、三崎の新鮮な魚が手に入った。それをみずから料理して肴にし、一杯やるのが好きであった。

法政の社会学部は愛酒家が多かったが、酔いがまわると、「おはこ」(十八番)の「ブンガワン・ソロ」Bungawan Solo(インドネシアのジャワ島最大の小川——ソロの別称。その滔々たる濁流を唄ったもの)を、大声で

——一、二の三。

とかけ声をかけて、インドネシア語で歌いだすのを常とした。

歌いだしたかと思ったら、注釈が入り、雨期になると田畑を押し流される農民の苦しみを唄ったものだと語る。

昭和二十一年(一九四六)十月、中島は南方から復員すると、中央労働学園調査部に勤務した。この専門学校は、のちに中央労働学園大学として四年制の新制大学に昇格した。かれはこの大学の中心メンバーのひとりであった。同学園が法政大学と合併後、社会学部教授として、定年まで約二十六年あまり労働法の講座を担当した。

また社会学部長、同大理事をもつとめたが、法律畑の人であったから理否曲直(道理にかなっていること、はずれていること)に敵であり、不誠実をいちはんきらった(柏野晴夫「中島先生の横顔」、秋田成就「中島 正先生と労働法」『社会労働研究』第23巻第3・4号所収、昭和52・1)。

(71) 柏野晴夫(一九一七〜八二)は、東京のひと。府立第九中学校をへて、昭和十六年(一九四二)東京農業大学農学部農業経済学科(当時、校舎は渋谷常磐松町にあり、空襲により焼失した)を卒業し、翌十七年財団法人協調査部農村課に嘱託として勤務した。昭和十九年(一九四四)六月から同二十年(一九四五)九月まで応召。この間、愛媛県の瀬戸内海沿岸において「人間魚雷」(日本海軍が考案した兵器のひとつ。魚雷に乗員がひとり



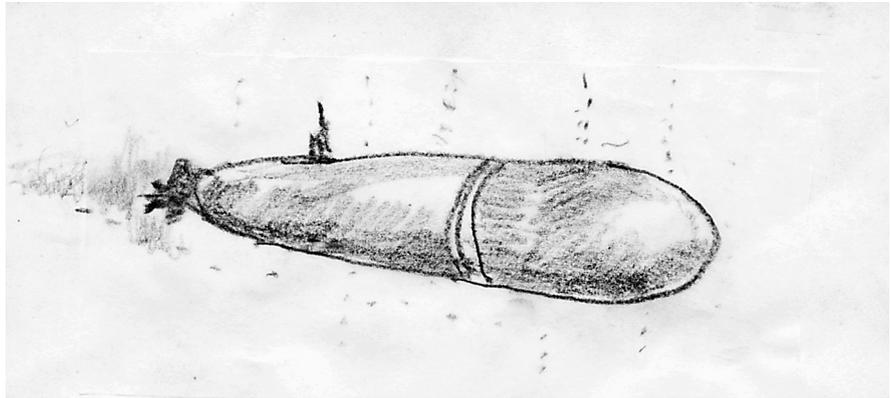
中島 正教授



柏野晴夫教授
(故人)

乗りくみ、みずから操縦して敵艦に体当りする)の訓練をうけ、出撃まえに終戦をむかえた。この特攻訓練は、生命の危険にさらされたものであった。軍隊時代は「いやな思い出」しかなかったようだ。

この先生は、戦争で死んだ人びとにかわって、生き残ったじぶんは、何をすればよいか自問した——このことを原点として、戦後の新しい生活がはじまっ



人間魚雷“回天”(頭部に1・5トンの爆薬を装填し、敵艦に体当たりする特攻兵器)

義に傾倒していった。学生運動、労働運動の指導者として活躍した。昭和三年(一九二九)共産党に入党し、同年三・一五事件(共産党弾圧事件——四〇〇余名を起訴)に連座。以後たびたび検挙と出獄をくり返した。昭和二十年(一九四五)共産党事務局長となる。

昭和二十六年(一九五二)から法政大学講師、教授を歴任した。米騒動、パリ・コミューンの研究に従った。訳書にマルクス著『クーゲルマンへの手紙』(大月書店、昭和23)その他がある。

た。終戦の翌年三月、協調会に復職した。やがて協調会が解散し、中央労働学園に専門学校が新設されると、その助教となつた。法政大学社会学部の創設に参画し、助教として農村問題や農業政策の講座を担当した。が、つぎつぎと大学の責任のおもい仕事——教職員組合委員長、学生部長、学部長、常務理事、大学院議長を歴任した。

常務理事当時、多摩校地(約六一万五〇〇〇平方メートル)の購入確保に尽すいし、法政大学のキャンパス問題はその買付けの成功により一挙に解決した。が、その最大の貢労者は柏野教授であつたという。こんにち隆盛の一途をたどっている社会学部の立て役者は、おいしいことに新橋駅の階段で何かの拍子につまづき事故死した。

(72) 桜井庄太郎(一九〇〇〜七〇)は、東京のひと。児童史研究者・社会学者。大正十五年(一九二六)日本大学文理学部社会学科を卒業。多年、同大学およびその他で教壇に立った。『社会学徒』の編輯に従事し、昭和十六年(一九四二)以後、大日本青少年団本部編集長となる。多数の著作があり、いずれも兼実な手法で書かれたものばかりである。『日本封建社会史』(白鳳社、昭和6)『日本児童生活史』(刀江書院、昭和16)、その他がある。

(73) 角田 豊(一九二二〜七八)は、広島の一ひと。昭和十九年(一九四四)東京帝国大学法学部政治学科を卒業した。社会保障を専攻分野とした。昭和二十一年(一九四六)中央労働学園調査部職員。二十四年(一九四九)同学園助教。二十六年(一九五一)静岡大学文理学部助教。三十九年(一九六四)当時は非常勤講師であつたものか。

(74) 長谷川 博(一九〇三〜八五)は、愛知県の一ひと。京都帝国大学経済学部になび、河上肇(二八七九〜一九四六、明治から昭和期の経済学者、社会思想家)に師事し、しだいにマルクス主義



近江谷 駒教授 (故人)

(75) 社会学部の名物教授のひとり——近江谷 駒は、秋田の名望家の家に生まれ、苦心して語学をまなび、パリ法科大学を卒業した。故郷で雑誌『種時

く人』を創刊したり、初期プロレタリア文化運動にか、わった。昭和四年(一九二九)から同十四年(一九三九)まで、トルコ大使館に勤務した。のち、ハノイの日本文化会館事務所長となった。戦後、中央労働学園大学教授となり、法政大学との合併後、社会学部教授となった。

生前諸雑誌に寄稿したり、著書をあらわしたり、翻訳の筆をよくとったことはよく知られている。この先生は、大の軍人ざらいであり、反軍思想の持主であった。大正十五年(一九二六)二月、軍部が全国の大学や専門学校に軍事教練をおしつけたために、反対闘争がおこったとき、当時「日本フエビアン協会」(社会主義団体)の一員であった近江谷は、新居格(一八八八—一九五一、大正・昭和期の評論家)らと文部省に押しかけ、文部大臣に面会をもとめ、おもちゃの鉄砲を肩にかつぎラッパを口にあてて警官隊の鼻先で歩きまわった。警官隊の指揮官が、

——なんだそれは……そんなふざけたまねをして、
という、近江谷はすかさず、

——軍事教練というものは、こんなものなのだ。わかったか。だから、こんなふざけたまねをやめると、文部大臣に教えてやるためにやって来たんだ」(湯川和夫「近江谷駒教授最終講義における挨拶」『社会労働研究』第13巻第2号所収、昭和41・11)。

この教師は、ちゃめっけとユーモアがあり、酒をこよなく愛した。丸顔にちよびヒゲは愛きようがあった。その顔はいつも赤味をおびていたらしい。波らんに富んだ人生をあゆんだが、謹厳な大学の中では、かたやぶりの人間であった。

学園紛争の時代、ゲバ学生から

——名前をいえよ。

とつめよられたとき、すぐ口から出たことばは、

——酒だ。

であった。相手はキョトンとしていたというから、「酒だ」を「酒田」といった名字と勘ちがいたのではなからうか。

筆者はこういう教師に習いたかった。いまこの愛すべき教師は、鎌倉の稲村ヶ崎に眠っている(秋田成就名譽教授「近江谷先生を偲ぶ」『法政』第5巻10号所収、昭和53・12)。

(76) 服部之総(一九〇一—五六、昭和期の歴史家)は、島根県のみと。

大正十一年(一九二二)三高をへて、同十四年(一九二五)東京帝国大学文学部社会学科を卒



東大社会学科副手時代の
服部之総。



湯川和夫教授

業し、ただちに文学部副手となった。このころからマルクス主義に傾倒。産業労働調査員、労働農民党書記局員を歴任。昭和五年（一九三〇）中央公論社に入社、出版部長となる。レマルクの『西部戦線異常なし』を翻訳出版させたが、当時のベストセラーとなった。翌年退社し、プロレタリア科学研究所所員となった。

昭和十三年（一九三八）花王石けんに入社、上海にわたったが、敗戦の日に退社。以後、学界に復帰し、同二十一年（一九四六）三枝博音とともに鎌倉大学^{アカデミア}を創立し、その教授となる。昭和二十四年（一九四九）日本共産党入党。同二十七年（一九五二）法政大学社会学部教授となる。

この先生は、社会学部の名物教授のひとりであったことはたしかであり、明治維新史、近代政治史の研究で知られ、『明治の政治家たち』は、毎日出版文化賞をうけた。多くの著述のなかで、戦時ちゅう発禁になったものもあるが、学生らはひそかにそれを回読した。

服部はさみしがりやかかつ粹人、話し好きの一面があった。しかし、若い教師らの理論的な質問にまともに答えることはすくなかった。ときどきラジオに出演し、出演料をもらったり、原稿料が入ったとき、

——おごってやるから、おれについてこい。

というような親分肌のところがあった（増島 宏「長谷川博教授のこと」『社会労働研究』第19巻第1・2号所収、昭和48・3）。

多摩キャンパスの図書館の書庫に、寄贈したコレクション（二千数百冊）があり、歴史家の蔵書としてはまずまずのものだが、筆者はひまがあると、いつときその本をながめてすごした。

(77) 湯川和夫（一九一五）は、東京のひと。昭和十一年（一九三六）成城高校（理科2類）をへて、東京帝国大学文学部哲学科に入学し、卒業後大学院に進んだが、同十八年（一九四三）退学し、日本大学農学部予科専任講師となる。昭和二十四年（一九四九）二松学舎大学助教授、中央労働学園大学講師。二十六年（一九五一）六月同学園助教授、同年八月法政大学助教授。三十一年教授。その後は、社会学部長・常務理事・大学院委員会議長・評議員などを歴任。

多くの著訳書・論文がある。社会思想史を専門分野とした。その研究の一貫したテーマは、マルクス主義とのかかわりにおいてとらえた『民主主義論』という（高橋彦博）。小柄な体に闘志を秘めた教師である。一・二六事件が起った翌日、小田急線に乗って『反乱風景』を見るために出かけたが、

新宿駅の地下道で、反乱を鎮圧しに上京した、宇都宮師団の兵士らが整列しているのを印象ぶかく眺めたという（湯川和夫「社会思想史研究と私の思想の歩み」『社会労働研究』第33巻第3・4号所収、昭和62・3）。

昭和十一年（一九三六）に起った二・二六事件についていえば、事件が起った翌朝——いつものように人力車にのって聖子女子学院へ行こうとして、途中で反乱軍兵士に銃をつきつけられ、びっくりした体験を語ってくれた後年の英語女教師を筆者は知っている。

——銃をつきつけられたのは、ベルリンの検問所でロシア兵から小機関銃をむけられたのと、二・二六事件のときでした。
と、当時女学生であったその先生は語った。

(78) 芝田進午（一九三〇～二〇〇一）は、金沢のひと。東京帝国大学文学部哲学科を卒業。昭和二十八年（一九五三）法政大学社会学部助手となり、三十二年（一九五七）助教授、四十二年（一九五七）教授となる。が、五十年（一九七五）退職。五十一年（一九七六）広島大学総合科学部教授。平成五年（一九九三）退官。同六年（一九七六）聖泉短期大学教授。多くの著訳書がある。

人類生存の哲学をもとめ、平和運動、バイオ実験の危険、薬害エイズ問題などにたずさわった。

(79) 吉田秀夫（一八二二～？）は、福島の相馬のひと。二高をへて、昭和十一年（一九三六）東京帝国大学文学部社会学科を卒業。学生のと看、東大セツルメント活動に加わった。同年、産業組合中央会に入り、雑誌の編集や組織活動に従った。その後、全国農村保健協会などにつとめ、戦後は、日本文化厚生農業協同組合の顧問などを歴任した。昭和三十年（一九五五）法政大学社会学部の非常勤講師となり、社会保障論、社会政策史などの講義を担当し、同四十四年（一九六九）社会学部教授となった（大山博「故吉田秀夫教授の略歴と業績」）。わが国の社会保障運動の先駆者という。多くの著書・論文がある。

(80) 金山行孝（一九三〇～）は、福岡県のひと。戦時中は、勤労働員により、戦闘機「雷電」の製作現場に投げこまれ、主翼づくりをやらせられた。昭和二十八年（一九五三）千葉大学文学部生物学科を卒業した。卒業後、法政大学社会学部の研究助手となり、四十六年（一九七一）助教授、四十八年（一九七三）教授となった。昭和六十一年（一九八六）社会学部長、評議員、平成十三年（二〇〇一）定年により退職。下等脊椎動物における条件反射の研究、稚魚群における防衛条件反射その他の研究がある。理学博士。学位論文名は、「サケ科稚魚群における条件反射的研究」（東北大学）である。

(81) 土生長穂は、京都のひと。三高をへて、京都大学法学部に進み、昭和二十八年（一九五三）卒業。ついで大学院法学研究科に進学し、昭和三十年修士課程を修了した。翌年、法政大学社会学部の研究助手となり、講師、助教授をへて昭和四十四年（一九六九）教授となった。多くの著訳書があり、中心的研究分野は、アジア・アフリカの政治と民族主義、民主革命などである。この先生の表情はおだやかだが、闘志にみちた人である。



土生長穂教授

(82) 北川隆吉(一九二九)は、京城のひと。東京帝国大学文学部社会学科を卒業し、昭和三十一年(一九五六)専任講師として法政大学社会学部に奉職し、助教授、教授となり、昭和五十三年まで勤務し、その後名古屋大学教授となった。専門分野は、労働社会学であるが、マルクス主義社会学の立場から、地域社会学、政治社会学の分野において活躍している。多くの編著書がある。

昭和三十四年（一九五九）

石炭業界の不況、深刻化する。皇太子の婚礼。伊勢湾台風により、東海地方大きな被害をうける。多年の懸案であった戦争賠償問題がすべて解決する。BOACの日本人スチュワーデス殺人事件おこる。

この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

	第一教養部	社会学	社会学部助教授	北川隆吉
	第二教養部	社会学	教授	長谷川 進
		〃	講師	芥川集一
法学部	社会経済史	社会学部教授		倉橋文雄
	労働問題概論	教授		飯田貫一
	世界政治事情	助教授		松下圭一
	政治思想史	講師		平田重明
	社会思想史	〃		土井正興
	〃	教授		池島重信
文学部	社会思想史	第一教養部教授		乾 孝
	社会心理学	〃		本多弥太郎
	教育社会学	第二教養部講師		齐田 隆
	社会学	講師		山本 新
	社会思想史			

経済学部

社会政策
演習

教授

上杉捨彦

社会思想史

講師

坂田太郎

〃

〃

山本新

社会学部

(応用経済学科)

労働法
法学

学部長

中島正

社会問題総論
協同組合論

教授

村山重忠

世界経済論
社会労働運動史

〃

逸見重雄

社会調査
農業政策
農村問題

〃

柏野晴夫

労働史
フランス語
外書講読

〃

近江谷 駒

経済学
経済学史
外書講読

〃

田代正夫

社会思想史
現代思潮

〃

湯川和夫

社会問題特殊講義
農村問題

〃

山本 巖

日本経済史
社会労働運動史

〃

長谷川 博

近代政治史		
政治学		
外書講読	助教授	増島 宏
社会学心理学		
外書講読	〃	芝田進午
民法		
労働法	〃	秋田成就
世界政治論	専任講師	土生長穂
外書講読		
社会統計学	講師	正木千冬
社会保障		
社会政策史	〃	吉田秀夫
社会政策論	〃	田沼 肇
社会学特殊講義	〃	玉城 肇
〃	〃	岩井弘融
社会教育論	〃	碓井正久
社会学特殊講義	教育学科教授	乾 隆
	注・研究助手として	船山栄一 ⁽⁸³⁾

昭和三十五年（一九六〇）
 前年あたりから安保反対闘争が活発化し、自民党が単独裁決を強行した。東京では十万人規模の大デモ行進が、全学連は首相官邸や国会に突入した。第一次池田内閣の成立。三池炭坑の争議は、戦後最大のストライキとなる（二〇〇余日）。
 この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

第一教養部

社会学

第二教養部教授

長谷川 進

第二教養部

社会学

〃

長谷川 進

第一教養部助教授

高村良盛

法学部

社会経済史

教授

倉橋文雄

労働問題概論

世界政治事情

教授

飯田貫一

院
社会主义国家研究

政治思想史

助教授

松下圭一

社会思想史

講師

平田重明

〃

〃

土井正興

文学部

社会思想史

教授

池島重信

社会心理学

第一教養部教授

乾 孝

教育社会学

〃

本多弥太郎

社会学

第二教養部講師

齐田 隆

社会思想史

講師

山本 新

経済学部

社会政策

演習

教授

上杉捨彦

工学部

社会思想史

講師

坂田太郎

社会学

第二教養部教授

長谷川 進

社会学部
(応用経済学科)

労働法	学部長	中島 正
法学		
社会問題総論	教授	村山重忠
協同組合論		
世界経済論		逸見重雄
社会労働運動史		
社会調査		
農業政策		柏野晴夫
農業問題		
労働史		
フランス語		近江谷 駒
外書講読		
経済学		
経済学史		田代正夫
経済原論		
社会思想史		
現代思潮		湯川和夫
社会問題特殊講義		
農村問題		山本 巖
日本経済史		
社会労働運動史		長谷川 博
近代政治史	助教授	増島 宏
政治学		
外書講読		
社会心理学		芝田進午

民法	〃	秋田成就
労働法	〃	
世界政治論	専任講師	土生長穂
外書講読		
西洋経済史	〃	船山栄一
外書講読		
社会統計学	講師	正木千冬
社会保障	〃	吉田秀夫 ⁽⁸⁴⁾
社会政策史	〃	田沼肇
社会政策論	〃	玉城肇
社会学特殊講義	〃	岩井弘融
〃	〃	碓井正久
社会教育論	〃	乾隆
社会学特殊講義	教育学科教授	

昭和三十六年（一九六一）

池田首相、所得倍増計画を発表。ソ連が人間衛星第一号打あげに成功。またソ連は五〇メガトン級の核実験をおこなった。この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

第一教養部	社会学	文学部教授	本多弥太郎
第二教養部	社会学	教授	長谷川 進

法学部

〃

講師

芥川集一

社会経済史

教授

倉橋文雄

(留学中)

教授

飯田貫一

政治思想史

助教授

松下圭一

社会思想史

講師

平田重明

〃

〃

土井正興

文学部

社会思想史

教授

池島重信

社会学

第二教養講師

齐田隆

社会思想史

講師

山本新

経済学部

社会政策
演習

教授

上杉捨彦

社会学部

労働法

学部長

中島正

法学

社会問題総論
協同組合論

教授

村山重忠

世界経済論

〃

逸見重雄

社会労働運動史

社会調査

〃

栢野晴夫

農業政策

農村問題

労働史 フランス語 外書講読	〃	近江谷 駒
経済学 経済学史 経済原論	〃	田代正夫
社会思潮史 現代思潮	〃	湯川和夫
日本経済史 社会労働運動史	〃	長谷川 博
民法 労働法	〃	秋田成就
近代政治史 政治学 外書講読	助教授	増島 宏
社会心理学	〃	芝田進午
世界政治論 外書講読	〃	土生長穂
西洋経済史 外書講読	〃	船山栄一
社会学原論 産業社会学 社会学	〃	北山隆吉
マスコミ論 新聞編集論 外書講読	〃	佐藤 毅
社会統計論	講師	正木千冬

社会保障	〃	吉田秀夫
社会政策史	〃	
社会政策論	〃	田沼肇
社会学特殊講義	〃	玉城肇
〃	〃	岩井弘融
社会教育論	〃	千野陽一
社会事業論	〃	一番ヶ瀬康子

* 職場での人間関係——労使関係、工場と地域社会との関係などを研究対象とする社会学の一分野。アメリカで発達した。

注・研究助手として
 金山行孝
 齋藤弘孝ひろたか (85)
 中野収おさむ (86)

昭和三十七年（一九六二）

卸売物価の低落、株式の暴落がおこる。国民生活水準と消費経済とのへだたりが目立った。米ソの対立が激化し、キューバをめぐる核戦争の危機があった（キューバ封鎖事件）。芸能界の話題として、映画「キューポラのある街」が好評を博した。

この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

第一教養部	社会学	文学部教授	本多弥太郎
第二教養部	社会学	教授	長谷川進
法学部			

文学部

社会政策

教授

舟橋尚道

社会政治史

〃

倉橋文雄

労働問題概論

〃

飯田貫一

政治思想史

助教授

松下圭一

社会思想史

講師

土井正興

社会思想史

教授

池島重信

社会学

第二教養講師

齐田隆

社会思想史

〃

山本新

経済学部

社会政策

教授

上杉捨彦

演習

助教授

良知力

社会思想史

講師

中村常短

〃

〃

〃

社会学部

労働法

学部長

中島正

法学

〃

〃

世界経済論

教授

逸見重雄

社会労働運動史

〃

〃

農業政策

〃

〃

農村問題

〃

〃

労働史

〃

〃

フランス語

〃

〃

外書講読

〃

近江谷 駒

社会問題特殊講義	〃	山本 巖
農村問題	〃	
経済学史	〃	田代正夫
経済学	〃	湯川和夫
(留学中)	〃	
日本経済史	〃	長谷川 博
社会労働運動史	〃	
民法	〃	
労働法	〃	
労働科学	〃	拓殖秀臣
近代政治史	〃	
政治学	助教授	増島 宏
外書講読	〃	
社会心理学	〃	芝田進午
社会思想史	〃	
世界政治論	〃	土生長穂
外書講読	〃	
西洋経済史	〃	船山栄一
外書講読	〃	
財政学	専任講師	齊藤博孝
外書講読	〃	
社会問題総論	注・研究助手として	金山行孝
協同組合論	教授	村山重忠
社会学史	〃	
社会史	〃	本多喜代治

津安二郎の死去（60歳）。

昭和三十八年

米英ソの三方国間で部分的核実験停止条約が調印された。松川事件、上告審で全員無罪の判決おける。ケネディー大統領の暗殺。映画監督・小

文化史	〃	村井康男
外書講読	〃	
社会心理学	助教授	芝田進午
社会思想史		
社会学原論		
産業社会学	〃	北川隆吉
社会学		
マスコミ論		
新聞編集論	〃	佐藤毅
外書講読		
社会調査		
都市社会学	専任講師	石川淳志 ^{（87）}
産業社会学		
社会統計学	注・研究助手として 講師	中野 収
社会保障		正木千冬
社会政策史	〃	吉田秀夫
社会政策論	〃	田沼 肇
社会学特殊講義	〃	玉城 肇
〃	〃	岩井弘融
社会教育論	〃	碓井正久

同年十月二十五日——第二回社会学部学生大会が、午後十二時二十分から八三五番教室でひらかれた。出席者二一五名、委任状七二八名。新執行部から経過説明があり、授業内容の改善、富士見問題、反動理事による学園支配、私学法・大学法改正にたいする反対、生協食堂の設備にたいする注文などについて、反省と運動の展望について説明があり、大会決議のち三時すぎ散会した（『法政大学新聞』昭和38・10・25付）。

この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

	第一教養部	社会学	文学部教授	本多弥太郎
	第二教養部	社会学	教授	長谷川 進
		〃	講師	芥川集一
	法学部	社会政策	教授	舟橋尚道
		社会経済史	〃	倉橋文雄
		労働問題概論	〃	飯田貫一
		院 社会主義研究	助教	松下圭一
		政治思想史	講師	三辺博之
		〃		
	文学部	社会思想史	教授	池島重信
		社会学	第二教養部講師	齐田 隆
	経済学部	社会政策	教授	上杉捨彦
		演習		
		社会思想史	講師	中村恒短

	財政学	専任講師	齊藤博孝
	外書講読		
	社会問題総論	注・研究助手として	金山行孝
	協同組合論	教授	村山重忠
	社会学史	〃	本多喜代治
	社会史	〃	
	文化史	〃	村井康男
	外書講読		
	社会心理学	助教授	芝田進午
	社会学原論	〃	北川隆吉
	産業社会学	〃	
	社会学		
	マスコミ論	〃	佐藤毅
	新聞編集論		
	外書講読		
	社会調査	専任講師	石川淳志
	都市社会学*		
	産業社会学	注・研究助手として	中野収
			三溝信
			正木千冬
	社会統計学	講師	吉田秀夫
	社会保障	〃	岩井弘融
	社会政策史	〃	
	社会学特殊講義	〃	

* 都市を対象とする社会学の一分野。アメリカにおいて発達した。都市人口の構成―移動―都市の集团的心意(こころ)の特徴を問題とする。

昭和三十九年（一九六四）

第一次佐藤内閣の成立。公明党が結成大会。東京オリンピックが開催される。新潟大地震おこる。新幹線（東京—新大阪）が開通。
同年六月十八日——社会学部学生大会がひらかれた。出席者三〇八名。委任状五六〇。定足数は二五%以上。平和問題（原水爆運動）に討論が集中した（『法政大学新聞』昭和39・6・25付）。

この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

第一教養部	社会学	教授	本多弥太郎
第二教養部	社会学	教授	長谷川 進
	〃	講師	芥川集一
法学部	社会政策	教授	舟橋尚道
	社会経済史	〃	倉橋文雄
	労働問題概論	〃	飯田貫一
	社会主义研究	〃	松下圭一
	政治学原論	助教授	藤田省三
	社会思想史	〃	三辺博之
	政治思想史	講師	平田重明
	社会思想史	〃	土井正興
	〃	〃	
文学部	社会思想史	教授	池島重信

経済学部

社会学

第二教養部講師

齐田 隆

社会政策
演習

教授

上杉 捨彦

社会統計

助教授

是永 純弘

社会思想史

講師

中村 恒矩（こうき）

社会学部

世界経済論
社会労働運動史

教授

逸見 重雄

労働法

〃

中島 正

法学

〃

中島 正

農業政策

理事

栢野 晴夫

労働史

教授

近江谷 駒

フランス語

〃

近江谷 駒

海外留学

〃

田代 正夫

社会労働運動史

〃

長谷川 博

社会問題特講
農村問題

〃

山本 敵

民法

〃

山本 敵

労働法

〃

秋田 成就

社会法

〃

秋田 成就

社会法演習

〃

秋田 成就

近代政治史

〃

増島 宏

政治学

〃

増島 宏

国際社会比較研究

〃

増島 宏

マスコミ論			
新聞編集論			
外書講読			佐藤 毅
社会調査			
都市社会学			
産業社会学			
外書講読			
社会保障			
社会政策史		講師	吉田秀夫
社会学特殊講義			玉城 肇
〃			岩井弘融
中小企業論			内藤則邦

* 国家および地方公共団体の経済活動についての原理や政策を研究する学問。

昭和四十年年度の本学の入学式が、四月六日——千駄谷の東京都体育館でおこなわれた。会場は、一部、二部の新入生約七千名と父母でいっぱいになった。式典は午前十時から始まり、校旗を先頭に谷川徹三総長、各学部長および来賓などの入場ではじまり、十一時半ごろ終了した。

総長の式辞の主旨は——諸君は、昨年を一人も上まわる志願者の中から選ばれた人であり、これを誇りにおmoi、各自専門分野の探求やサークル活動に情熱を注いでほしい、というものであった。

大学とは何か。大学は学問を探求するところである。同時に人間をつくるところである、と語った。
この年の入学者数の内容は、つぎのようである。

〔学部〕	〔一部〕	〔二部〕
法学部……………	八一五名	四七八名
文学部……………	六〇七名	三二七名

経済学部……………	一、二二六名	八三五名
社会学部……………	六四五名	二二五名
経営学部……………	一、一一八名	
工学部……………	五八四名	

計 四、九九五名 計 一、八五〇名。

注・四月一日 編集部調べ 『法政大学新聞』昭和39・4・1付より。

入試は本来公正なものでなければならぬが、いずこの私学もうさんくさが付きまどっている。平たくいえば、うら口入学（うら門入学）が存在するのである。「今年度も入学における不正が行われたもようである。これはまだ表面化されていないが、昨年と同様に「総長ワク」なる奇妙な看板のうらに、約三十名の受験の成績が合格圏に満たなかった者が入学するという、いわゆる不正入学者がいることは、ほぼ明確となりつつある」〔『法政大学新聞』昭和39・4・10付〕。

これらのうら口入学者は、いかなるルートから入ってくるのか。同紙によると、おもに校友会——就職——銀行関係であるらしい。入学のさいに正規の入学金のほか、五〇万から一〇〇万円の寄付金を納入している。教職員組合は、この問題で学校側と団交をもち、今後はいっさい行わないとの言ちをとっている。

また同紙は、校友会の役員選挙にまつわる「黒いうわさ」も取りあげている。校友会の実力者数名が、票を金で買いあつめているらしい。

昭和四十年（一九六五）

山陽特殊鋼の倒産（戦後最大の倒産——負債総額は四八〇億円）。山一証券、経営に行きつまる。米軍機が北ベトナムへの爆撃を開始。沖縄が北爆の基地となる。大学紛争のきざし（慶応で授業料値上げをめぐるストライキ。東大では無給医局員の身分が問題化）。

またこの年理事会は、教職員のベース・アップによる赤字を理由に、学生側の値あげ反対の正しさをみとめながらも、授業料の値あげを断行した。文科系（法、文、経、社、営学部）が四万五千円から六万円になった。工学部の八万円はすえおきとなった。文科系の二部は、二万五千円か

ら三万円に値あげとなった。

本学の文科系（一部）に入学したばあい、入学金・授業料・施設費・諸会費をふくめると、初年度の納付金は総額十四万円になり、慶応のばあいは三十六万円かかり、自治会はストで抗議した（『法政大学新聞』昭和40・1・25付）。

この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

	第一教養部	社会学	教授	本多弥太郎
	第二教養部	社会学	教授	長谷川 進
	法学部	社会政策	教授	舟橋尚道
		社会経済史	〃	倉橋文雄
		比較政治論	学部長	飯田貫一
		政治学原論	教授	松下圭一
		政治思想史研究	助教授	藤田省三
		政治思想史	講師	三辺博之
		社会思想史	〃	平田重明
		〃	〃	土井正興
文学部		社会思想史	教授	池島重信
		社会学	第二教養部講師	齐田 隆
経済学部				

世界政治論 外書講読	助教授	土生長穂
西洋経済史 外書講読	〃	船山栄一
財政学 外書講読	〃	斉藤博孝
社会史 外書講読	講師	三溝 信
社会問題総論 社会問題基礎理論	注・研究助手として	金山行孝 安保哲夫
社会学史 社会学基礎理論	教授	村山重忠
国内留学	〃	本多喜代治
社会思想史 社会思想研究	学部長	村井康男 湯川和夫
社会学原論 社会学 社会学特殊研究	助教授	北川隆吉
マスコミ論 放送論 外書講読	〃	佐藤 毅
社会調査 都市社会学 外書講読	〃	石川淳志

	新聞学原論		
	外書講読		
	生物学	助手	中野 収
	生理学		
	社会保障		
	社会政策史	講師	金山行孝
	社会学特殊講義		吉田秀夫
	〃		玉城 肇
	〃		岩井弘融
	中小企業論		内藤則邦
院	社会学特殊研究 II		福武 直 ⁽⁹⁰⁾
院	〃		日高六郎 ⁽⁹¹⁾

昭和四十一年（一九六六）

政界の黒い霧事件（共和製糖不正融資事件）がおこる。公害問題——大気汚染、水質汚染、騒音などが深刻化。航空機事故が続発——全日空のボーイング727が、東京湾に墜落（一三三人全員が死亡）、BOACボーイング707が、富士山上空で空中分解（一二四名全員が死亡）。

大学紛争が多発——早稲田では授業料値上げ反対と学館の運営権をめぐるストライキ。明治大学では授業料値上げ反対でストライキ。中央大学では学館の運営をめぐるストライキ。

中国では文化大革命おこる。

この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

第一教養部			
	社会学	教授	本多弥太郎
	社会学特講	助教授	中川作一

第二教養部

社会学

教授

長谷川 進

〃

講師

芥川集一

法学部

社会政策

教授

舟橋尚道

社会経済史

〃

倉橋文雄

比較政治論

学部長

飯田貫一

社会主义研究

教授

松下圭一

政治学原論

教授

藤田省三

政治思想史研究

教授

三辺博之

政治過程論

講師

平田重明

社会思想史

〃

土井正興

〃

〃

池島重信

社会思想史

教授

齊田 隆

社会学

助教授

良知 力

社会思想史

助教授

中村恒矩

〃

講師

三輪昌夫

協同組合論

〃

栗原源太

経済統計論

〃

下山房雄

社会政策

〃

〃

社会政策

〃

〃

社会政策

〃

〃

社会学部

中小企業論
”
”
”
”
岩井弘融
内藤則邦

院 社会学特殊研究 II
”
”
”
”
福武直
日高六郎

通信教育部執筆担当教員

社会学
秋山 薫

昭和四十二年（一九六七）

第三十一回総選挙がおこなわれ、自民党が五割をわった。選挙結果は――

自民党	277	公明	25
社会	140	共産	5
民社	30	無所属	9

佐藤首相、アメリカの北ベトナム爆撃を支持。美濃部亮吉が都知事となり、革新都政がはじまる。

小笠原諸島の日本復帰がきまる。第三次中東戦争はじまる。企業公害二件――「イタイイタイ病」（富山県）、「阿賀野川中水銀中毒」（福島県）――の原因が、工場廃水と判明。

この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

第一教養部

社会学
学部長 本多弥太郎

社会学特講II
助教授 中川作一

第二教養部

法学部

社会学

〃

教授
講師

長谷川 進

国外留学

教授

舟橋尚道

社会経済史

〃

倉橋文雄

院
比較政治論
労働問題概論

学部長

飯田貫一

政治学原論

教授

松下圭一

国外留学

教授

藤田省三

社会思想史

講師

平田重明

〃

〃

土井正興

社会主義国家法

〃

藤田 勇

文学部

社会思想史

教授(理事)

池島重信

社会学

助教授

斉田 隆

経済学部

社会思想史

助教授

良知 力

〃

講師

中村恒矩

社会政策

〃

下山房雄

社会学部

院
世界経済論
社会労働運動史
国際社会比較論研究

教授

逸見重雄

国外留学

〃

中島 正

社会学史 外書講読	〃	三溝 信
生物学 生理学	助手	金山行孝
社会学問題総論 社会学問題基礎理論	教授	村山重忠
文化史 外書講読	〃	村井康男
社会思想史 社会思想研究	〃	湯川和夫
社会学原論 社会学 社会学特殊研究	〃	北川隆吉
マスキミ論 外国語	助教授	佐藤 毅 ⁽⁹³⁾
社会調査 都市社会学 外書講読	〃	石川淳志
産業社会学 外書講読	〃	平野秀秋
社会学 社会学史 外書講読	(第一教養部)	布施鉄治
社会保障 社会政策史	講師	吉田秀夫
社会学特殊講義	〃	玉城 肇

中小企業論
”
”
”
”
岩井弘融
内藤則邦

院 社会学特殊研究Ⅱ
院 社会学 基礎理論
”
”
”
”
福武 直
本多喜代治

昭和四十三年（一九六八）

GNPで日本は世界第三位、国民所得は第二位となる。ソ連軍がチェコスロバキアに侵入。アメリカが北爆を全面停止。パリでベトナム和平会談を開催。国税庁が日大の二〇億円の使途不明金を摘発したのをきっかけに、学園民主化を要求する紛争おこる。東大医学部が無期限ストに入る。成田空港闘争はげしくなる。三億円事件おこる。川端康成にノーベル文学賞。

この年の社会学系の科目担当者は、左記のとおりである。

第一教養部

社会学
教育社会学
社会学特講Ⅱ
教授 本多弥太郎
助教授 中川作一

第二教養部

社会学
”
”
教授 長谷川 進
講師 芥川集一
” 国枝芳夫

法学部

社会政策
社会学
社会学
教授 舟橋尚道
学部長 倉橋文雄



船山栄一教授

注

(83) 船山栄一(一九三〇〜)は、山形のひと。米沢興譲館中学(四修卒)をへて、昭和二十四年(一九四九)山形高等学校に進み、ついで東京大学経済学部経済学科に進学し、さらに同大学院社会科学研究所の修士・博士課程において、理論経済学および経済史学を専攻した。経済学博士。昭和三十三年(一九五八)法政大学社会学部研究助手となり、講師、助教授をへて、昭和四十四年(一九六九)教授。のち社会学部長、評議員となる。平成十一年(一九九九)定年をまたずに退職。健康上の理由と教育と研究に倦みつかれたことによるようだ。専門分野は、イギリス経済史、西洋経済史。多くの著書のほか、イギリス貿易に関する論文がある。

教授会がおわり、帰途についたころ、中央線の車中において、旧制高校時代の思い出話をきく機会があり、ひじょうにおもしろかった。

——英語の田中菊雄(一八九三〜一九七五)さんの発音は、英語にきこえず、日本語のようであった。



平井豊一教授 (故人)

この田中先生は、旭川駅所属の“列車ボーイ”をふり出しに、正則英語学校(夜間)にまなび、苦学力行のすえ、検定試験に合格し、旧制高校の教授資格をとった実力者であった。が、眼から学んだ英語であったから、発音がだめなのはわりもない。

官学のいい学生とくらべ、私学の学生はでこぼこが大きい。授業をやっている、ときに倦怠感を覚えるのはやむをえない。法政OBの英語教師・平井豊一教授(昭和八年「一九三三」法大英文科卒)は、人格学識ともなりっぱな教師であったが、「学生のことをよろしく願います」とよくいっていた。

筆者は先年、船山先生とたまたまお茶の水駅ちかくでばったり会ったとき、

——宮永さんも早く学校をやめなさいよ。

といわれた。が、筆者はただならんと定年までつとめ、多くの同僚教師にめいわくをかけた(笑)。

(84) 吉田秀夫(一九二二〜八二)は、相馬のひと。昭和八年(一九三三)二高をへて、東京帝国大学文学部社会学科に進み、同十一年に卒業した。学生時代、東大セツルメント活動に参加することにより、社会事業に関心をもつにいたった。大学卒業後、産業組合中央会、全国農村保健協会などにつ



本田喜代治教授（故人）

とめた。

(85) 斎藤博孝（一九三〇～一九〇）は、長崎のひと。旧制の竜崎中学をへて、昭和二十八年（一九五三）北九州大学短期大学部英商科を卒業。ついで法政大学社会学部応用経済学科に編入学し、昭和三十年（一九五五）卒業した。ひきつづき大学院に進み、同三十五年（一九六〇）博士課程を修了。その後、社会学部の研究助手、専任講師、助教授をへて昭和四十六年（一九七二）社会学部教授となった。のち社会学部長、評議員を歴任。

専攻分野は、財政学。アダム・スミスの財政論における国家の概念、明治期以来の財政史などについての論文がある。この先生はおとなしい、温厚な人であった。けっしてじぶんを偉くみせようとはしない人だった。学生時代、米軍のキャンプでアルバイトをしたことがあり、英会話ができたほか、ロシア語にも通じていた。

ちなみに米軍キャンプにおける仕事については、終戦後は超失業時代であったから、食べるためにやむをえず基地にしごとを求めて働かざるをえなかった日本人は多い。筆者が立川基地で翻訳のしごとをしていた人（のちに大学教授）から直かに聞いた話では、元陸軍少将も来ていたといひ、わからないところをよく質問されたという。

(86) 中野 収（一九三三～二〇〇六、評論家）は、松本のひとである。昭和三十二年（一九五七）東京大学文学部社会学科を卒業後、大学院に進み、修士・博士課程を修了。昭和三十五年（一九六〇）法政大学社会学部の研究助手となる。ついで専任講師、助教授をへて、昭和四十七年（一九七二）教授。専攻分野は、コミュニケーション論・記号論・メディア論であり、現代社会の文化現象、若者文化の分析において活躍した。多くの著書、論文がある。

(87) 石川淳志（一九三二～）は、長野のひと。昭和三十年（一九五五）東京大学文学部社会学科を卒業後、大学院に進み、同三十二年（一九五七）修士課程を修了。昭和三十七年（一九六二）法政大学社会学部専任講師。同四十六年（一九七二）教授。のち学部長、常務理事を歴任。労働組合、貧

困階層、スラム居住者、大都市社会と人間など、社会の底辺のひとびとに関する論文や訳書がある。

(88) 三溝 信（一九三四～）は、和歌山のひと。昭和三十三年（一九五八）東京大学文学部社会学科を卒業。ついで大学院に進み、昭和三十八年（一九六三）博士課程を修了。のち法政大学社会学部の研究助手となり、さらに専任講師、助教授をへて、昭和四十九年（一九七四）社会学部教授となる。ついで学生部長、社会学部長、評議員を歴任。専門分野は社会学史および社会学理論。単著のほか、多くの論文がある。

(89) 本田喜代治（一八九六～？）は、兵庫のひと。三高をへて大正七年（一九一八）東京帝国大学文学部文学科（フランス文学専攻）に入学したが、翌年哲学科（社会学専攻）に転科。同大学卒業後、文部省・司法省

関係の嘱託をへて大阪高等学校教授となるが、学生から満州帝国をどう思うかと聞かれ、あれは日本の軍閥がつくったからいい政権である、といったようなことを発言し、それが校長・隅本繁吉の耳に入り、思想傾向に問題ありとみられ、昭和八年（一九三三）三月付で職場から追われた（依頼免官あつかい）。

これは生前、フランス文学者の平岡昇先生から聞いた話であるが、旧制高校の校長は、絶大な権限をもっていたという。本多は太平洋戦争がはじまるまえ、唯物論研究会の活動がたつて当局に検束され、獄中のひとつとなった。戦後、立教の講師をへて名古屋大学の教授に就任し、昭和三十五年（一九六〇）法政大学社会学部に教授としてむかえられた。主著としては『コント研究——その生涯と学説』（芝書店、昭和8）のほか、多くの著訳書がある。なお、コント研究のほうは、戦後の昭和二十四年小石川書房から再刊された。

(90) 福武直（一九一七〜八九）は、岡山のひとつ。昭和十五年（一九四〇）東京帝国大学文学部社会学科を卒業。昭和二十三年（一九四八）東京大学文学部社会学科助教授。同三十五年教授。昭和五十二年（一九七七）定年退官、名誉教授。日本および中国の農村社会および家族社会学の研究で知られる。多くの著訳書がある。法政大学社会学部大学院へは非常勤講師として出講。

(91) 日高六郎（一九一七〜）は、社会学者・社会評論家・平和運動家。中国・青島チンタウのひとつ。昭和十六年（一九四一）東京帝国大学文学部社会学科を卒業。文学部助手、海軍技術研究所嘱託をへて、昭和二十四年（一九四九）東京大学新聞研究所助教授。同三十五年（一九六〇）教授となる。『戦後思想を考える』（昭和56）をもって毎日出版文化賞〔第35回〕。

(92) 平野秀秋（一九三二〜）は、台北のひとつ。昭和三十年（一九五五）東京大学文学部社会学科を卒業後、大学院に進み、同三十六年（一九六一）金沢大学文学部専任講師。昭和四十一年（一九六六）法政大学社会学部助教授、同四十六年（一九七一）教授となる。平成元年（一九八九）学部長、評議員。博学万能といわれたライブニッツ（二六四六〜一七一六、ドイツの哲学者）に関する多くの論文、政治学・文化論・大航海時代についての訳書がある。もともと医学者へのみちを歩んだが、文学部の講義を聴講するうちに社会学に興味をもち、社会学に転身したようだ。

(93) 佐藤毅トシ（一九三二〜）は、愛知のひとつ。一ツ橋大学社会学部を卒業後、同大学院に進み、昭和三十四年（一九五九）博士課程を修了。翌年法政大学社会学部専任講師。助教授をへて教授となるが、昭和五十三年（一九七八）退職し、一ツ橋大学社会学部に移り、同学部教授。のち大東文化大学法学部教授。多くの著訳書、編著がある。

(94) 庄司興吉（一九四二〜）は、山形のひとつ。東京大学文学部社会学科を卒業後、同大学院博士課程を修了。昭和四十二年（一九六七）法政大学社会学部助手となり、専任講師、助教授となるが、東大に移り、昭和六十二年（一九八七）文学部および人文社会学系研究科教授となる。平成十五年（二〇〇三）定年退官。のち清泉女子大学文学部教授。多くの著訳書がある。

ここまでが戦後二十三年間の法政大学における社会学系教育の歴史のあらましである。それになってきたのは、明治・大正から戦前に生れた人びとである。これをいま第一世代とすれば、そのあとにつづくのが戦後生れの第二、第三世代である。「社会学部」にかぎっていえば、昭和二十七年（一九五二）にそれが設立され、麻布校舎で授業がはじまったとき、教員はわずか十数名であった。が、時を経ることにその数はふえ、こゝろにち教授会（二学科制―応用経済〔昭和32年〕―一九五七年の設置〕と社会学〔昭和35年〕一九六〇年の設置〕の構成員は六十余名もおり、大世帯となっている。

昭和五十九年（一九八四）には、多摩キャンパスへの移転にともない縦わりの一貫教育がはじまり、二部は市ヶ谷キャンパスに残留した。多摩への学部移転にさいして、学部の新しい教育改革と理念に共鳴する教員が十数名教養部（一教、二教）より移籍した。それが結果においてよかつたのか悪かつたのかわからないが、このことによって社会学部はさらに拡充された。筆者も便乗組のひとりであったが、およそ組織のなかでうまく生きることができないため、ずいぶん酒のさかなになったようである。

しかし、社会学部はじつに寛容な職場であり、筆者のような型やぶりの人間が停年をまとうできたのは、諸先生のおかげである。三十六年間学校や学部のためになることは、何ひとつしなかったが、教育（めったに休講はしなかった）とろくでもない研究だけは、まじめにやっかつもりである。

平成三年（一九九二）十一月二十日（金）～二十一日（日）の三日間、多摩キャンパスの百周年記念館やA棟大ホールにおいて、学部創立四十周年記念の「国際シンポジウム」が、諸外国からの大勢の学者を招いて盛大に開催された。

平成十三年（二〇〇一）——大学院社会科学研究所に、政策科学専攻が設置され、翌年メディア社会学科が設けられた（一学部三学科）。

社会学部は、こゝろにち多摩の幽すいひの地（けしきよく、しずかな環境）において、挑戦と進化をつづけている。一学部三学科——社会学科、社会学政策学科、メディア社会学科——から成り、さまざまな選択と系統的な履習ができるように、七コース・八プログラム制をとっている。すなわち、

環境政策コース

産業・企業コース

コミュニティ・デザインコース

人間・社会コース

メディア社会コース

メディア文化コース

国際社会コース

多摩の「アカデミア」（学問の森）は新鋭の気にもち、そこで教鞭をとる者はみな戦後生れの若い世代であるが、多士せいせい——すぐれた人材のあつまりである。左記に職階と氏名のみをしるす。

〔教授〕

荒井容子

荒木暢也

池田寛二

稲増龍夫

宇野 斉

大崎雄二

岡野内 正

奥 武則

金原瑞人

川俣雅弘

上林千恵子

公文 溥

小林直毅

斎藤友里子

島本美保子

壽福真美

白鳥 浩

鈴木 智之

関口 浩

滝沢カレン

田口博雄

田嶋淳子

田中 充

田中優子（法政大学総長）

徳安 章（常務理事をへて現在学部長）

中筋直哉

長谷部俊治

原田悦子

平塚真樹（常務理事）

藤田真文

堀川三郎

間島正秀

増田正人（常務理事）

鞠子 茂

水野節夫

一 法政大学における社会学のあゆみ——略年表

- | | |
|-------|---------|
| 吉村真子 | 樋口明彦 |
| 諸上茂光 | 濱中 春 |
| 二村まどか | 三井さよ |
| 鈴木麻美 | 矢部恒彦 |
| 〔准教授〕 | 佐藤修一 |
| 金井明人 | 糸川正人 |
| 菊澤佐江子 | 菊沢佐江子 |
| 越部清美 | 北浦康嗣 |
| 佐藤成基 | 高 美哥 |
| 謝 荔 | 沢柿教伸 |
| 白田秀彰 | 慎 蒼宇 |
| 鈴木智道 | 〔専任講師〕 |
| 鈴木宗徳 | 堅田香緒里 |
| 津田正太郎 | 多喜弘文 |
| 土橋臣吾 | ジョージ・ハン |

明治十三年（一八八〇）四月……………東京府駿河台北甲賀町十九番地（現・日大病院があるあたり）に、「東京法学社」（法律塾と弁護士事務所をかねる）を設立。のちの法政大学の母体。

明治二十二年（一八八九）……………和仏法律学校の誕生。

明治二十五年（一八九二）……………教頭ボアソナード、日本における労働問題について講演。

明治三十六年（一九〇三）……………財団法人 和仏法律学校を法政大学と改称。

明治四十一年（一九〇八）ごろ……………大学部政治科において、「社会学」（選択科目）をおしえる。担当者は不明。予科の教員・高山兼吉が。

大学令により、財団法人政法大学となる。

大正九年（一九二〇）……………大場実治、予科において社会学をおしえる。

大正十一年（一九二二）……………法学部に文学科、哲学科を新設し、法文学部となる。

大正十二、三年（一九二三～一九二四）ごろ……………高田保馬、文学部において社会学をおしえる。

大正十三年（一九二四）九月……………松本潤一郎が教授にむかえられ、法文経学部で、社会学・社会学演習・社会学特殊研究などを担当。

大正十四年（一九二五）……………「政法大学社会学会」の発会。以降、例会（研究発表）や公演会などをひらく。

昭和二年（一九二七）……………蔵内数太その他の講師が出講。

昭和六年（一九三一）……………社会学専攻生の必修科目（二科目以上）、選択科目（四科目以上）きまる。

昭和九年（一九三四）十一月十三日の夜……………丸の内「マール」において、「社会学座談会」がひらかれ、松本潤一郎・三木 清らが出席。

昭和十三年（一九三八）……………「……専攻」という呼称が、学科となった。たとえば、哲学専攻は、哲学科。社会学専攻は、社会学科というふうになる。

昭和二十七年（一九五二）四月……………旧中央労働学園大学と合併し、本邦初の「社会学部」が誕生。しかし、学生のためが悪く、教次にわたって学生を募集した。

昭和二十八年（一九五三）十月二十四日……………渋谷公会堂において、「政法大学社会学部創立記念講演会」を開催。

昭和二十九年（一九五四）……………社会学部祭が、麻布校舎において開催（11・1～3）。

昭和三十一年（一九五六）……………服部之聡（教授）が亡くなる。

昭和三十五年（一九六〇）……………社会学科設置（一学部二学科）。

昭和三十六年（一九六一）……………社会学部設立10周年記念講演会を開催。

昭和三十九年（一九六四）……………大学院社会科学専攻科に、社会学専攻（修士課程）が設置される。

昭和四十一年（一九六六）……………博士課程を設置。

昭和五十九年（一九八四）……………多摩キャンパスへの移転はじまる。縦わり一貫教育の開始。二部は市ヶ谷校舎にのこる。教養部（一

教、二教）より、十数名移籍する。

平成三年（一九九二）……………多摩キャンパスにおいて、「国際シンポジウム」を開催（11・20～22）。



社会学部設立10周年記念講演会（昭和36年 [1961]）

平成十三年（二〇〇一）……………大学院社会科学研究所に、政策科学専攻を設置。
 平成十四年（二〇〇二）……………メディア社会学科を設置（一学部三学科）。多摩の現況——一学部三学科——七コース・八プログラ
 △制をとっている。

あとがき

三十年以上も身をおき世話になった社会学部——いいもわるいもその想い出は、かぎりなくなつかしい。筆者などは毒にも薬にもならぬ人間であり、学部のためには何も貢献せず、勉強だけさせてもらった。おかげで二十年ほどの空っぽの部分をいくらか埋めることができた。多少、駄文がかかるようになったのもこの学部のおかげである。

人から受けた恩義は、石にきざめ、というが、凡庸な人間にながでできるか。何か学部のためになることはないか。いろいろ思案していたら、法政大学における社会学というテーマを思いついた。

学部そのものの歴史については、座談会「社会学部二十年」（雑誌『法政』第20巻第12号所収、昭和46・12）、「1 社会学部前史」（記述は昭和二十六年「一九五二」からはじまり、『法政大学百年史』に収録——五七七〜六四四頁まで——昭和55・12）、栢野晴夫教授の「社会学部三十年をふりかえって」（『社会労働研究』第28巻第3・4号所収、57・5）、高橋彦博名誉教授の「社会学部五〇年史」（『法政大学戦後五〇年史』に執筆したものを、『法政大学社会学部五〇年誌』に再録、平成14・10）などがある。

が、法政における社会学教育の前史（明治から戦前まで）の部分がふれられていない。だれもこの種のテーマに興味がなかったのか。またどこから手をつけてよいのかわからなかったかのいずれかであろう。ひとつには初期の資料は散逸し、社会学の創始にかかわる資料がないからである。いったいだれが本学においてはじめて社会学を講義し、またその類縁科目をおしえたのか。筆者などはひじょうに興味のあるところである。

時代的にいえば、社会学教育がはじまったと考えられる明治四十年代から大正——昭和期（終戦）までの部分が明らかにされていなく、ほとんど抜け落ちている。この空白の約四十年間を埋めたいと思ったのがこの研

究をはじめた動機である。原史的なものに接しえなかったが、二次資料（『社会学雑誌』『社会学徒』など）のバックナンバーや『法政大学大学史資料集』（第1集から第20集——昭和53・3〜昭和62・3）から、関連項目をひろうことによって、ある程度すきまを埋めることができた。

空白の約四十年分と戦後の七十余年分をたすと、法政大学の社会学は、ゆうに百年以上の歴史をもっていることになる。初期の社会学の性格や内容に踏みこむことはできなかったが、本稿を法政における社会学教育の前史の概要とみていただけると幸いである。

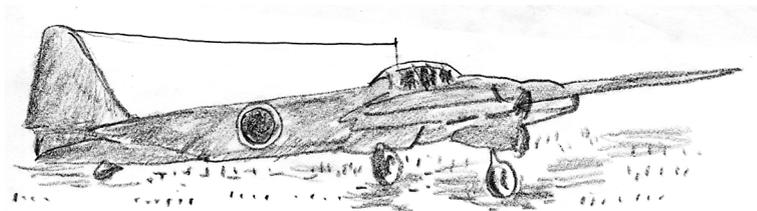
戦後七十数年になる。ほとんどの日本国民は、もはや太平洋（大東亜）戦争のことなど知らぬ世代に属している。筆者などは戦争ちゅうに生まれ、空襲警報のさなか、防空ズキンをかぶり母親の背におんぶされ、逃げまわっていた組である。赤ん坊であったから戦時中の記憶はない。亡くなった母によると、手数のかからぬ子どもであったという。空襲警報が出て、体をゆするとすぐ起き、母の背に手をまわしたというから、子ども心に戦争はこわいものだとということが身にしみていたようだ。いま醒めやすいのは戦時体験から来ているのであろう。

法政で教鞭をとり、停年や病気で退職していった古い世代の教師のなかには、暗い戦時下の体験というものがおりやしみとなっていたり、あるいは苦い体験となって残っており、そういった過去をひきづって生きている人もいる。本学に勤めたおかげで、元職業軍人、元学徒兵、外地からの引揚げ者、軍需工場員、軍国少年、といった人たちから、貴重な体験談を聞きかきかいにめぐまれた。

いまこの稿を書いているとき、三十数年まえの秋——幕府海軍の資料をたずねて江田島（広島県南西部、明治二十一年「一八八八」海軍兵学校が開設され、いま自衛隊術科学校がある）をおとすれたことを思い出す。見学希望者は、一日に二回きまった時刻にしか構内に入れない。筆者は何の前ぶれもなく、突然衛兵所にあらわれ、法政大学のものです、これこれの用でやって来た、と告げたら、広報課の士官が一名やってきて、「ご案内いたします」といって敬礼し、付ききりで案内してもらった。広報のえらい士官とも会ったが、予科練（海軍飛行予科練習生の略。高等小学校、旧制中学二年修了ていどの学力を有する志願兵）のさいこの生徒であったという。こわおもての、いい気合いの人だった。

兵学校がもっていた約四万点の資料は、連合軍に接収されると思ってぜんぶ焼却した。ただしネルソン提督の遺髪だけは、三重県山中のある神社にかくしたという。

会話のなかで、法政の卒業生・久納好孚（くのりこうふ）（一九二一〜四四、愛知県出身。神風特別攻撃隊——大和隊の隊長、最終階級・海軍少佐）のことを聞いた記憶があり、いまおもいだした。神風特別攻撃隊（敷島隊）の隊長・関行雄（海兵の出身）が特攻一号とみられているが、



陸上爆撃機“銀河”（乗員3名，全幅20.05メートル，全長15メートル，最大速度546キロ）。



青木多喜二教授（故人）

じつは久納こそが第一号であるらしい。
昭和十九年（一九四四）年十月二十一日——零戦に爆弾を装着し、計三機でフィリピンのセブ基地を出撃した。他二機は悪天候のため目標（空母）を発見できず帰還した。が、久納機だけはレイテ湾に突っ込んだようである。……

社会学部に第一教養部から移籍した青木多喜二教授（体育、故人）は、台湾沖航空戦（昭和十九年「一九四四」十月十二日～十六日）の生き残りである。銀河（日本帝国海軍が開発した双発爆撃機。大型の急降下爆撃機として開発したのだが、一式陸上攻撃機とも戦いに投入された。生産数一、一〇二機）にのり、出撃し、生死の関頭（かんとう）に立ったが、被弾し、やっとのことで基地にもどった。これは本人から直かに聞いた話である。

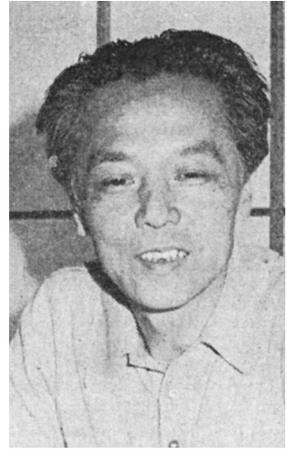
青木教授は、昭和十八年九月——法政大学の予科を修了し、同月海軍飛行科予備学生として入隊した。終戦の翌年四月——復員すると、経済学部へ復学し、二十四年三月に卒業した。そして同年四月から予科に助手として勤務した。えらぶらずたかぶらず、温厚な教師だった。筆者は、多摩校舎における最終講義をきいた。

台湾沖航空戦は、台湾がアメリカの機動部隊の空襲をうけたことにはじまり、豊田大將は本土の基地から、延べにして九四五機をもって、敵空母、戦艦、重巡の大群を追っかけたが、わずかに重巡二隻（キャンベラ、ヒューストン）を大破させただけであった。失った飛行機は一七四機であった。



増島 宏教授（故人）

増島 宏教授（政治学、故人）は、二・二六事件の当日、開成中学の試験をうけ、昭和十九年（一九四四）十月一高をへて東京帝国大学法学部政治学科に入学した。が、同年十二月に出征した。見習士官として満州におもむき、終戦後、ソ連の捕虜となり、三カ年ラーゲル（収容所）でくらし。のちからも帰国をはたした。昭和二十四年（一九四九）



田沼 肇教授 (故人)

東大に復学し、学部および大学院で政治学をおさめた。在ソ抑留期間ちゅうの話を書けなかったが(苦い体験をたずねるのは悪いとおもって……)、それがどんなに苛酷なものであったかじゅうぶん想像できる。

黒パン(ライ麦および唐もろこしの粉が原料)をかじり、野草(よもぎ、あかぎ、たんぼぼ、いらくさなど)をカンズメの空カンや飯ごろで煮てビタミンCをおぎなったかも知れない。筆者が帰還兵(元将校)から聞いた話では、町中のゴミ箱のフタをあけ、ジャガイモの皮、ネギの切れはしまで口にしたりという。またシベリアには黒っぽい大蛇がいて、それをつかまえ、ステーキにして食べたという。抑留者は「馬糧(うまの食糧)を食わされた。みな栄養失調に苦しみ、体力のない者から先に亡くなった。……」

ソ連は国際法により、将校に労働を強制しなかったが、大尉以下の尉官は、強制労働に従事したようである(山田 明「抑留三年ソ連報告」『日本週報』昭和24・6)。

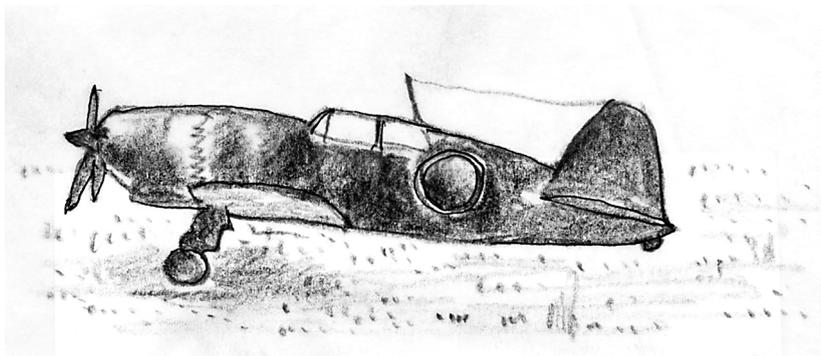
田沼 肇教授(社会政策、労働問題)は、東京空襲(5・25)によって家を焼かれ、勤労働員で軍需工場で働かされた貴重な体験をもつ教師だった。昭和二十年(一九四五)八月に入営することになったが、その直前に終戦をむかえた。

旧制高校二年生のとき、徴用(国家の命により、強制的に国民を一定のしごとにつかせた)で、板橋の志村にある巨大な工場でジュラルミンの圧延伸長工として働かされたが、当時社会のエリートだった者が、生れてはじめて工場の生産現場に投げこまれたことは大きなショックであると同時に、強烈な体験であったという。

しかし、その工場では戦時ちゅう、労働者のあいだに戦争に反対するうごきがあった。――反戦ピラなどをつくる地下運動である。

この先生は、戦後東大の経済学部になんだが、復員学生らといっしょにやったことは、壕舎生活者(焼け跡や防空壕でくらす人びと)の実態調査であった。これは生きた学問のはじまりであり、本人は「わたしにとって本当の大学の始まりでした」と語っている(田沼 肇「社会政策論」最終授業)。

昭和三十年代のはじめごろ、筆者は麻布六本木の聖ヨゼフ修道院ちかくの高台の空地――そこに焼け残った土蔵があり、その床下を住いとする中年男性二人をみたことがある。これはいまでいうホームレス、壕舎生活者であろう。そのとき相手と何を話したか、いま思いだせないが、お



局地戦闘機“雷電”のスケッチ。



金山孝行教授

そらく生活のことであろう。

田沼先生と似たような体験をもつのは、金山行孝名誉教授（生物学、生理学、理学博士）である。

この先生は、旧制中学の二年生か三年生のとき、勤労動員で工場ではたらかされた。零戦（日本海軍の艦上戦闘機の称。昭和十四年「一九三九」初飛行。最大速度五六五キロメートル。旋回性にすぐれ、航続距離が大きいことでもこんどの戦争で活躍した）のあとに、局地戦闘機（空母からでなく、陸上基地から発進する）としてつくられたのが“雷電”（昭和十七年「一九四二」初飛行。生産数六二一機。連合軍の暗号名は Jack）である。

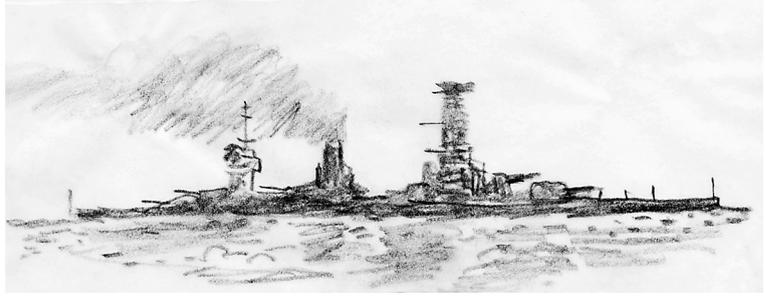
金山先生は、戦時ちゅう工場でこの雷電の主翼づくりに従事した。戦後、千葉大にまなび、東北大で学位をとり、法政の社会学部につとめた。学園紛争時代に研究室をくちやくちやくに荒され、学校をやめようかと思った。が、恩師にさとされ、停年まで勤務をつづけた。本人いわく、このときいっさいの研究活動を放棄した、と。以後、この先生を支え、たのしみとしたのは、知人との南方における戦跡めぐりであった。

この先生と会うと、筆者はいつも敬礼していた。あるとき、海軍式の敬礼は、「こうやる」と教えてもらった。気力がさかな先生である。



秋田成就教授

秋田成就名誉教授（労働法）は、五高をへて昭和十七年（一九四二）十月、東京帝国大学法学部政治学科に入学したが、翌年十二月海軍兵科の予備学生として召集された。海兵団で訓練をうけたのち、予備士官として、戦艦山城（大正六年「一九一七」就



戦艦・山城 (39172t.速力24・6ノット)。



日本海軍の士官用略帽

航、昭和十九年「一九四四」姉妹艦の扶桑くわなとともにスリガオ海峡で戦没。三九一七二トン、機関や主砲の配置に問題があり、何度も改装をくり返した。太平洋戦争ちゅう内地で練習艦として使われたが、戦況の悪化にともないレイテ沖突入作戦に投入されたに搭乗した。

山城における任務は、連合軍の無線通信のやりとりを受信すること(傍受)であったという。のち海軍軍令部(旧日本海軍の中樞機関。国防、用兵上の統轄事務をおこなった)に転属となり、終戦をむかえた。海軍軍令部におけるしごとについては、聞きもしたが、情報の収集、伝達、処理を中心とするものであったのか。ともかく海軍の中

樞にいたから、極秘事項によく通じていたはずである。

金山教授が往時について、何か文字にすることを勧めたようであるが、本人はその気はまったくなく、秘して語らなかつたようである。しかし、青春の一時期を海軍ですごしたことに郷愁があり、いまもときどき軽快にして、勇壮な行進曲「軍艦マーチ」(鳥山啓作詞、瀬戸口藤吉作曲。「守るも攻むるも……」の歌詞とともに)は日露戦争後、第二次世界大戦まで愛唱された)のレコードをきくらしい。士官服はひどくいたみ、いまはな

海軍士官は、ふつうの兵とちがって、さっそうとした姿や行動をもとめられ、またそれなりのエリート意識を植えつけられた。たとえば、

- 一 だれとでも口をきくな。
- 一 汽車にのったら、一等車にのれ。
- 一 めしを食うときは、一流のレストランに入れ。

この先生は、昭和二十年(一九四五)九月——東大法学部に復学し、学部・大学院をおえたのち社会科学研究所の助手となり、昭和三十二年(一九五七)四月、法政大学社会学部に助教としてむかえられた。平成五年(一九九三)三月定年で退職し、名誉教授となった。

大患をわずらい、戦後ずっと片肺だけで飛行をつづけてきたが、いまでも壮健である。

どんな学校に入り、どんな職場につとめるのも「縁（えにし）のように思える。筆者などは戦争中に生まれ、戦後の雑草教育をうけて育ったものだが、にがい思い出しか残っていない。先日、林望さん（一九四九）、国文学者、エッセイスト）の「父をかたる」というテーマの講演をNHKのラジオで聞いたとき、筆者と似たような体験をしていることを知って、ひじょうに親近感をおぼえた。

いなかの公立の小・中学校は、それほどすさんではいなかったが、東京はかなり荒れており、イジメ・暴力・恐喝、ヤクザ予備軍（グレン隊）の巣であった。とても勉強するような環境でなく、檻のなかで調教をうけるような教育だった。林望さんは、人心が荒廃した公立の中学校に学んだが、勉強のよくてできる生徒だったから、受験校の都立戸山高校に入り、そこから慶応の文学部に進んだ。

この高校に合格したことを中学の担任に報告したとき、先生は——あんな、林よ、この中学で学んだことを悪夢だとおもってくれ。といったという。

昭和二十五年（一九五〇）の春——筆者は親がどこかで見つけてきた予科練の服（紺サージ）をつくり直したものを着せられ（これでも当時はよい服装だった）、海軍の飛行兵がかぶる皮製の帽子をかぶり、あみあげくつをはき、フロシキに若干の教科書をつつみ、小学校に上がった。が、担任は女のおっかない教師であり、進駐軍の婦人兵の払い下げを改造した服を着ていた。

あるとき、宿題としてでんでんむし（かたつむり）をつかまえて、学校にもってくるようにいった。が、どこでどうつかまえてよいかわからず、学校をさぼり、城址公園の堀に石を投げて遊んだのち、てきとうな時刻に帰宅して、すずしい顔をしていたら、親にバレこっぴどくしかられた。

学校の勉強など、おもしろくなかった。だから授業中は上の空。ぎっしりつまったせまい教室で授業をうけるのが、ひどく苦痛であった。やがて家業は破産し、ジプシーのような漂泊の生活がはじまった。小学校も満足に出していないが、担任の先生の温情で仮に卒業させてもらった。中学時代は監獄生活のようなものであった。

親はむりをして子どもを高校にあげたかった。が、入れそうな学校はなく、能力に応じた私塾のような学校に入った。そこを出て何とか大学の門をくぐり、卒業後いったん社会に出て、多少の軍資金をたくわえたのちワセダの大学院に入った。が、ようやく学校らしい感じがした。さいわい大学院の五年間はほぼタダ同然で勉強させてもらった。

戦前の私学と戦後のそれとの大きなちがいは、大学が大衆化し、学生数が大はばにふえたことである。おおかたの私学は学生がおさめる授業料と国からの助成金とでくらしの経営をつづけている。私学のマス教育は避けえないとしても、教育の中味の充実をはかり、少しでもすぐれた学生を社会に送り出さぬかぎり生きのこれない。入学志願者は、大学が名声を博し、卒業生の声望が高まれば、おのずとふえるものである。

さいわい本学は、伝統校であり、就職もわるくないことから、受験生に人気がある。が、問題は志願者がふえ、入学がむずかしくなったということだけでなく、マス教育の現状をいかに受けとめ、教育の「実」（中味）をよくするかということである。これは大手私大の共通した悩みである。

おしなべて世間的評価の高い大学ほど、授業中しずかである。評価のひくい学校ほど、ざわざわしている。マイク片手の数百名も入る教室では、学生は傍聴的になり、もう芝居小屋の観客とかわりない。学生はうつろな目をし、ところどころでとなりと私語をはじめ。それがやがてザワメキに変わる。こうなると教師は、芸をみせる単なる役者とかわらない。大教室の講義では、受講するほうで注意が散漫になり、なにも頭に入らない。

大学の使命は、学問研究と教育であり、研究者がいなくなり、単に学内行政官と事務屋だけになると、もう大学の体をなさず、会社とおなじである。近年、そういった中小の私大がふえているらしい。

本学のばあい、研究室、研究所の施設はわるくないとしても、図書館のいっそうの拡充が望まれる。大学の心臓部は図書館であり、そこを研究の本拠とするようにすべきである。具体的には図書館を高層化し、図書（原資料的なものをあつめ、大型コレクションを購入する）のいっその充実をはかる。せっかく多くのすぐれた研究者を擁しながら、その研究を発展させ、それを教育に生かしてゆく体制にほど遠いようだ。このことは、すでに昭和三十年代後半に指摘されている。

ちなみに六大学の図書館がもつおよその蔵書数は、つぎのようである。

東京大学……九四〇万冊	早稲田大学……五〇〇万冊（うち貴重書一七万冊）
慶応大学……二六〇万冊	明治大学……二一〇万冊
立教大学……一八〇万冊	法政大学……一七〇万冊

いまや大学は、旧帝大といえども、むかしのような権威はない。最高学府としての特殊な地位をうしない——大衆化し、就職するための機関（職業の予備知識をうるどころ）となりつつある。いふなれば国民学校フオクレンシュルのようになって来ているということである。

大・中教室におけるマス教育と対極的關係にあるのは、ゼミナールである。ゼミナールは、いうまでもなく、大学の教育方法のもう一つの柱である。これは教師の指導のもとにおこなう学生の共同研究であり、演習ともよばれている。ゼミナールは指導する教師と学生とが人間的な接触のできる唯一の場であり、少人数から成るのはよい点であるが、そこに入るのは競争であるから、**「狭き門」**である。

本来この小さなクラスにおいて、教師から研究の方法や報告書レポートのつくり方、作文のきびしい訓練をうけるのがふつうであるが、じっさいこれらのけいこは不在のようだ。文科省の設置基準すれの、また少ない教員（非正規教員だけ）で運営している劣悪私大のばあい、**「演習」**ゼミナールと銘うっているクラスの人数が、五、六十名。演習とは名ばかりで、ふつうの講義とかわらず、教師の独演であるらしい。

学生側からいうと、てきとうに勉強し、何とか単位をもらい、就職できれば幸運組である。学生は受動的に教育をうけ、研究は教師がやるものであると考えているようだ。卒業論文は、じぶんが研究した問題をまとめ、教授に提出して審査してもらうのだが、個人的に研究のやり方を指導してもらわないと、ものを書いた経験のない若者にとっては雲をつかむようなもので、まったくお手あげである。が、中にはおどろくような秀作もある。

二十代の筆者は、まったく文章がかげず、書いてもゴツゴツしたものしか書けなかった。文章はあるていど訓練と才能のようだ。

就職のとき企業の面接をうけた学生は、社会学部というのを何を学ぶところか、とよく質問されるらしい。が、この学部は、他学部とくらべ、どうも性格が明確でないようだ。人はこの社会をはなれて生きていけないが、社会において生起する問題、社会で生きるうえで必要な知識（政治・経済・法律・環境・福祉・マスコミ）をすべて学べるのが社会学部の特色であろう。ひとことというと、**「生きた現実に学ぶ」**所が社会学部ということである。

本学の学生の中には、志しに反して入学して来た者もいるであろうが、たとえふかい愛校心をもちえないとしても、学校にたいして愛重あいちょうの念（愛し大切にする気持）をもってもらいたいものである。ひとはむりをしてじぶんの能力以上の学校に入る必要はまったくないのである。能力に見あった学校、特色ある学校をえらんで、好きな勉強をすればよいのである。大学でまなぶことの要諦（かなめ）は、人間学——いかに生きるか

である。

本学における“社会学”教育の起源と発展の歴史を^{けみ}開いてみてわかったことは、概しいよい人材（教師）をえていることである。とくに戦前の法政の教師はきら星のごとく、名の通った人物ばかりである。教員にもいろいろあって、じっさいはピンからキリまでであるが、本学を出て母校の教師になった者のなかには、けっして他とくらべて遜色のない優秀な者もいる。こんにちわが国の大学教授の中には、じっさい世界的に通用する者はすくないといわねばならぬ。じぶんだけがすぐれていると自負している者が多い。が、その知識にせよ、語学力にせよ、じつにうすっぱらなものであることに気づいていないのである。

また教員といえども、俗気がつよく、名利にとらわれる。組織のなかで、古顔となると、しぜん牢名主のようにふるまう。いわゆる大学ゴロである。かって国公立私学を問わず、どの大学にも大ボス、中ボス、小ボスがいて組織を差配していた。が、ろくな手合いではなく、だいたいが俗儒であった。酒と学内政治が大好きな連中であった。いまはどうか知らないが、むかしは旧日本陸軍の内務班的体質があり、班長（軍曹または伍長）が大きな顔をし、新兵をいびっていた。筆者は度胸がすわっていたから、相手を屁ともおもわず、どの学校でも班長殿と大ゲンカし、首になりそうになった。

さて法政大学は、他の多くの大学を押しつけて、平成二十六年（二〇一四年）「スーパーグローバル大学」として採択されたが、これも大学として世間的評価があがったことの左証であろう。この慶事に加えて、同年春には、社会学部教授・田中優子が、六大学初の女性総長に就任した。新総長は、国内的には“市民のための大学”を旨とし、対外的には世界に通用する法政大学を目標に、さまざまな改革にまい進している。

彼女は刻々と変化している世界情勢——グローバル化に着目し、卒業生が環境の急変にもこまらなようなカリキュラムを作ることを考えている。いまは時代のうごきに安閑としてはられないのである。大学も教員も世界の変動とともに変わる必要があり、大学の主役である学生の未来を展望し、社会ぜんたいにアンテナを張っている。

法政大学ではじめて社会学を手ほどきした先達とその学統につながる人々、社会学部創設のメンバーなど、要するに草創期の教員のほとんどは亡くなり、いまは第二、第三世代の人たちが、学部で教育と学生指導を荷なっている。この学部は、今度どのように進化発展してゆくのか、あの世からみすえたい。

あとがき

法政大学における社会学教育は、すでに明治十年代から二十年代にかけて始まっている他の諸大学とくらべるとそのスタートがおそかったようだ。本学における社会学的研究の第一声は、明治二十五年（一八九二）十一月に、和仏法律学校の教頭であったボアソナードが、『日本における労働問題』と題して、講演したのが最初である。もっともその研究発表は、二次資料（報告書）によったもので、識者の反駁をうけ、あまり評判はよくなかったようである。

法政大学にいつ社会学の講座が設けられたのか、その時期ははっきりしない。が、筆者は明治末年と考えている。本学において社会学を教えた先駆者は、

高山兼吉（一八八九〜？）

大場実治（一八九一〜一九五七）

らである。両人は東大文科大学哲学科の出身であり、社会学を専攻した。

高山は大正七年（一九一八）秋から社会学をおしえ、大場は同九年（一九二〇）から予科でフランス語と社会学を教授した。当時、社会学といえば、社会学概論のようなものであった。

この二人が社会学教育の先鋒とすれば、二番手は高田保馬（一八八三〜一九七二）であり、かれは大正十二、三年ごろ非常勤講師として、社会学をおしえたようである。

ついで三番手として、理論社会学の専門家——松本潤一郎（一八九三〜一九四七）が、大正十三年（一九二四）専任教員として法政大学にむかえられた。かれは本学における社会学の中心的な教員として活躍し、いわば中興の祖である。法政に来たとき、働きざかりの三十二歳。若い教師であった。

かれがまず手をつけたのは、社会学教室の育成と発展であり、翌十四年（一九二五）には、「法政大学社会学会」を創設し、その会長となった。法文学部は、大正から昭和初期にかけて、新進気鋭の教師をあつめ、その陣容の充実は、都下でも異彩を放ったらしい。たとえば、社会学関係の講師では、左記の人びとが教鞭をとった。

- 桑田芳蔵（一八八二～一九六七、心理学者。東大助教）
- 戸田貞三（一八八七～一九五五、社会学者。東大助教）
- 小林輝次（一八九六～一九八九、社会運動家・経済学者。のち法政を追われた）
- 藤田喜作（一八八七～一九七三、社会学者。東大講師）
- 吉田九郎（不詳）
- 財部静治（一八八一～一九四〇、統計学者。京大教授）
- 小林照郎（一九一九～？、社会学者。福岡県立女子専門学校校長）
- 海野幸徳（一八七九～一九五五、社会学者）
- 蔵内数太（一八九六～一九八八、社会学者）
- 喜多野清一（一九〇〇～一九八二、社会学者）
- 林 恵海（一八九五～？、社会学者。東大助手）
- 岸本誠二郎（一九〇二～一九八三、理論経済学者）
- 黒川純一（一九〇一～？、社会学者。巢鴨高商教授）
- 森 東吾（一九〇九～二〇〇一、社会学者。法大OB、のち阪大教授）

これらの講師はいかなる授業をおこなったものか、その中味については不明な部分が多いが、一部わかっている。たとえば、東大から週一回教
えにきた藤田喜作のばあい、漫談風の講義であったと想像されるが、昭和二年（一九二七）ごろ、教場で数名の学生を相手に授業をやっていたが、
大内義明という社会学専攻の第一回生に、

——おまえは社会学なんてゆう学問より、おれの漫談でもきいていた方が、実社会に出てよっぽどためになるよ。
と、ひやかされたという（大内義明「社会学要綱の出版」『松本潤一郎 追憶』所収、精興社、昭和28・6）。また藤田が得意としたのは政治や社
会問題批判であつたらしく、

——君たちはいらんことを詰め込まれているから、ぼくの時間だけは、じっさいの街頭の社会学をきくとよい。
と、実践社会学をおしえた（高山 昭談）。

この教師は、風刺や批評などを入れておもしろく話す話術にたけていた。それも自然に、さり気なく話し、どれもおもしろかった。とん知のきく男であった。筆者は少年から青年期にかけて、藤田のけいがいいに接し、その講話を何度もきいた。

松本御大おんたいの講義ぶりはどうであったのか。この先生は少壮から壮年期にかけて、法政以外に、私学では中央大学・東京女子大学・上智大学などに、官学では東京帝国大学・東京高等師範学校（東京文理科大学）などに講師として出講した。東大の講師になったのは昭和四年（一九二九）四月であり、同十四年（一九三九）三月までの約十年間教鞭をとった。

松本は昭和十年前後——学説史の研究に従事していた。東大では講師として学説史、階級論などを講じた。学史の講義には、当時学生であった清水幾太郎（一九〇七〜八八、昭和期の社会学者・評論家）が、毎日出席していた。特殊講義の階級論は二十九番の大教室でおこなわれ、他学科の学生もたくさん詰めかけた。松本の講義は、やや演説口調であり、博引傍証、かつ自信にみちた印象をあたえた。

講義において外国学者の名前がたくさん出てくるのであるが、いちいち「かの」「あの」「よりも文語的表現」をつけて、

——かのマックス・ウェーバー。
とか、

——かのウォルムス（一八六九〜一九二六、フランスの社会学者）
と、いった風にか呼んだ。

学生にはいんぎんな物腰で接したが、同学の士にたいしては、ときに攻撃的であり、思いきった批判や反駁をおこなった。人に屈せぬ強い気性をもっていたようだ。

法政大学においてその講義をきいた一人に森 東吾（一九〇九〜二〇〇一、のち阪大・大手川学院大学教授）がいる。かれは昭和四年（一九二九）四月、文学部哲学科（社会学専攻）の学生となり、新館の大講堂で社会学概論をきいた。受講生は三、四百名。法・経・文各学部との合併授業であった。まだ社会学のいろはもわからぬ新入生であった森は、松本のあかぬけした容姿と温雅な人柄が発する雰囲気から、この新興の科学が、なにかスマートで、魅力なるもののような気がした。

松本の声はかん高いほうであり、原書の参考書を縦横にあげ、ときに黒板に円や三角形を器用にかき、比喩的な説明をくわえた。まじめな学生

は、そのままの図形をノート之余白に写しとった。あるとき、先生の口調がふだんより速くなり、学生はノートがとれなくなり、すこしさわぎかけた。このとき松本はいった。

——講義にはおのずと緩急（おそいのと早いのと）があり、すこしぐらい、ノートをとりづらくとも、説明でくり返すこともあり、あとでノートの整理はできるはずゆえ、静しゅくにしてもらいたい。

と、学生をたしなめた。が、そのとき座が白けかけたのを見て、すぐ

——たいへん、つまらぬことを申しましたが。……

と、苦笑し、何事もなかったかのように講義をつづけた。

森は法政に在学ちゅう、松本の特殊講義——「階級論」「宗教社会学」「社会学史」「社会学史」などをきいたのであるが、松本がいちばん力を込めて講じたのは、社会学概論であつたらしく、本人もそれにいちばん張りを感じていたらしい。

松本はじつに多くの書をよみ、欧米の文献に通じていた。あるとき、松本の下で社会学を教えていた東大の後輩——喜多野精一（一九〇〇〜八二、のち九大教授）に、学者の本分について語ったとき、こんな話をした。

——喜多野さんも、三十までひと仕事しないといけません。

当時、三十三であつた喜多野は、どう返事してよいかちょっと困った。とりあえず、

——はい。

と、返事をした。そして、

——じつはある方（櫛田民蔵——一八八五〜一九三四、明治から昭和期の経済学者）から、三十五までといわれて、それでも心細いのですが、と、まぬけなことをつけ加えた。松本は相手の顔をしばらく見、またすこし考えるようにして、

——やはり三十までですよ——三十まででないといけない。

と、くり返した。

松本のいいたかったのは、学問の土台づくりは、若いうちでないとだめだということらしい。

大正末期になると、法律・政治・文学・経済の各学部において社会学系列の科目がおしえられるようになり盛観を呈した。

大正十四年（一九二五）「法政大学社会学会」が設立されるや、講演会・研究発表会（大会、列会）などが活発化し、また研究発表の機関誌『法政大学論集』（大村書店）が誕生した。

昭和期に入ると、法文学部において、逐次補充人事がおこなわれ、新たに財部、小林、海野、蔵内、藤田、林、岸本、喜多野、星野、大島、南、林（敬三）、下条、秋保、小野、大橋、森、鈴木、林（達夫）、黒川、菊池などが講師として招かれ授業を担当した。明治末年から戦前までの法政の社会学は、整備の時代のそれであり、発展の時代をむかえるのは、戦後になってからである。

戦後、社会学系の科目を担当するメンバーもだいたい入れ代った感がある。が、なんといっても法政にとっての大きな出来ごとは、昭和二十七年（一九五二）四月旧中央労働学園大学と合併し、全国にさがけて「社会学部」が誕生したことである。発足当時のこの新学部は、学生があつまらず、苦しい船出であった。が、年をへることに応募者もふえ、こんにちの繁栄を謳歌するまでになった。

社会学部創始のころの教員には、一騎当千のつわもの（勇士）——マルキストが多くみられるが、かれらはみな信念の人、闘う人であった。ひとりひとりの経歴をながめると、特異な傾向と才能のもちぬしであることがわかる。有名人と無名の人がいりまじっているが、それがまたこの学部のユニークなところである。

創立期の社会学部は、わずか十三名の専任教員をもってスタートした。その氏名と担当科目は左記のとおりである。

〔専任教員の氏名および在職期間、担当科目〕

村山重忠（昭26・8～44・8） 労資関係論・協同組合論

三隅達郎（昭26・8～27・3） 社会事業概論

逸見重雄（昭26・8～45・3） 労働運動史

籠山 京（昭26・8～28・3） 労働科学・生活問題

中島 正（昭26・8～52・3） 労働法

栢野晴夫（昭26・8～57・3） 農村問題・農業政策

春宮 千鉄（昭26・8～27・3） 憲法

近江谷 駒（昭和26・8～40・3）労働史

藤崎英義（昭26・8～34・3）計画経済論

柘植秀臣（昭26・8～46・3）生物学

西村伝三（昭26・8～28・3）物理学

村井康男（昭28・6～48・3）文学

湯川和夫（昭28・8～61・3）哲学

注・『法政大学百年史、昭和55・12』、五八三頁を参照し、手をくわえた。

この時期の社会学部は、手ぜまながらも麻布校舎において、“縦わり”の一貫教育（一年次～四年次生まで）をおこなった。これは中央労働学園大学の伝統をうけついでのものであった。

また新学部の機関誌『社会労働研究』（平成11年『社会志林』に改題）の創刊号が、昭和二十九年（一九五四年）一月刊行された。さらに社会学部学会も発足し、その記念講演会を催した（昭和28・10・24、渋谷公会堂）。

昭和三十年代から四十年代にかけて、つぎのような学部の変革（移転、学科の創設、カリキュラム改革、教員の充実）、記念式典などがおこなわれた。

昭和二十九年（一九五四年）……法政大学創立七十五周年。麻布校舎において学部祭（11・1～3）。芝公会堂で、服部之総教授の記念講演会。

昭和三十三年（一九五七年）……応用経済学科の誕生。

昭和三十五年（一九六〇年）……応用経済学科について「社会学科」が創設される。「社会学科設置記念講演会」（11・29）。「種時く人」四十周年記念講演会（7・1）

昭和三十六年（一九六一年）……社会学部創立十周年。その記念式典および講演会を開催（本校五一教室、12・2）。この日、講演おわってヴァイオリンやピアノの演奏がおこなわれた。

昭和四十年（一九六五）ごろから激動の十年をむかえた（大学紛争時代に突入）。

昭和四十六年（一九七一）……「社会学部創立二十周年記念祝賀会」（私学会館ホール、10・9）。

やがて社会学部創立当初からの古参教員の大部分は、退職したり、亡くなったりしたが、順次補充人事がおこなわれ、組織の充実をはかり、四十年代から五十年代にかけて、第二、第三世代の新進気鋭の教員をむかえた。

〔氏名〕	〔就任年月〕	〔担当科目〕
湯川 和夫	昭和26・8	現代思潮
*栢野 晴夫	昭和26・8	農業政策
*増島 宏	昭和28・4	近代政治史
金山 行孝	昭和29・4	環境論
*田代 正夫	昭和29・4	経済原論
土生 長穂	昭和31・4	世界政治論
秋田 成就	昭和32・4	労働保護法
船山 栄一	昭和33・4	社会経済史
北川 隆吉	昭和33・4	労働社会学
*中野 収	昭和35・4	情報の理論
*斉藤 博孝	昭和36・4	財政学
石川 淳志	昭和37・4	都市社会学
*田沼 肇	昭和38・4	社会政策論
三溝 信	昭和38・4	社会学史
平野 秀秋	昭和41・4	社会工学

吉田 秀夫	昭和44・4	社会保障論
*中林賢二郎	昭和46・4	社会労働運動史I
田中 義久	昭和46・4	社会科学方法論
嶺 学	昭和47・4	労働経済学
公文 溥	昭和47・4	日本経済論
廣田 明	昭和47・4	産業社会学
高橋 彦博	昭和47・4	社会労働運動史II
相田 利雄	昭和49・4	中小企業論
稲上 毅	昭和49・4	社会学原論
*高藤 昭	昭和50・4	社会・経済法論
盛田 常夫	昭和50・4	国民所得論
大山 博	昭和51・4	社会福祉論
寿福 真美	昭和51・4	社会思想史
岡本 義行	昭和51・4	経済学特殊講義
水野 節夫	昭和51・4	社会心理学
板倉 達文	昭和52・4	技術論
諏訪 康雄	昭和52・4	労使関係法
石坂 悦男	昭和53・4	マスコミ論
矢澤修次郎	昭和53・4	社会史
須藤 春夫	昭和54・4	広告論
*船橋 晴俊	昭和54・4	社会工学

注・昭和五十四年（一九七九）度。*は故人。

昭和五十九年（一九八四）には、社会学部は多摩キャンパスに移転し、縦わりの一貫教育がはじまり、教養部（二教、二教）その他から移籍者

が加わり、大世帯となり、その後も拡充をつづけ、こんにち一学部三学科（社会政策学科、社会学科、メディア社会学科）——七コース、八プログラム制をとっている。

この間に社会学部に勤務し、他に転出したり、亡くなったり、退職したりした教員は三十数名に上がるが、いまその氏名を省略する。これらの教員の多くは、若干の戦中派をふくむが、戦後生れである。いわば、第二、第三世代の人びとである。

社会学部の卒業生は、これまで四万人をはるかに超えているらしい。いま社会学部では、鋭意さらなるカリキュラム改革を押し進め、平成30年（二〇一八）からの実施をめざしている。また平成26年（二〇一四）度のスーパーグローバル大学事業の採択をうけて、学部教育のグローバル化へむけて、さまざまな施策に取り組んでいるという（前常務理事・現社会学部長——徳安彰談『法政大学社会学部 同窓会報 Vol.49』平成29・1・1より）。

〔追記〕さいこになったが、多年法政大学史の資料編纂委員でもあった文学部史学科の安岡昭男名誉教授（一九二七～二〇一六、日本近代史の訃報に接したので一言申しそえたい。この先生は兵庫県神戸のひとである。史家・津田左右吉が教鞭をとった独逸学協会中学校にまなび、千葉大学工学科をへて戦後、法政大学の歴史地理科、史学科に入学し、卒業後は大学院に進み、修士・博士課程において日本史学を専攻した。指導教授は、明治維新史の大家・藤井甚太郎（一八八三～一九五八）であった。

法政大学文学部史学科は、ほかに日蘭交渉史の板沢武雄、日欧交渉史の岩生成一（学士院会員）など、一流の教授陣を擁していた。安岡先生は多くの著編書、論文を残したが、日本文字にひじょうに精通していた。史料のよみ方、誤字脱字の有無にきびしかった。あるとき拙稿のゲラに目を通してもらったことがあり、その折まちがい指摘された。が、そのときの表情はふだんの温雅の顔とちがって、ひじょうにきびしいものであった。どちらかといえば地味な学者であったが、その学識たるや底の知れないものがあった。法政生え抜きの優良種^{サラブレッド}であった。ごめい福を祈ります。